陣内遺跡

日向遺跡総合調査報告　第二輯

宮崎県教育委員会

陣内遺跡

日向遺跡総合調査報告第二輯

宮崎県教育委員会

例　言

一、本書は昭和三十五年九月六日より同十二日に至る間宮崎県教育委員会により実施された西臼杵郡高千穂町陣内遺跡の調査報告書である。

一、本調査は、日向遺跡総合調査の第二年度として計画、実施されたものである。

一、本書の執筆者は次の通りであるが、本文のすべてにわたって日本考古学協会委員長、東京大学講師八幡一郎氏の御高閲を得た。

鈴木重治

（第一章調査の目的と経過）

（第二章　遺　跡）

（第一節　遺跡をめぐる環境）

（第二節　包含層の状態）

（第三章　遺　物）

（第一節　土器及び土製品）

（第二節　石器及び石製品）

（第三節　自然遺物）

（第四章　出土遺物の考察）

（第一節　陣内式の設定をめぐって）

（第二節　扁平打製石斧の用途を中心として）

賀川光夫

（第五章　九州に於ける縄文後期の一、二の問題―特に陣内遺跡に関連して）

（第一節　陣内三、四類土器の展開）

（第二節　所謂陣内式土器と縄文終末期）

一、実測図及び図版などの作成は賀川光夫、鈴木重治がおこなったが石器実測図のトレスにおいて、その一部を柳田純孝が協力した。

一、本調査によって出土した遺物は県立博物館に保管されている。

昭和三十七年三月

宮崎県教育庁社会教育課

陣内遺跡

目次

第一章　調査の目的と経過……1
第二章　遺　跡……9
第一節　遺跡をめぐる環境……9
第二節　包含層の状態……11
第三章　遺　物……19
第一節　土器及び土製品……19
第二節　石器及び石製品……30
第三節　自然遺物……40
第四章　出土遺物の考察……72
第一節　陣内式の設定をめぐって……72
第二節　扁平打製石斧の用途を中心として……76
第五章　九州に於ける縄文後期の一、二の問題……79
第一節　陣内三、四類土器の展開……79
第二節　所謂陣内式土器と縄文終末期……81

図版目次

図版目次

1 土偶……85
2 石棒……85
3 石刀……86
4 石刀……86
5 出土状況……87
6 出土状況……87
7 出土状況……88
8 出土状況……88
9 出土状況……89
10 出土状況……89
11 出土状況……90
12 出土状況……90
13 出土状況……91
14 出土状況……91
15 出土状況……92
16 出土状況……92
17 第四類土器……93
18 第四類土器……93
19 第五類土器……93
20 第五類土器……93
21 第六類土器……94
22 第七類土器……94
23 第五類土器　第八類土器……95
24 第六類土器……95
25 第七類土器……95
26 第九類土器……95
27 第九類土器……96
28 第九類土器……96
29 第十類土器……96
30 石棒……97
31 石鎌……97
32 石鎌……97
33 磨製石斧……98
34 磨製石斧……98
35 磨製石斧……98
36 磨製石斧……98
37 石匙……99
38 石匙……99
39 打製石斧……99
40 打製石斧……99
41 打製石斧……100
42 打製石斧……100
43 打製石斧……100
44 打製石斧……100

45 打製石斧……101
46 打製石斧……101
47 打製石斧……101
48 打製石斧……101
49 打製石斧……102
50 打製石斧……102
51 打製石斧……102
52 打製石斧……102
53 打製石斧……103
54 打製石斧……103
55 打製石斧……103
56 打製石斧……103
57 打製石斧……104
58 打製石斧……104
59 打製石斧……104
60 打製石斧……104
61 打製石斧……105
62 打製石斧……105
63 打製石斧……105
64 打製石斧……105
65 打製石斧……106
66 打製石斧……106
67 打製石斧……106
68 打製石斧……106
69 打製石斧……107
70 打製石斧……107
71 打製石斧……107
72 打製石斧……107
73 打製石斧……108
74 打製石斧……108
75 打製石斧……108
76 打製石斧……108
77 打製石斧……109
78 打製石斧……109
79 打製石斧……109
80 打製石斧……109
81 石庖丁様石器……110
82 石庖丁様石器……110
83 石庖丁様石器……110
84 石庖丁様石器……110
85 打製石斧……111
86 打製石斧……111
87 打製石斧……111
88 打製石斧……111
89 打製石斧……112
90 打製石斧……112
91 打製石斧……112
92 打製石斧……112

挿図目次

一　石棒……1
二　高千穂高校所蔵（陣内出土土器）……2
三　地形図（附近の主要縄文遺跡◎印陣内遺跡）……3
四　土偶……27
五　三角形土製品……28
六　石刀……31
七　石棒……32
93　挨形石器……113
94　挨形石器……113
95　浮子……113

実測図及び拓影

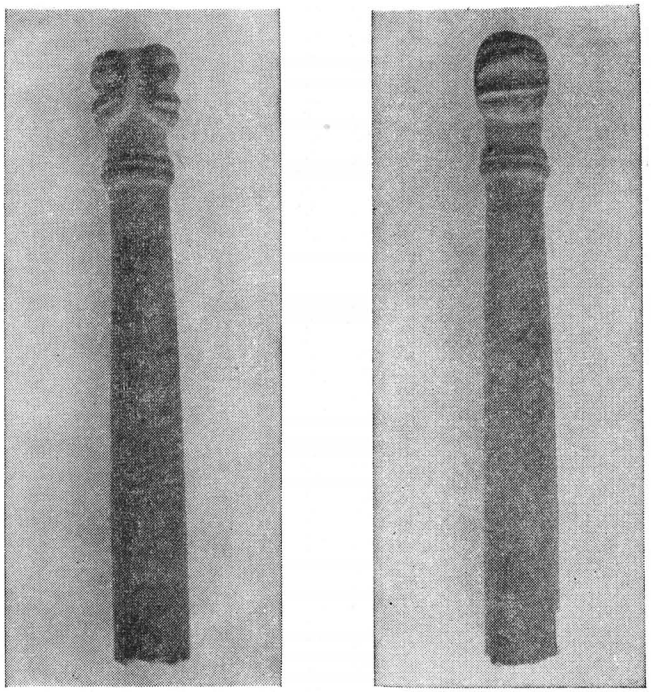
一　包含地附近地形図……16
二　第一区断面図……17
三　第二区断面図……17
四　第三類土器、第四類土器……41
五　第五類土器……42
六　第六類土器（陣内式）……43
七　第七類土器……44
八　第八類土器、第九類土器……45
九　第十類土器……46
十　第一類土器、第二類土器……47
十一　第三類土器、第四類土器……48
十二　第四類土器……49
十三　第五類土器……50
十四　第六類土器（陣内式土器）……51
十五　第七類土器……52
十六　第八類土器、第九類土器……53
十七　第十類土器……54
十八　磨製石斧……55
十九　石刀……56
二十　ポイント・ブレイド、……57
二一　石鏃……58
二二　石錐・石ヒ……59
二三　石ヒ……60
二四　石ヒ……61
二五　石錘・浮子……62
二六　石鎌……63
二七　打製石斧……64
二八　打製石斧……65
三九　打製石斧……66
三十　打製石斧、石庖丁様石器……67
三一　打製石斧……68
三二　打製石斧……69
三三　打製石斧……70

第一章　調査の目的と経過

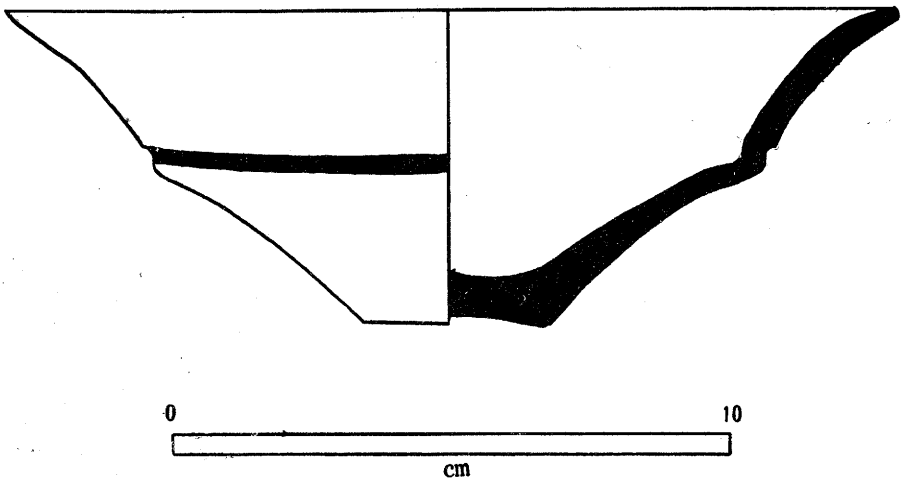
宮崎県教育委員会に於いて計画された日向遺跡総合調査は、昭和三十四年度の串間市下弓田遺跡①の発掘調査を初回のものとし、すでにその成果をみた。その第二回の調査として選ばれたのが当遺跡である。

当遺跡は、確認されてからすでに古いが、特に学界に於いて問題視されはじめたのは戦後のことであり、陣内公民館の新築によって、多くの資料が発見され、昭和二十七年四月十二日に地元の吉永仁氏により採集された石棒②によるところが大きい。（挿図1）西日本に於いて発見されている数の少ない資料でもあり、しかもその一端にみられる彫刻をめぐる問題にも興味が持たれたわけである。石器以外の土器についてみてもすでに高千穂高等学校をはじめ、高千穂小学校、岩戸神社宝物館などに収集されている資料から縄文後期より晩期にかけての土器片が多くみられた。その中で晩期の鉢と考えられ復元された土器（挿図2）が高千穂高等学校に保管されていることは、多くの研究者の知るところであった。

さかのぼって当遺跡附近の研究史に触れると、古くは明治時代にそ



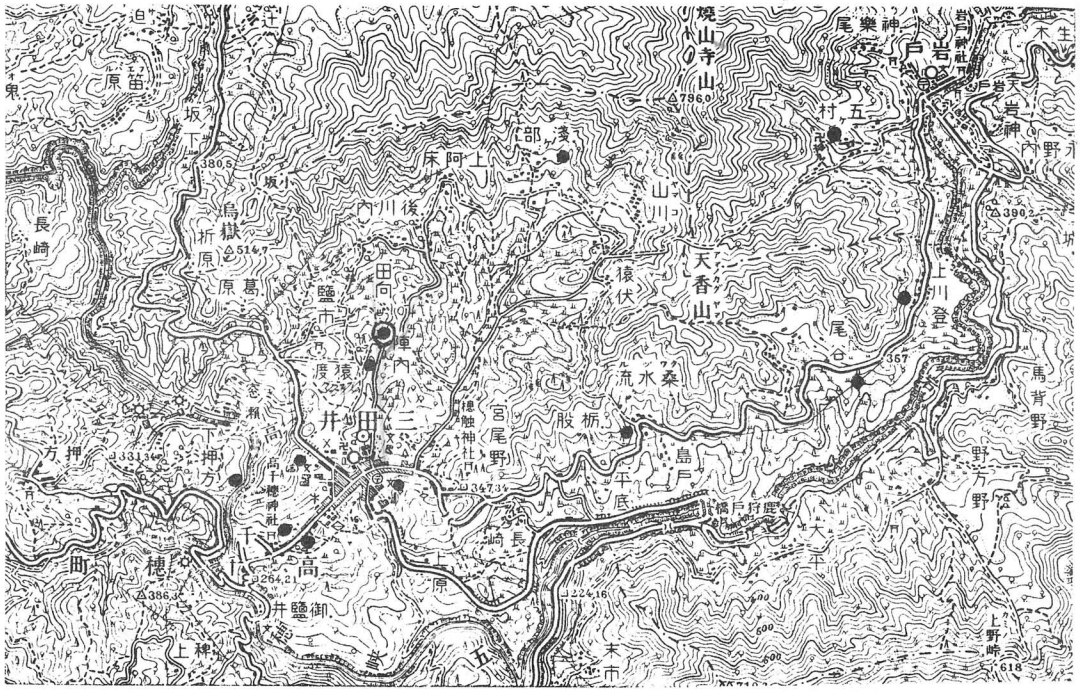
挿図1　石　棒



挿図 2　（高千穂高校所蔵）　陣内出土土器

の先駆がみられる。明治十年代の「従征日記」③には、石斧、石鏃などが図示されており、先史遺物が意識されはじめていたことがわかる。研究者によって扱われたものでないにしても学史上見逃すことが出来ない。学会に発表された最初のものとしては、明治二十年代に若林勝邦氏の報文がある。④ それによると三田井村（現高千穂町）上原平、同字十社明神の脇小字クルマノトウネ、同字浅ケ部、同岩戸道などから石器時代の資料が確認されている。その後明治の末頃から大正、昭和にかけて、多くの遺跡の確認が追加され、最近までに明らかになっているものは高千穂町内の縄文期の遺跡のみについてみても三十ケ所近くにのぼっている。ただそれらの遺跡のすべては、発掘調査の行なわれた例がなく、偶然の機会に採集されたものがほとんどであるが、現在岩戸神社の宝物館に収蔵されている宗コレクションをはじめとして、先にもあげた学校などの資料室によく収集保管されている。高千穂高校に保管されているものについては、柳宏吉氏の指導によって整理された目録が公表されている。⑤

陣内遺跡に限ってみると、柳宏吉氏による紹介⑥と神道文化会による高千穂、阿蘇の調査の一環として行なわれた乙益重隆氏の報文があり、同氏はその報告の中で陣内遺跡出土の土器を第一類から第六類までに分類し、後期の鐘ケ崎式から晩期の御領式の時期にわたる遺跡として把えている。⑦ 扱われた資料は高千穂高等学校及び高千穂中学校の資料を中心としたものであるが、今回の調査によってみられた資料と大差がないだけに、基本的に氏の見解を認め得るばかりか当遺跡の研究に当っては重要な報告といえる。



挿　図　3　　地形図　（附近の主要縄文遺跡　◉印陣内遺跡）

九州縄文式土器の後期の諸形式と考えられている鐘ケ崎式、西平式、三万田式及び晩期の御領式など、多くの土器形式のみられた当遺跡が編年をめぐる問題を中心として、多くの問題をもっていることは明らかである。

しかるに遺跡の所在する地点に保育所の新築が予定され、遺跡の破壊が恐れられた。破壊される以前に調査が要請されたことは、当遺跡が重要な意義を持つ点からしても喜ばしいことであった。

県教育委員会によって計画された行政上の目的は、そのまま学界の受入れるところとなり、縄文式後晩期の研究が、今回の目的となったことは当を得たものといえる。

次いで調査の経過についてその概略をたどっておこう。調査にあたっては、発掘を開始した前夜に、宿泊所にあてられた神州旅館に於いておこなわれた打合わせに従い、測量に吉野、鈴木があたり、遺物の整理を鈴木が受け持ち、総務を寺原が担当した。また作業の進行については、現地の状況より調査員を二班に分け、第一区八幡、賀川、日高第二区を鏡山、石川が担当するものとして進められた。

第一日　（九月六日）

午前九時より仕事が開始され、まず遺跡の観察が行なわれたのち、前夜の打合せの線にそって作業にかかることとしたが、調査以前に採集されている資料の出土状況にかんがみ、遺物の包含がところによって三米以上に及ぶものと予想され、トレンチの設定を見合わせた。かくて主要な包含地の東北部及び西部に走る新道に面した、はり出し部の包含情況をカッテングによって検討することから進めることとした。

このことから北東部の道を挾んで公民館に面した地点をⅠ区とし、西部の道に面した地点をⅡ区と呼んで整理を行なった。Ⅰ区、Ⅱ区の地区割りについては、新道が遺物包含地の存在によってカーブを余儀なくされた点に近く、A点を定め、それを基点としてB点及びC点をそれぞれⅠ区、Ⅱ区の端に設定した。従ってABを結ぶ線をⅠ区の南西の限界とし、ACを結ぶ線をⅡ区の東の限りとして区劃したことになる。

本日の出土の遺物は、土器についてみると三万田式の系列に属するものと、御領式の系列に属するものが主要なものとして採集された。また押型文土器も一片ではあるが、出土しており、かなりのバラェティが予想された。一方、石器に於いては石刀の一点を除いてすべてが打製のものであり、特に扁平な打製石斧がかなり出土し、土器との相関関係を追求する上で、興味がもたれた。調査第一日にして、早くも豊富な資料が採集され、調査員に多くの期待を持たせた。

第二日　（九月七日）

第一日の作業によって得られた所見から、第Ⅰ区及び第Ⅱ区ともに基本的に三十糎掘りを行なうものとした。第Ⅰ区に於いては一面～四面まで、計一・二米にわたる作業が進められ、特にはり出しの強いA点に近い部分が主要な調査地点となった。第Ⅱ区においては部分的に三十糎掘りを行なう条件がないほど、傾斜が急なため、A・Cの線を限りとして断面のカッテング作業をする中で、層位を意識しての発掘が進められた。出土の資料で特に興味のもたれたのは、Ⅰ区における土器について第一面及び第二面、すなわち地表より六十糎までの層位に於いて確認された、晩期の粗製深鉢片の一群と黒色研磨の浅鉢の資料であり、類例として、県下のものでは尾平野洞屈や松添貝塚、更に鳥帽子野遺跡などの土器との関連がしのばれるものが出土している。また同じくⅠ区に於ける第三面（地表六十一糎～九十糎）に於いて、前期の塞の神式の土器が一片のみであるが採集されたことによって、多量に出土し、主要な土器となっている三万田系、御領系の土器の包含状況に考慮されねばならぬ問題点が提起されたのと同時に、塞の神式の土器片自身が前期の資料としては単独の出土の為、その埋蔵状況に問題が生じた。一方Ⅱ区についてみると、C点に近い部分に於いて、層位的に最下部の黄色ローム質土層の上面に接するようなかたちで、混炭の黒色土層中に多くの西平式の土器片が出土している。この出土状況は安定したものと考えられ、プライマリーな埋蔵状況とみられた。石器については、Ⅰ区の第三面（地表下六十一糎～九十糎）に磨製ノミ型石斧が出土し、磨製石器の追加が得られた。

一般的にいって第二日の出土資料は、主要な点で第一日の資料と同様であり、三万田系、特に御領系の土器が圧倒的に多く確認されている。

第三日　（九月八日）

前日の作業をふまえて、更にその進行を試みた。第Ⅰ区に於いては第五面（地表下一・二米～一・五米）より、第七面（地表下一・八米～二・一米）までをA点に近い部分に於いて進めたが、すでに包含層の厚いことが確認されていることから、作業の進行に支障をきたさない範囲に於いて足場を作る必要が生じ、ほぼ一米巾の階段を作り、その部分の発掘は最終日に残された。このようになってようやく包含地の地層について見通しがもたれるようになった。すなわち第Ⅱ区のC

点寄りの地点に於いては、地表下八十糎内外にして見られた黄色ローム質土層が下層に形成されており、それが急な傾斜を持ってA点に向って降下し、A点に寄った地点に於いて地表下三米に達しているように予想されたことと、その上部の地層が混炭の黒色土層であって、Ⅱ区に於いて確認されたところから、これが遺物の包含の最下層になるらしいこと、更にその上層として粘質の褐色土層があって、主要な包含層の一つとなっているとの見通しを得たわけである。このことからⅠ区に於いては、A点からB点までの間、十二・六米をA点より二米の間隔で小区劃を設け区分することとし、Ⅱ区に於いてはA点よりC点までの間八米を同様に四小区に分け、夫々Ⅰ—A、Ⅰ—B…Ⅰ—F Ⅱ—A…Ⅱ—Dの名称を用いた。またこの日に行った附近のボーリングの結果から、包含地の東方に旧道を挾んで迫っている丘陵の崖面に形成されている灰白色の溶穴凝灰岩が、新道をへだてた公民館の前あたりにもみられることから、主要な包含地の無遺物層とみられた黄色ローム質土層の下部にも溶穴凝灰岩の形成が予想された。出土の遺物についてみると、第一日からの基調をなした土器群と大差がなかったが追加された資料として目にとまるものに、若干のツボがある。この時期の土器のセット関係についてこれまで調査された九州全体の遺跡をみても類例が少いことから興味ある資料となった。復元され得る資料としては、Ⅱ区より出土した大形の浅鉢を挙げることができる。土製品としては、メンコがⅠ区、Ⅱ区よりそれぞれ一個ずつ確認され、またⅠ区に於いて土器腹部の破片を利用したと考えられる有孔円板も出土している。また遺構として明確に確認され得ないまでも、何らかの石組みともみられたものが、Ⅱ区D点よりの黒色土層中に確認され長径三十糎に及ぶ角礫が二個、二十糎程度の間隔を置いて出土している。これは後日に問題を残すこととなった。

第四日　（九月九日）

作業は多少天候にわざわいされたが、その進行には特にとりあげる程支障はない。Ⅰ区に於いては、Ⅰ—2、Ⅰ—3区が主要な調査区域となり、遺物の量も他の東方の小区に比して圧倒的に多く、その第八面（地表下二・一米～約二・四米）と第九面（地表下二・四米～二・七米）が調査された。Ⅱ区に於いてはⅡ—C、Ⅱ—Dの小区に於いて、混炭の黒色土層の底面に近い部分から、西平式の土器片がプライマリーな状態で出土している事がますます確実に確認されるようになった。その下部にみられる黄色ローム質土層が無遺物層となっていることから、一時期の生活面がこの上部にあって、それが西平式の土器片の安定した出土状況によって察せられた。ただこの日まで出土している甕、深鉢、浅鉢、皿、壷などの破片が御領系、三万田系を主として確認されていながら西平式との関係においてその生活面が確認されていないのは、遺跡が形成された過程からくる地層の堆積状況の考察に関連して調査の後半にゆずらざるを得なかった。

この日の昼食後の一時を利用しての附近の地形踏査によると、包含地の位置する谷頭から北部は、谷を開いて迫田が営まれており、東部から南部、更に西部にかけてみられる弧上の丘陵の裾に水を集め、それを利用している田もみられる。しかし主要な水源は谷頭に近い谷の西部寄りの一個所にみられる湧水であり、囲りに小さな竹籔をもち脇

に水神が祀られている。附近の人達の一部には、現在でも飲料水に用いているとの事である。この湧水がいつ頃から使用され始めたかは知るよしもないが、おそらく相当に古いものであり、地点が多少異動しているとしても当遺跡が営まれていた当時に使用された水源と考え得る可能性がある。また包含地の背部の丘陵上の一部、特に西部の丘陵上には少量の土器片や石器などを採集し得ることから、当遺跡との関連を考える必要が生じるものとみられた。

第五日　（九月十日）

Ⅰ区においてはⅠA—10（地表下二・七米～三米）を主として検討した。この作業によると御領式の甕の破片が多く、それに伴って大型の深鉢が認められる。土器が多量に包含されているこの層は混炭の黒色土層として認められ、この下部にはすでに部分的ではあるが黄色のローム質土層の上面とみられる無遺物層があらわれ始めている。これまでの遺物の出土状況をみると、Ⅰ区に於いてはⅠAに最も多く包含され、次いでⅠB—2からⅠB—4までに多く含まれる。ⅠCに於いては地層との関連もあって上層に於いてのみ包含され、下層には出土していない。

更にⅠC、ⅠD、ⅠEと東進するにつれ、包含層が薄くなり、ⅠFに於いては溶穴凝灰岩の部厚い層が地表の近くまで認められる。従って主要な包含層は西寄りに存在することになり、Ⅱ区に於けるⅡA、ⅡB、ⅡC、ⅡDと漸次包含層が薄くなる傾向と合わせて原地形を復元して考えると、新道のカーブの部分に近く主要な包含地が所在したであろうことが考えられた。Ⅱ区に於ける出土遺物をみると、ⅡBに於いて西平式の土器片の附近からスレート製の小型有孔円石が新しく出土している。またこれまでの概念では御領式の器形として考えられる鉢に、三万田式の特徴的な施文とみられる扇状貝圧文や、ヒゲ状の細線羽状文を施した土器が確認されていることは、今後に問題を残す結果となった。一方地形図の作成にあたっては高千穂高校の林科の学生の参加を得て効果的な地形断面の作図をすることが出来た。この結果、ABを結ぶ線の延長上とC点に近い原点から湧水の所在する方向に地形の傾斜がみられ、全体を通じて東北の方向に流れる立地を確認し得た。

作業終了後、夜分に入って高千穂町押方の押方一蔵氏が同氏宅地内に於いて採集された縄文式土器を持参され、所見を求められた。すべて押型文であり、粗い殻粒文や粗雑な施文の山形押型文であった。底部はなかったが口縁部の断面がやや外反することが認められ、九州内に於いては出水下層式や小畑原式に関係の深いものと考えられた。

第六日　（九月十一日）

甕、鉢、皿、壷などの土器に於いては、これまで出土しているものと大差を認めないが、土製品に新資料を得た。ⅠA—10に於ける土偶と、ⅡBに於いて出土した三角形土製品、ないしは三角土偶がそれである。ⅠA—10の土偶は頭部の欠損を除いてほぼ完形に近いものであり、近くに角礫の出土を見た。これが土偶を埋蔵するにあたっての遺構か否かについては確証は得られなかった。一方ⅡAから脚台及び有孔円板が出土した。脚台は前日確認された鉢を主体とした三万田系の土器の下部より出土したことになる。ⅡBの下層より出土した復元可能の小鉢は器形に於いて御領式の様相が窺え、施文のテクニックは三

は三万田系の羽状文という特徴的な土器である。

石器では特に変化がなく、扁平な打製石斧が多く、石鏃は数を増し計三十点近くの出土をみたようである。作業の進行上、一部に残した階段部の点検を行なう必要が生じ、上部からはずしていったが、ここの調査に於いては姫島産と考えられる黒燿石を使用したバチ形の打製石器が出土し、また阿蘇産の黒燿石を原材としたかと思われる小形ブレイト状の石器が数点出土している。ⅡCに於いて出土をみた縦形の変質頁岩製の石匙も新資料となっている。

一方、自然遺物では前日来、炭化したトチの実が数を増しており、Ⅱ区に於いて比較的に量の多い獣骨片または骨粉もかなり出土し、サメの歯と考えられた魚骨もⅡCより採集されている。

夕食後、地元の要請もあって、中間的な報告会がおこなわれ、八幡石川、寺原が参加した。

第七日　（九月十二日）

前日までの作業で当初の目的をほぼ終了することになり、断面図の作成と無遺物層の最終的な確認のみを残すこととなった。前夜来の雨のため地表が洗われており、炭化したトチの実などはむしろ採集に好条件となり、中でもⅠA－11から小玉が採集されたのは幸運であった。この小玉を出土したⅠA－11に於いて、西平式の土器が出土しているが、これらの一群の土器をもって、遺物の包含が終るものとみられ黄色ローム質土層が全面に見出されている。断面図の作成も午後には終了し、これをもって今回の調査も一応の終止符を打つことが出来た。なお八幡は午前中に、日高、吉野は午後になって帰途につき、整理は賀川、石川、鈴木のおこなうところとなった。

午後賀川、石川が中心となって、地元部落の人達と座談会をもち、当遺跡の保護の問題が中心として話され、地元民の積極的な意見が聞かれた。

第八日　（九月十三日）

前日に終了した今回の調査も、資料の発送をもって現地に別れ、午後石川、寺原、鈴木による地元関係者に対する挨拶廻りによって一段落をみ、発掘された資料は県立博物館の保管するところとなった。

以上九月六日より、同十三日にわたる今回の調査は、宮崎県教育委員会を主催者とし、次の調査員によっておこなわれたものである。

東京大学講師	八幡一郎
九州大学教授	鏡山猛
別府大学教授	賀川光夫
県文化財専門委員	石川恒太郎
県文化財専門委員	柳宏吉
県文化財専門委員	日高正晴
大淀高校教諭	吉野忠行
県社会教育課主事	寺原俊文
県立博物館学芸員	鈴木重治

以上今回の調査の目的とその経過について概要を記したが、さきにも触れた通り調査の目的の一部に行政上の問題もあり、調査期間が短期間でもあったため、当初計画した遺跡の全面的な発掘がおこなえず今後に問題を残す点も多々あったが、これらについては後日の調査に

期待するものであり、高千穂町教育長甲斐清喜氏をはじめとする地元の協力によってなし得た今回の調査の成果をふまえて、研究上の指針とすべきものと考える。（鈴木）

① 宮崎県教育委員会「下弓田遺跡」昭和三十六年。
② 現在、宮崎県立博物館に保管。
③ 熊本女子大学乙益重隆氏の教示による。
④ 若林勝邦氏「日向にも亦石器時代の痕跡あり。」東京人類学会雑誌第七巻第七十一号明治二十五年。
⑤ 高千穂高等学校郷土部「高千穂地方出土品地名表・出土品分布図」昭和二十九年
⑥ 柳宏吉「陣内遺跡」宮崎県教育委員会。宮崎県文化財調査報告第三輯昭和三十三年
⑦ 神道文化会「高千穂・阿蘇」昭和三十六年

第二章　遺　跡

第一節　遺跡をめぐる環境

九州の中央部から北東に走る阿蘇火山帯は、臼杵・八代構造線を南限とし、その中央に於いていまなお阿蘇が活動している。更に九州最高の山塊をなす久住、大船山を中心とした休火山群は阿蘇の東北に位置し、この流出溶岩が阿蘇溶岩の下部に地構帯の深部組織となって確認されている。一方臼杵、八代構造線に北接して阿蘇外輪山の南東部より東に走る祖母（一七五九米）、本谷山（一六四四米）、傾山（一六〇四米）の山系は豊後、日向を分け、現在に於いても大分、宮崎の県境の一部を作っている。この祖母山の南約五十粁に当遺跡の所在する高千穂町は位置している。九州山脈の中央部に於ける宮崎県側の山系に源を持つ五ケ瀬川は、阿蘇外輪山に向けて北流し、一時熊本県側に入り、宮崎県に戻って東流し、延岡に至って日向灘に注いでいる。高千穂町はこの五ケ瀬川が蛇行しながら深い溪谷を作って貫流する上流に位置し、三田井盆地内にあって、幼年期的な地形が囲りをかこんでいる。また三田井盆地内には、本流をなす五ケ瀬川の小支流によって開析された谷間が多くの起伏を作るとともに、川を挾んだ台地はほぼ同じような等高線を示しており、もとの一つの台地を想像させる。従って小台地上は平坦部を残している。陣内遺跡はこのような小台地の北側に開析された谷を有する谷頭に位置している。従って東部より南東へ、更に南より南西部にかけて連なる小台地の北側に位置し、谷をへだてて更に小丘陵をみるといった地形によって囲まれている。

このような地形は三田井盆地内のいたるところでみられるばかりか附近の台地上、丘陵の斜面、台地の裾などには多くの遺跡が確認されている。先史時代関係の遺跡のみについても高千穂町内だけで百個所に近い出土地が知られている。そのうち縄文時代関係の遺跡はこれまでのところ次の通りである。

1	高千穂町	三田井	川登コガ堂（早期）
2	〃	〃	小河内（早期）
3	〃	〃	上川登尾谷
4	〃	〃	中川登栃又
5	〃	〃	浅ケ部（後期）
6	〃	〃	陣内ダチミ（後、晩期）
7	〃	〃	陣内車迫(早、前、後、晩期)
8	〃	〃	セベット

9　〃　〃　上原平（早期）
10　〃　〃　御塩井（後期）
11　〃　〃　尾ノ上
12　〃　〃　高千穂高等学校内（後晩期）
13　〃　〃　高千穂小学校内（後晩期）
14　〃　〃　神殿
15　〃　押方　本組
16　〃　〃　五ケ村仮屋（早、晩期）
17　〃　〃　下押方イノコ
18　〃　〃　下押方（早、晩期）
19　〃　岩戸　五ケ村（早期）
20　〃　田原　西山宮
21　〃　〃　河内西（早期）
22　〃　北萱場
23　〃　〃　北中園
24　〃　〃　薄糸平（早期）
25　〃　〃　小川内（早期）
26　〃　三田井　字岩戸越

以上は、これまでに発表されている地名表①に最近確認された遺跡から採集された資料を加えたものであり、主要な資料は高千穂高等学校、高千穂中学校及び県立博物館に保管されている。なお（　）内に示した時期は、実見し得たのもについてのみ記したのであるが、これによると一部を除いて早期末の押型文土器及び後期初頭の西平式から御領式に至るものが圧倒的に多く、中期に属すると考え得る資料は確認されていない。これら二十数個所に及ぶ遺跡の確認は多くの研究者によってなされたものであり、研究史的にみると、浜田耕作、若林勝邦、若山甲蔵、梅原末治、三浦敏、瀬之口伝九郎、石川恒太郎、柳宏吉らの各氏によるところが大きい。

陣内遺跡をはじめ、三田井盆地内に所在する遺跡は五ケ瀬川及びそれに注ぐ小支流によって、生活を支える水に事欠かないが、こと陣内遺跡に限ってみると北東部に開析されて北に走る谷の西寄り部分、遺跡の北北東約二百米、比高にして約二十米の個所に、小道によって切られた台地の裾に湧水がある。この湧水の地点が多少移動しているとしても、遺跡を営んだ当時の人達をもささえていたのであろうことは窺える。反面遺跡の所在する地点は北面する谷頭にあることによって日照に充分恵まれず、現在の包含地に単独で遺跡が営まれたとは考えられない。従って附近にある遺物散布地との関連に於いて考える必要が生じて来る。このようにしてみると包含地との比高二米内外の新道をへだてた西側に於ける散布地との関連を見逃すことが出来ない。原地形を復元してみると、この台地上にみられる散布地は包含地との接続が当然比定され、平坦な台地上から斜面へと続く比較的に大きな遺跡に復元され得る。かくして道路の開鑿や古く造成された宅地によって遺跡が切断されたとみられることになる。この当初の遺跡の広がりは、東方に向ってみられるものでなく南部及び西部にみられたであろうことは、遺物の散布ばかりか、旧道をへだてて東方に聳える阿蘇火山灰の溶結凝解岩からなる崖面が、大きく聳えていることによっても容

易に理解し得る。遺跡附近の現況からして包含地の主要な地点であったと考えらるれ部分は、公民館の建築による土取り作業、及び新道の開鑿によって除かれ、調査し得ないが、旧道及び新道によってとり囲まれるほぼ三角形状の二十坪程度を、包含地としてみることができる。

第二節　包含層の状態

遺跡の調査では包含地そのものの面積が比較的小規模であるため、当初の計画では主要なトレンチを設定後、全面にわたって調査を行う見通しをもっていたが、一部に於ける包含層の厚さと調査日程との関係もあって、今回の調査に於いては、遺跡の現状を最大限に保存することを前提とし、新道に面した張り出し部に調査の主眼を置いた。かくて調査区を第1区と第2区にわけ、それぞれ層位調査に重点を置いて作業をおこなった。

両区を通じていえる基本的な層序関係は、上層から表土（無遺物層）、混炭の褐色粘質土層（遺物包含層）、混炭の黒色土層（遺物包含層）、黒褐色土層（遺物包含層）、黄色ローム質土層（無遺物層）、暗灰色溶結凝灰岩層（無遺物層）の六層が指摘される。なお無遺物層を除いて遺物包含層の地層に於いては、ところによって若干の間層を入れている部分もあり、これはⅠ区に於いてみられるがⅡ区に於いてはみられない。主要な包含層となった二～四層は縄文式時代以前及びそれ以後の資料を包含せず、すべて土器を主体とした縄文式時代の遺物のみを包含する。また台地北斜面の一部をとりのぞいた谷頭に位置することによって、地層は全体として南西より北東にかけて相当に急な傾斜をもっている。一方二～四層の遺物包含層内にあっては、四層の下部に安定した後期の包含層がみられ、若干のみだれが指摘されても三層、二層と上層にいくにつれ後期末葉から晩期の土器が出土している。

Ⅰ　区

主要包含地の北東部にみられる張り出し部に設定されたⅠ区はA、B、C、D、E、Fの小区に区分され、Fを除いてそれぞれ二米の幅を持っている。A区、B区に於いては特に張り出しが強く、したがって調査された面積は他の小区に比して大きい。更に遺物包含層も厚く出土の資料も多い。A点、B点を結ぶⅠ区の南西部の断面によってその層位をみると、A区に於いては、第一層の表土は五十糎内外みられ二層の褐色粘質土層は二米に及ぶ厚い包含層となっており、ゆるやかに北西部に向って傾斜している。この上部に於いては粗製の晩期の土器を出し、後期の資料は、より下部に於いて認められる。三層の黒色土層は四十糎内外あって混炭の度は二層より高く、しばしば木炭片が出土し、後期の資料がすべてである。四層は北西に寄って薄く十糎内外であるが北東に行くにつれて厚みを増し、三十糎内外に及んでいる。この層は下部に続く黄色ローム質土層の上面に位置し、後期の土器を安定した状態で出土している。最下部にみられた黄色ローム質土層は無遺物層であって、ゆるやかに北東に向って傾斜していることが確認されている。

B区に於いては、A区にみられた基本的な地層の堆積に加えて二個所に間層がみられる。一層と二層の間の黒色土層と、三層と四層の間の褐色粘質土層がそれである。この黒色土層は三層の黒色土層につらなるものであり、C区、B区を経てA区へと続いている。したがって

この混炭の黒色土層を中心としてみると、褐色粘質土層がB区に於いては間層とみることが出来る。また褐色粘質土層としてとらえられた三層と四層の間の間層は、一部に黒色土層の入り込みがみられるが二十糎から三十糎の厚みを持ってA区の一部、C区の一部へとひろがっている。上層にみられる褐色粘質土層とは、色調に於いて変らないが、その粘質度に於いて違いをみせ、より粘質性が高い。遺物の包含は、上部の黒色土層中に晩期の資料がみられるほか、すべて後期の資料であり下部の黒色土層及び黒褐色土層中に特に多くの資料の出土をみている。間に褐色の粘質土層を挾んだこの二層は、石組の一部かと考えられる角礫の出土と合せて、安定した状態での資料の埋蔵が指摘される。地表及び上層に位置した褐色粘質土層の上面にみられた北東に向う傾斜を除き、すべての層はほぼ水平である。

C区に於ける層序は、やゝ複雑であって間層の入り込みが多い。地表が北東に傾斜していることは、二層、三層の上面の傾斜と関連しているが、下層に於いては、これに反して北西に傾斜している。基盤の黄色ローム質土層が北西に傾斜していることによって、より下層にみられた遺物包含層の各層が左右されたものとみられる。相当に急な地表の北東に向けての傾斜と、反対の方向に傾斜する基盤とによって、包含層全体はやや薄くなるが、それでも一・六米から二・六米に及んで遺物を包含している。表土に次いでみられた黒色土層は北東への傾斜をもちながらE区へと続き、更に褐色粘質土層を挾んで反対の方向に傾斜しながら、主要な包含層となっている。この黒色土層中にはE区からつらなる黒褐色土層の間層を挾んで後期の資料が出土している。黄色ローム質土層の無遺物層に接する黒褐色土層との関係は明瞭でないが、地層の乱れによって遊離し、黒色土層中に間層となって確認されたともみられる。上層の黒色土層中に数点の晩期の土器が出土しているが、遺物包含層としては、最下の黒褐色土層をはじめとして後期の資料を多く出土している。

D区に於ける遺物の包含は二層の黒色土層中のみであり、その包含層もE区に寄って急に薄くなり、包含層自体が消滅している。したがって出土の遺物も少く、後期の資料が少量出土しているのみである。これは黄色ローム質土層が東北に向って急傾斜で上昇していることによっており、D区に寄ったE区の端では、この層が地表下二十糎内外にしてみられる。D区に於いて消滅した遺物包含層の下部に形成されている地層は、E区、F区に於いてその下部の地層を明確にしている。

E区に於いては、表土の直下に黄色ローム質土層がみられ、主として北西に傾斜しており、その下部には更に急傾斜をもった状態で、暗灰色の溶結凝灰岩の地層が続いている。

F区に至ると、表土はごく薄くなり、十糎に満たない程であり、すぐに溶結凝灰岩の層に接している。

以上のことからI区においては、最下層に溶結凝灰岩をみて、その上部に接する黄色ローム質土層とともに、北西に向けて傾斜し、その上部に遺物の包含層をみるが、この包含層はいくつかに細分し得るにしても、北東部に寄って消滅し、主要な包含層は北西部に存在していたことがわかる。更に地表が全体として北東に流れているのと合せ、包含地の主要な地点は、遺跡の北西部にみられることになる。また遺物の包

含の状態から、黄色ローム質土層の上面に接する安定した後期の一群の資料と、厚い包含層をもった後期の土器、更に上層に於いて出土した晩期の資料とを大別し得るものと考えられる。

Ⅱ　区

A点を基点として、Ⅰ区にL字状に南部に接する形で、設定したのがⅡ区である。したがって包含地の西部の端に位置し、新道に面している。A点、C点を結ぶ線より西部に張り出されたこの地区は、南より北に向けゆるやかに下降した傾斜をもち、上層より下層にいくにつれその傾斜の度が増し、基盤となっている黄色ローム質土層に於いては四十五度に近い勾配を持って北に流れている。主要な包含層は地層に於いて二つに区分され、表土に接した褐色粘質土層と、その下部の黒色土層とに遺物がみられる。北よりⅡA、ⅡB、ⅡC、ⅡDと区分した二米幅の小区によって遺物の包含状態をみると、ⅡAよりⅡDに移るにつれ包含層は薄くなり、A点に近く二・五米程にわたってみられたものが、C点の近くでは二十糎内外にのみ遺物が包含されている。

ⅡAに於いては、表土は四十糎内外から五十糎内外へと厚さを増してA点に至っており、その下部の褐色粘質土層は、一・三米から一・四米の厚みをもって北に傾斜し、Ⅰ区に接する部分に於いては、二米に及んでいる。この層が下層の混炭の黒色土層とともに主要な包含層となっている。黒色土層の調査はその下部に於いて、全面にわたる調査がおこなえず、Ⅰ区に接する部分に於いて、基盤となっている黄色ローム質土層の点検をなし得たのみであった。主要な遺物の出土状況をみると、二層の褐色粘質土層の下部に近く後期御領式の鉢、甕、皿を多く出土し、炭化したトチの実が土器に接して発見された。その下層に於いては、黒色土層中に入って、後期の三万田式の脚台などの出土を見、より下部に至って西平式の破片が木炭片などともに出土している。

ⅡBに於いては、表土の厚さはⅡCに寄って多少厚さを増しているが、ⅡAとほぼ変らない。二層の褐色粘質土層中のやや上部に、黒褐色粘質土の間層が十糎から二十糎にみたない状態で挾まれている点と、ⅡCに寄った部分の最下に、黄色ローム質土の基盤が、急傾斜で確認された点がⅡAと異なる層序であるが、この黄色ローム質土層はA点に近ずくにつれてゆるやかに傾斜し、Ⅰ区にみられた無遺物層の基盤につづくことは確実である。遺物の包含は、褐色粘質土層の下部の近くに集中する一群と、黒色土層中に存するものとにめぼしいものがある。褐色粘質土層中におけるものは、後期の御領式に属するものが多いが、その下部に於いて、口縁部を上にし、それぞれの破片が接する状態で出土した鉢は、復元してみると、器形に於いて後期の御領式と考えられ、その施文に於いて後期の三万田式特有の髭状の羽状文がみられるという、これまでの形式概念ではとらえ難い資料である。黒色土層中に於いて、西平式の土器片に接する状態で出土したスレート製の有孔円石も、このⅡBに於いて出土したものである。

ⅡCに於いては、二層の褐色粘質土層のほぼ中位に、ゆるやかな傾斜をもって層の形成と平行した状態で、水分の吸収によりもろくなった獣骨の一群が多量に出土している。この近辺からは、後期の御領式の土器片が多く出土しており、包含の状態は良好であった。黒色土層

はこの小区から急傾斜で上昇し、ⅡDに寄った部分で三十糎内外と薄くなっているが、これが西平式の主要な包含層となっている。この地層が薄いのは、下部の黄色ローム質土層の急な傾斜によって左右されているものとみられる。

ⅡDは当遺跡のうちで最も包含層が薄い地区であり、ⅡCに寄った部分で消滅している褐色粘質土層が、全面に堆積していないこともあって、出土の資料のほとんどは西平式に属する。したがって、表土につづき黒色土層がみられることになる。この黒色土層中に底部をもった角礫が十糎程度の間隔を置いて二個出土しており、附近からは西平式の土器片が確認されている。

以上Ⅰ区、Ⅱ区を通じての包含層を中心とした層序からいえることは、包含地全体を通じて、北ないし、北東に傾斜をもつことから、遺物の包含もゆるやかな傾斜面にのった状態で見出されることである。この傾斜は、丘陵の斜面に続く谷頭に形成された地層としてとらえられるものであって、部分的に遺物の包含が乱れておっても、基本的には流れた状態で不整に堆積されたものとは考えられない。このことは基盤となっている黄色ローム質土層の上部に接した黒色土層中の下部に、安定した状態で存在した西平式の一群や、源初的な状態で出土をした数例の角礫、ⅡCの褐色粘質土層中にほぼ水平に出土している獣骨群などによっても確認されるものである。

第三節　遺　構

今回の調査では包含層の厚いこともあって、面積としては広く調査し得なかった。したがって層序の調査に重点が置かれ、遺構の一部かと考えられたものについても、充分に把握されたとは云えない。これらはⅠ区に於いて二個所、Ⅱ区に於いては一個所にみられた。Ⅰ区に於けるものは、黒色土層中のⅠBとⅠCにまたがる部位に確認されたものと、遺物包含層の最下にみられた黒褐色土層中に於いて出土している。前者は、腹部を下にして、伏せた状態で出土した土偶の囲りにみられたものであり、土偶の右脇から五糎程離れて拳大の円礫と、それに接して土偶と平行にした人頭大の不整な角礫及びそれに多少の間隔を置いて直交するかにみえる角礫とである。この角礫はⅠ区の断面にくい込む状態であり、更にその南部にこの礫と関連する配石があるかどうかについては知るよしもない。したがって土偶の囲りに小規模の配石を行なった遺構であるか否かについても、土偶の左脇及び脚部の囲りに配石がみられないことによって断定しかねる状態である。ただ角礫の底面が上面に比して大きいことによって、安定した状態で出土したことから、乱れた状態と考えられないばかりか、何らかの意志が窺えよう。またⅠBの黒色土層中に上部を出し、底部が黄色ローム質土層中にくい込まれている角礫は附近に西平式の土器片を出土することから、この時期に埋蔵されたものであろうが、これとて遺構の一部としては充分に把握されない。長さは確認されないが最大の幅四十糎に近く、厚み二十糎に及ぶ角礫と、ほぼ二十糎の間隔を置いてみられる巾十五糎内外の角礫とがそれである。

Ⅱ区に於いて出土したものは、C点に近くⅡDの黒色土層中に、それぞれ底面をもつ角礫群であるが、Ⅰ区にみられたものと異って、角礫自体が傾斜した状態で確認されている。附近に多量の木炭片がみら

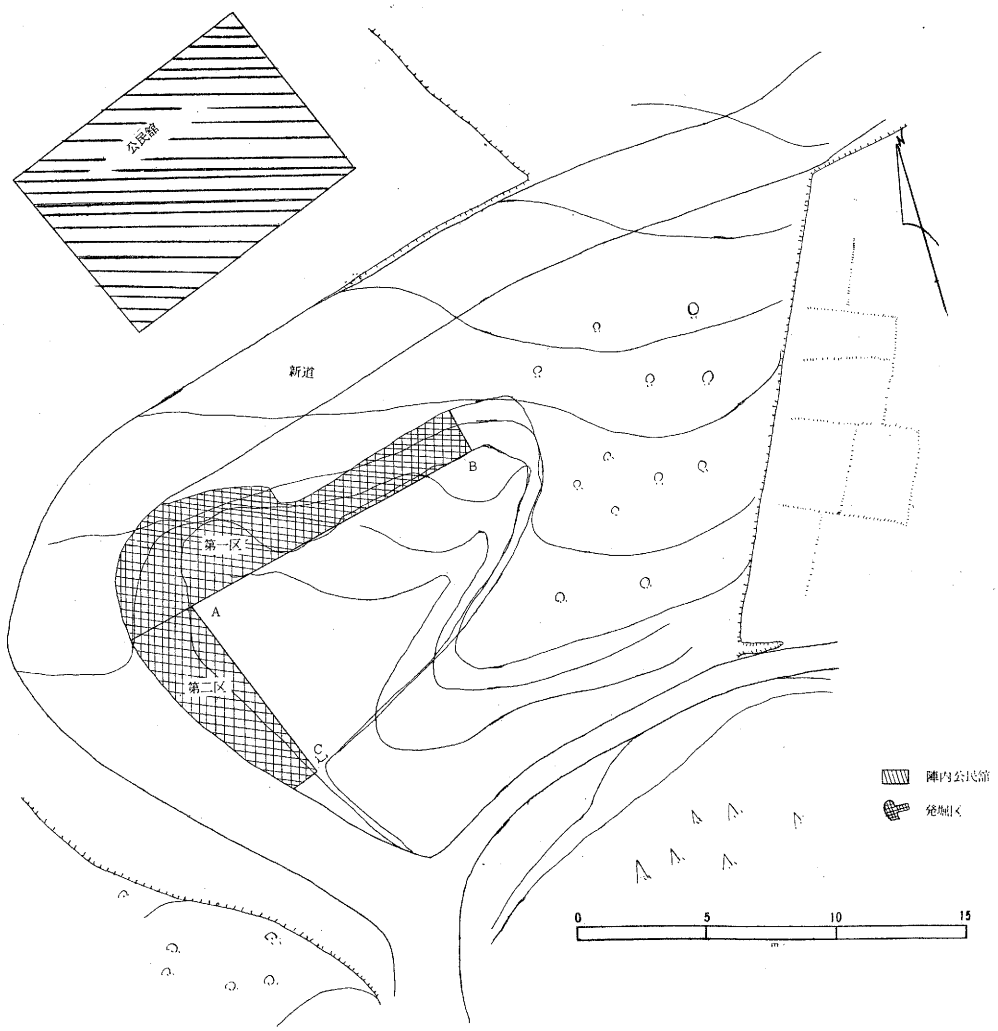
れるが、これもⅡ区に於いては、黒色土層中全面にわたって出土しているものであり、特にこの角礫群と関連があるものとは考えられない。したがって、この出土状態からは、その性格をつかむことも出来ない。かくて本遺跡からは、遺構として捉えられたものは、今回の調査ではみあたらなかったのである。（鈴木）

① 「日本石器時代地名表」東京大学。

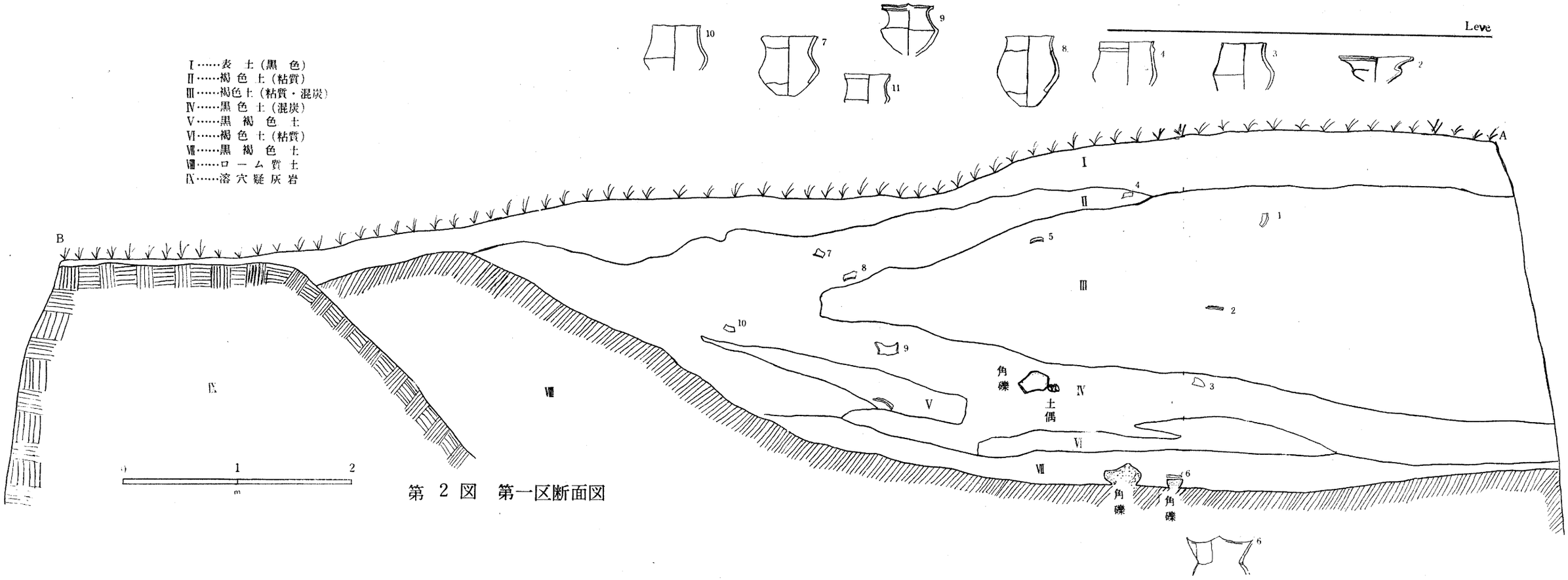
「日向上代遺跡遺物地名表」上代日向研究所。

「宮崎県考古資料発見地名表」田中熊雄、宮崎県文化財調査報告書第二輯。

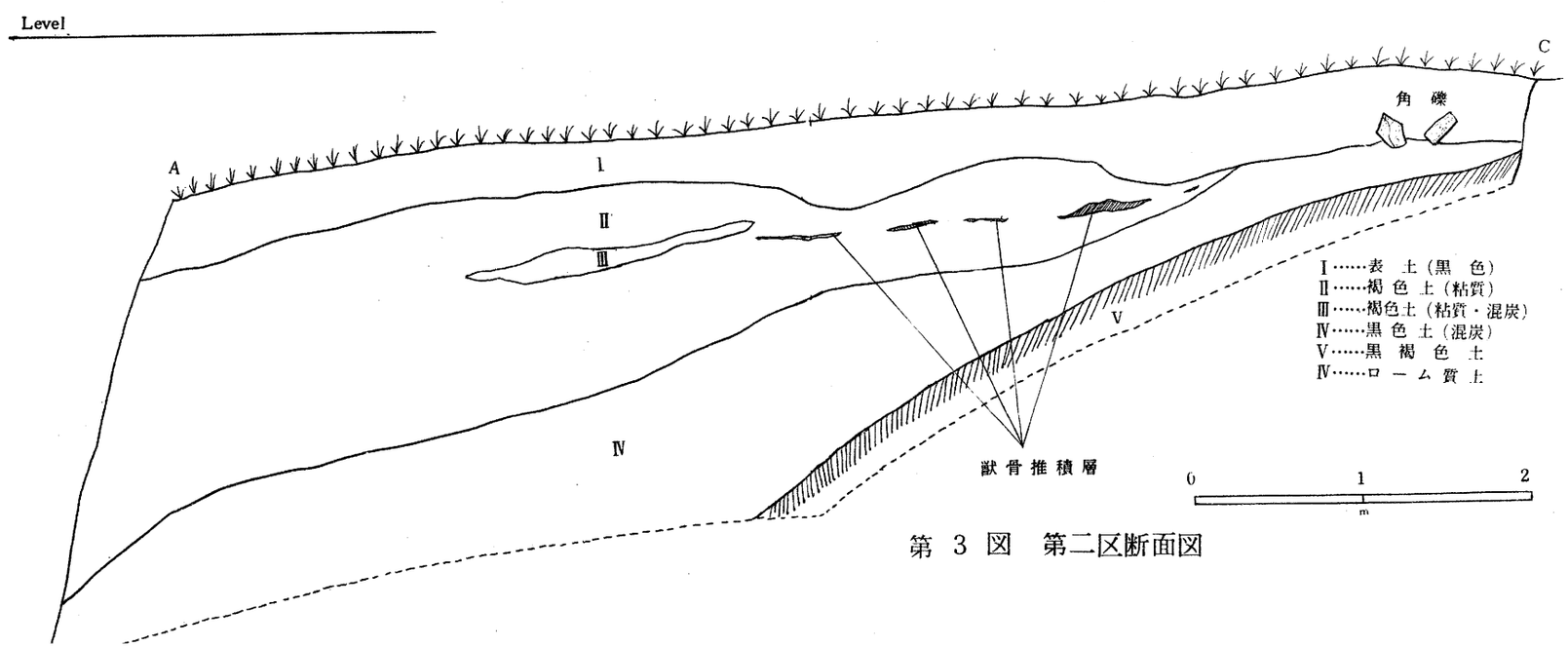
「宮崎県下の縄文土器—附地名表」鈴木重治、宮崎県立博物館報第五号。



第 1 図　包含地附近地形図



第 2 図　第一区断面図



第 3 図　第二区断面図

第三章　遺　物

今回の調査によるⅠ区、Ⅱ区を通じての遺物は、すべて縄文式時代の資料であり、特にその後期の資料が圧倒的に多い。土器及び土偶をはじめとしてメンコ、有孔円板などの土製品、石斧及び石鏃をはじめとする石匙、石刀、石錐などの石器、有孔円石、小玉などの垂飾品としての石製品、更にトチの実、獣骨、木炭などの自然遺物を出土した。これらを類別して順次記録にとどめる。

第一節　土器及び土製品

他の資料についても云える事であるが、主体をなす土器は、本遺跡が包含地をなしたという性格及び地形に左右されて、層序による時期的な差を充分に把握し、分類し得るというものではなかった。したがって土器を第一類から第十類までに大別した分類は文様及び形態などの特徴によって示したものであり、加えて包含層の堆積情況を参酌し、それからくる時期的な差を考慮しておこなったものである。かくて第一類土器から第十類土器に及ぶ変化は本遺跡出土の土器の時期的な差を示し、その順序に於いて前後関係として捉え得る。

第一類土器

押型文土器を第一類土器として挙げる。出土の押型文土器は、数片を数えるのみであって、施文が粗雑である。なかでも口縁部内面にのみ粗雑な山形の押型をもち、外面の口縁よりの部分に口唇に平行な一条の不整なベルトをもち、更にそのベルト上に粗い刻みを加えた土器は特異である。断面からは、口縁に近くやや外反することが窺われ、大分県下に主要な分布を持つ小畑原式（下城下層出土）①や鹿児島県下の出水貝塚の下層より出土した押型文土器②、更に宮崎県下薄糸平出土の土器③などとの類以が指摘される。本遺跡で底部破片が出土しなかったが、出水貝塚や、大貫貝塚④の出土例の如く、平底であったろうことは、施文や、口縁に近い部分の器形から充分に窺うことが出来る。なお押型文土器として、回転押型文の原体となった施文具と合せて、他の施文上の方法が同時に用いられている例、言葉を換えていえば、押型文に二種以上の施文上のテクニックがみられる例で、本遺跡出土の資料に酷似しているものは、熊本県轟貝塚から出土している。したがってここに第一類土器とした土器は、これまでの偏年にしたがえば、早期末に比定されるものである。

第二類土器

第二類土器には、更に三つに細分することが出来る。しかもこれら

は、それぞれ異った問題点が指摘され得るため一括して扱うことは躊躇されるが、編年上一応他の土器と区別して置く必要を認め、ここではとりあえず第二類土器としておいた。かくてそれらをa、b、cと細分して記録しておく。

a、まず指摘されることは、貝殻文系の土器であり、aは器の内外面に貝殻条痕を横走させ、外面に口縁に平行してアナダラ属の貝の腹縁をもって圧痕文を施したものである。内面は黄褐色を示すが、外面は黒褐色を帯び、胎土は粗い。第二類aは、宮崎県内に於いて、西都市三宅遺跡⑤、串間市大平遺跡⑥、宮崎郡田野町青木遺跡⑦、などに類例がみられ、前期の前平式と見做されるものであり広く南九州に分布している。南九州に於ける早期末以後の各期にわたる貝殻文系土器は後期に至って盛行しているが、前期に於ける一群の土器にも多くが指摘される。石坂式、吉田式、前平式、寒ノ神式などがその主要なものであって、地文としての条痕文の他、主要な貝殻文、更に器形などから分類されるばかりか、一部に於いてはそれらの層位的な関係が指摘されている。これらの編年にしたがえば、当資料は南九州の前期中葉とみられる前平式に属するものといえよう。

b、第二類bも亦貝殻文系の土器であり、頸部がせばまり、口縁によって広く拡がるカリパー状の器形をなすものである。この土器は器面が褐色を呈し、カリパー状にのびる口縁の外面に貝殻腹縁による刺突列をもっている。この貝殻文は、アナダラ属の貝殻の断片を施文具としており、節が二つ、したがって施文されると、二連の山と一つの谷とが印せられる。一般にはこの貝殻圧痕文も数条みられるのがつねであり、連刻された貝殻圧痕文と云える。類例として、延岡市の大貫貝塚⑧、宮崎市の柏田貝塚⑨、高岡町花見貝塚⑩出土の資料があり、鹿児島県下では寒ノ神遺跡の土器が挙げられる。これらは器形のうえで大きく二つに区分され、寒ノ神や柏田にみられるように、胴部が直行し、円筒状に平底の底部へ続くものと、花見に於いて典型的な胴部がややまるみを持って底部に続くものとがある。これらは時期的にも前後⑪するものと考えられ、本遺跡のものは寒ノ神や柏田に類するものであって、より古い時期に属する。したがって当資料は前期末に比定されることになる。

c、第二類cは、貝殻文系の土器と異り、純然たる縄文をもつ土器であり単縒りの粗い縒り糸を原体として施文したものである。内面の一部に輪積みの形迹をとどめ、器面が暗黒色を呈する土器であって、破片ではあるが全面に縄文が施文されている。類例に乏しく、しいてあげれば轟貝塚出土土器⑫中に一、二例をみるのみである。縄文式土器のうちでいわゆる縄文が施されている資料は、九州に於いてもないわけでなく、後期の鐘ケ崎式や西平式を中心とする一系例の土器に之をみるのであるが、これらは、整備されて規則正しい縄文や磨消縄文であり、当資料の如く整備されていない粗雑な縄文ではなく、しかも全面に施文されるというものではない。したがって類例を他の地域に求めるとすれば、東北地方の円筒下層a式、b式、c式や、大木4式、5式の胴部にみられる施文、円筒上層a式、更に関東、中部地方の勝坂式、加曽利E式の一部にみられる縄文にその類似をみ、中国地方の彦崎ZⅡ式の羽状縄文の一部などにもその類似が示される。これ

らはすべて本遺跡とはあまりにもへだたっており直ちに比較するわけにはいかず、まずさきに触れた蠣貝塚出土例との関連を考えるべきであろう。

以上a、b、cの三つに細分した第二類土器は、その時期に幅があるものとみられるが、本遺跡出土の他の土器と対比する時、前期中葉から中期初頭にかけての土器が他に見当らないこと、更にa、b、cそれぞれの量も少いことと合わせ、第二類として一括したものである。a、bとcが大きく二つの系列として捉えられることは明かであってもその前後関係については、aとbの関係が指摘されるのみであって、cとの関係については明確ではなく、今後に問題を残している。

第三類土器

磨消縄文系の土器を大きく二つに区分し、その一つを第三類土器として扱う。数例の出土をみたこの類の土器は、口縁が短く、頸部がせばまって、ふくらみをもつ胴部へと続く器形を示す。二本を単位とした沈線による入組文や渦文の間に、磨消縄文をもつ鉢である。九州特に北九州に広範囲に分布する後期中葉の鐘ケ崎式に属するものである。県内にあっては中央部から北部にかけてかなりの類例が出土しており、日ノ影洞遺跡⑬日向市岩脇遺跡⑭の資料が代表的である。出土の状況からするとⅡ区にみられた包含層の下部に安定した形で出土した磨消縄文系土器中に散見され、層位的には第四類土器と区別し得ない。この類の土器は第一類、及び第二類に比して、良好な焼成であり、黒味を帯びた褐色を呈するのが一般である。なおこの類例として各地で確認されている土器をみると、施文に於いて、磨消縄文をみないで単に沈線による入組文や、渦文のみを持つ例や、口唇に近い口縁から頸部を挾んで肩部にわたる橋状把手を持つ例、更に器形に於いて、口縁がやや外反し、胴部へと続く器形のものなどがあり、すでに一部に於いて細分されつつあるが⑮、九州に於ける後期中葉の土器とするだけでなく、磨消縄文系土器の検討のなかで、更に充分な把握が望まれるものである。

第四類土器

第Ⅱ区の各小区及び第Ⅰ区のA区、B区の包含層の最下部に、主として出土したのが第四類土器である。この土器は磨消縄文系の土器として、第三類土器との関係が指摘されるが、器形、深鉢が一般的であり、くの字形に延びた口縁と、せばめられた頸部に続いてややまるみを持った胴部に続き、平底を有する一群の土器である。施文部は、くの字形に内曲する口縁部並びに頸部以下、胴部の中位以上にみられる施文帯の二個所にある。また四個所に波状口縁をもつ点も一つの特徴である。この種の土器は第三類土器と同様、九州特にその北部に多く出土し、なかでも西北九州に好遺跡が知られ、代表的な類例として、西平遺跡⑯、筏遺跡などが挙げられる。かくて従来西平式と呼ばれたものに属するが、この西平式自体にも施文上の変異が認められ、器形に於いても胴部のふくらみの強いものと、ふくらみはあってもゆるやかに底部につらなる胴長のものとに大別し得る。ここに第四類土器としたものは、それらを一括したものであるが、出土状況に於いて格別な変化を認めることは出来なかった。したがってその先後関係も明確でない。ただ広い意味での鐘ケ崎式土器との関係から、器形に於いての変化と

合せ、施文についても胴部のはりの弱い一群の土器が後行するものかと考えられる。

第五類土器

ここに一括した土器は器形に於いて、更に数種に区分することが出来る。口径四十糎以上に及ぶ深鉢形土器や、二十糎内外の口径をもつ鉢更に壷、高坏もみられる。深鉢は、くの字形をなす二重口縁であって、さきに示した第四類土器の器形を踏襲しているが、山形隆起部が平縁にかわるのと合せ、内曲または直行する上段の口縁部にのみ施文されている縁帯文土器である。施文は口縁部の端に平行にみられる太い数条の沈線文を主とし、この沈線の交合点に、ヘラケズリによる上下二個のくぼみを配することによって、文様に立体感をもたせるものと、このくぼみにかえて扇状貝殻圧痕文を置くもの、更に沈線内に髭状の細線羽状文を加える点が特徴的である。黒褐色ないし茶褐色を示すこの種の土器は、内外面の調整をヘラケズリによっておこない、更に研磨するものが大部分であり、粗製のもののは、まれにまじるのみである。鉢は、深鉢の口縁部上段にみられる文様上の特徴を、そのまま認め得るのであるが、器形は一般に二重口縁をもたず、内曲した口縁をもち肩部に最高の径がある浅鉢である。髭状にみられる細線羽状文が沈線内をめぐっており、これが唯一の施文上の特徴となっている。精製土器の多いことは、深鉢と同様であるが、粗製のものの増している傾向はみのがせない。この粗製土器にあっては細線羽状文にかえて、X字状の沈線文を施した例もあるが、この種の土器は出土例が少ない。

各地の縄文式後期土器にみられる器形の多様性は、九州に於いても例外ではく、ここに示す第五類土器の時期が一つのピークをなしている。深鉢、鉢の他に、壷、高杯が本遺跡に於いても数例出土した。壷にみられる施文は、粗製の鉢にみられたX字状結接文の変化として捉えられ、深鉢に於ける沈線の交合点のヘラケズリが、より計画性をもって施文の中心となるべく整備されていることが認められる。また高杯に於いては、杯部の口縁よりの外面に、細線羽状文をもった沈線文や押点文を認め、脚部にも透し孔の上下にみられる沈線間の隆起部に細線羽状文を施す例があり、施文上の特徴は深鉢や浅鉢のそれと全く同一視することができる。

これらの土器にみられた施文上の要素は、畿内に於ける宮滝式⑰や、中国地方の津雲下層式にその類例が認められ、磨消縄文文化圏の西漸によるものと考えられる。器形にあっても高杯の如く、畿内の元住吉E式を窺わせるものがあって、九州の縄文式後期の各種要素の検討がのぞまれるわけである。高杯は、南九州に於ては、草野式⑱の高杯が草野貝塚や下弓田遺跡⑲などから出土しており、南北九州の関係が明確でなく、器形に多少の異りが指摘されるとしても、高杯という特殊器形によって、その関係を検討する余地は充分にある。かくてこの種の土器を一括して陣内一式土器と呼ぶが、類例として三万田遺跡出土資料中の後期に属する一群の⑳土器を挙げることが出来る。

第六類土器

本遺跡出土の土器のうちで、第六類土器がもっとも特徴的な資料であり、編年上に於いても一つの問題を提起し得るものと考えられる。

施文上に於ける基調は、先に示した第五類土器に求め得るものであ

って、その特徴により第五類から推移したものと認められる。また器形は後述の第七類土器の一部にも合致するところである。すなわち暗黒色を呈する研磨された鉢を主体とし、口縁及び肩部にみられる数条の密接した沈線間の小隆起部に、細線羽状文をみたした文様をその特徴とする。器形に於いては第五類土器の深鉢、及び浅鉢の一部にみられた二重口縁を圧縮し、特に口縁部のちぢまりと、肩部のはり出した変化を示し、肩部以下は直線的に底部へと続き、やや揚がりぎみの平底をもっている。口縁は波状をなすものがみられず、平縁となるが、細線羽状文中にみられる二段のヘラケズリやそれにかえた扇状貝殻圧痕文が四個所にみられることによって、四つの山形隆起部を中心とした施文の痕跡が窺え、ここにも第五類土器からの変化が指摘できる。更に扇状貝殻圧痕文を中心とした施文や、細線羽状文にかえて、X字状結接文を重点とした沈線文を口縁部のみにせばめられた施文帯に施すことも認められ、これについても同様のことが云える。かくてこの類の土器は鉢を中心としてその特異性を確認し得たのであるが、伴出の資料からして、この類として一括し得る深鉢は、大形化される傾向と共に粗製の土器が増加している。これと対象的に浅鉢には小形化の傾向や精製研磨された資料がみられる。精製の装飾的な土器と、粗製の土器の明確な分離をここに見出すのであるが、精製の装飾的土器といっても、この類に属するものは、細線羽状文や扇状貝殻圧痕文を用いたとしても数条の沈線が主要なものであり、その簡素化は否定出来ない。器形の多様化と合わせて、その用途の分離をみるとき、土器形式の細分の中で指摘されるこの事実は、九州に於ける縄文式後期後半の文化内容を検討する上で、充分問題となし得るものと思われる。第五類土器にみられた器壁の薄手化はこの類の土器にも引き継がれている。更に焼成が精製土器にみられた如く良好さを増し、研磨も充分なされていることから施文、器形などの細分と合わせ、ここに第六類土器として一括したのである。この種の土器を陣内二式土器とするが、その特徴的な類例が他で見出されないので、特に陣内式と呼んでもよい。

第七類土器

第七類土器は、器形の分化が一層進行し、鉢、または深鉢を主体とし、盤あるいは、皿を伴い、まれに広口の壷さえもみられる。広口の壷を除いて、精製研磨されるのが普通であり、特に皿に於いては黒色研磨がいちぢるしい。器壁は概して薄く、焼成は良好であって、巧緻な土器が多く、内外面にヘラケズリがみられる。優美な器形とともに一時期を劃している。深鉢及び鉢は、くの字形口縁を持つ点に一つの特徴があり、頸部がせばめられて短く、肩部まで広がって最大の径をもち、ふくらみをそなえて内曲しながら、やや揚がり気味の平底へと続く。口縁部は平縁が多いが、中に小さい山形隆起を持つ波状口縁もみられる。施文としては、口縁にのみ2〜4条の沈線文がみられるだけで、施様としては退化が窺える。深鉢にままみられる肩部上の沈線は、施文と云う程のものではなく、鉢にはこれが認められない。従って器形に於いても様式化された斉一性が深鉢及び鉢を通じて指摘されるのである。盤あるいは、皿についてみると、頸部以下を除くと、深鉢や鉢を髣髴させるものがある。従って口縁部の作成が一つの定形に準じておこなわれたとみられる。数条の沈線によってうめられた、

くの字形の口縁をもつ盤形や皿形土器は、口縁部からややまるみを示して底部へと続くものと、器高の低い器形を示して底部へと直行するものとに区別される。盤は精製の度合に於いて皿におとるとは云え、ヘラケズリによって調整された後の研磨は、他の類より良好であり、縄文手法のないこの種の土器の地方色を示す特異性を強調するものである。皿に於いては、くの字形口縁を明瞭に示すものと、萎縮し断面三角形をなす口唇部とみられる部分に特有な沈線文を入れたものとに大別し得る。これらの二者は時期的に異るものではなく、用途による分化と考えられる程、作成上の類似がうかがわれるもので一括して扱うことにした。壷については、精製、粗製のものを通じて広口な点で一致している。精製のものには頸部から外曲して長くのびた口縁部と、強いまるみをもって底部へと続く部分とにわけられ、施文部は肩部を中心としてその上下に限られており、数条の沈線をもっている。精製研磨は器の外面に於いて著しく、内面にあっては口縁よりの一部にかぎられるきらいがある。粗製のものは口縁断面が三角形に肥厚したものと、口唇に寄って徐々に薄くなる傾向のものとに分けられるが、精製土器にみられた胴部のまるみの強いものはなく、すべてゆるやかに内曲したカーブを描いて底部へと続いている。かくてこの種の土器は精製研磨のものが主体をなし、施文、器形に於いて斉一性をもつ一群の土器として捉えられる。

この種の土器は御領貝塚㉑出土の土器を標式として御領式と呼ばれ九州一円に分布するものであるが、これまで御領式として扱われたものの中には、後期に属するものと、晩期に属するものとが区別されるようである㉒。したがってここに一括した第七類は御領式として捉えられるにしても、そのうち後期に属するものの一群であり、本遺跡に於いても細分し得るから陣内三式土器とすることにする。

第八類土器

第八類は粗製のものが圧倒的に多く、その精製品は皿及び浅鉢にみられるのみである。深鉢は、第七類の深鉢にみられたくの字形の二重口縁の上段を取りはずした器形のものと、口縁の延びがやや萎縮してほぼ直線的に内行してせばめられるものとにわけられるが、前者を主とし、後者の量は少ない。共に粗製である点は異らず、ともに輪積み法による作りと思われる。深鉢が第七類の退化様式とみられると同様に、浅鉢や皿に於いても同様なことがいわれ、さらに器形に於いて多様化が示される。すなわち浅鉢と皿は、すべて研磨されている点で共通するが、第七類の浅鉢の口縁部上段をとり除いてより直線化し、無文乳褐色の浅鉢と、口縁の一部に退化した沈線をもつ黒色磨研の一群とがある。黒色磨研の一群は口唇の変化によって更に数種に分けることが可能であり、これが器形の変化に反映している。皿には、せばめられた頸部をもつものと、口縁から直行ぎみに底部へつづくものとがあり施文が共に退化しているが、第七類の施文がすべての器の外面にみられたのに対して、これには外面にみられるものと、内面にみられるものとに分化し、口唇の変化をうながこすことによって器形に変化を生ぜしめている。これら第八類のうち粗製のものについては、これまであまり注意されなかったきらいがあり、黒色磨研の一群のみが注意さたのであった。この為第七類と一括して御領式として扱われたわ

けである。本跡では識別できなかったが、器形及び施文の上でその推移を指摘することが出来、第七類とは区別することが可能である。この事は黒川洞窟㉓、ワクド石遺跡㉔、及び松添貝塚㉕、尾平野洞窟㉖などの資料からも肯ける。かくてこの種の粗製土器及び精製土器を一括して陣内四式土器として把握した。なお編年の上では、粗製土器の量的な増加、精製土器の小形型化及び無文様の傾向によって、晩期的な様相を多分に示すものとして、第七類に後続するものであろうことはあきらかであり、晩期初頭に比定されよう。

第九類土器

この第九類は浅鉢を主体とし、碗を伴って出土しているが、類例からして注口土器、壷、それに粗製の鉢の存在が知られ、器形の多様化を示す一群のものと考える。基調としては第五類の系統とみられるものがある。精製の浅鉢にみられるように、口縁部に施文され定形化されたX字状結接文を中心とした施文に特徴がある。器形が更に小型形される傾向とともに器壁が薄くなり、精製土器に於ける研磨は優美な程に良好である。第六類、第七類、第八類と推移する中でみられた鉢の頸部のせばまり、胴部のはり出しの退化は、第八類土器の一部に於いて皿への転化の様相として捉えられたが、第九類では口唇にまるみをもつとは云え、断面が新月状をなす単純な器形にまで変化している。また無文化された第八類の皿の一部にみられた、口縁の内面を主体として施文するという一特徴は、器形に左右されたものであるにしても、第九類にもみられるのであって、施文土晩期の傾向が指摘される。小形化された鉢は、ほぼ直行する器形を示し、一部に波状口縁を残すが、平縁のもが多くすべて粗製である。施文は波状口縁をもつものに限られるようであり、山形隆起の口唇上に一つの刻みを入れ、その下に内外面にわたって沈線を対称的に施文している例が出土している。施文とは名ばかりであって、無文化の傾向がここにも示される。器の外面に施文される例は、この波状口縁をもつ鉢のほか、やや器壁の厚い浅鉢で胴部に少々のまるみをもつ例にもみられるが、ここでも粗い沈線が不整に施文されるのみである。出土の土器からは、量的には少いが晩期の土器として一時期を劃し得るものであって、第五類土器の系統に属すことは、施文の上からも明らかである。かくてこの種の土器を一括して第九類としたのであり、晩期初頭から中葉にかけての一時期のものであろう。なおこの種土器の類例を他に求めると、浅鉢の文様に典型的に表現されるように、東北地方に盛行した大洞式に類似するのであって、特に大洞A'式の土器と近似する。大洞式文化の西漸として考えられる近畿地方の滋賀里式や橿原式が、瀬戸内を介在して九州にまで広まっていたことを推測させるものである。九州内の発掘調査で発見された類例は他にみないが、三万田遺跡出土とされる一群の土器㉗のうち晩期のものと考えられるものの中に、同種のものが指摘されるのであって、今後に問題を残している。この種の土器を陣内五式と呼ぶこととする。

第十類土器

ここに一括した土器は、粗製深鉢の一群であり、晩期の中葉に比定し得るものである。器形は数種に細分し得るが、その大部分は第八類の深鉢に由来するものであって、肩部ないしは胴部の張りや丸みが

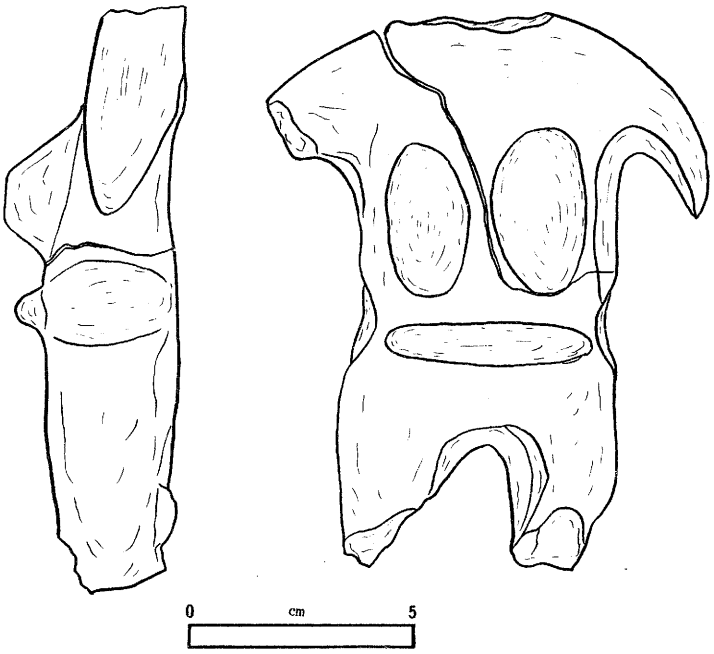
退化し、肩部にみられた沈線が消滅して完全に無文化し、口縁部が直行ぎみにひろがりをもつため、特徴のある広口化した深鉢となったものである。口径四十糎以上に及ぶものもあり、この点でも第八類の深鉢に類似している。器壁の厚さにも第八類と大差ないが、胎土が粗くなり焼成もわるく、すべて粗製である点で異っている。小型の深鉢は更に広口化し、肩部に段をなして急に底部へとせばめられている。この小形化された粗製の深鉢は、器高二十糎内外のものが多く、暗褐色を呈して、器の内外面に粗い条痕が認められる。この二種の深鉢を主体とした一群とともに、口唇部寄りに一条のはりつけ凸帯をもつた土器がある。この凸帯をもつ土器は、ごくわずかであるが二種の粗製深鉢と同様に、包含層の上層のみから出土した。晩期初頭の土器と考えられる第八類や、第九類に後行するものと考えられる。この種の土器は尾平野洞窟をはじめ、本遺跡の所在する三田井盆地内の下押方遺跡などからも採集されており、かなり広範囲の分布が予想される。他地域では、山口県の岩田遺跡㉘から出土している凸帯文土器のうち凸帯に刻目をもたないものの一群が酷似していて、横走する条痕をもつ点、器壁の内外が比較的平滑なことなども同種のものと見做される。

さて上述の通り本遺跡出土の土器は、第一類土器から第十類土器までに別けられるが、層位的に安定しているものは第三類、第四類、及び第十類のみである。前二者が包含層中の下部に、また後者が同じく上部にのみ出土している。第一類及び第二類の出土状況は不定であって、他の種類と時期的に大きなへだたりがあり、且つその数量の少い点などから混入したものと考えられる。次に第五類から第九類までは、層位的には明確にし得ない状態で包含され、したがって層序による先後の関係は指摘することができない。このことは第七類が圧倒的に多くしかも遺物包含層の全域にわたって出土した事実や、層序を明確に区分し得べき間層をもたない積層状態にもよるが、時期的にそれぞれ大きなへだたりをもたない関係にある故であろうと考えられる。かくて全体の分類にあたっては、層位を参酌するとともに、器形、文様など型式の変化を中心に考え、合せてすでに報告されている他の遺跡の資料をもできるだけ参考した。すでに触れた通り第一類土器から第十類土器への変化は、時期的にもその順序に於いて先後関係を示すものと考える。また土器の分量は、第七類が他を圧して多量に出土し、次いで第八類、第五類、第六類、第九類、第四類、第三類、第十類と続き、第一類、第二類はごく少量が出土したのみである。したがって本遺跡は縄文式後期を主体とし、晩期にかけての遺跡であると考えられるものである。なお後期から晩期にかけての土器の類別の中で、特に本遺跡の名称を使用した陣内式土器は、九州に於ける縄文式土器の編年の上でこれまで明確でなかったものの一つであるだけに、一つの問題点として今後の研究を要するものである。

土製品

土偶

第Ⅰ区A地点の混炭黒色土層中から頭部を欠損した土偶が出土している。出土の状態はさきにも触れた様に、伏せた状態で背面を上部にしており、脚部を除いて三方に角礫を配置したごとくであって、右脇にあった拳大の円礫も何らかの意図をもって配置したものとみられよ



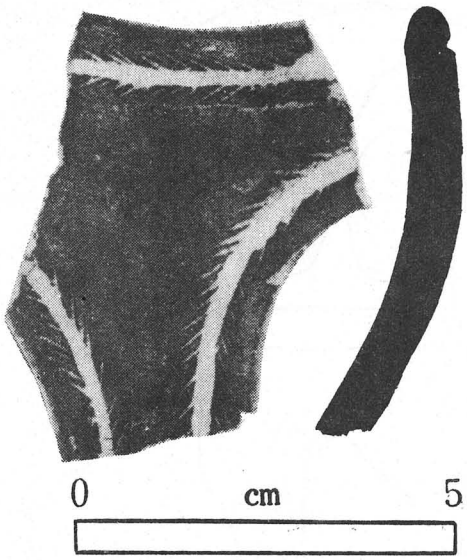
挿図 4　土　　偶

うが、その点充分な確証が把握されなかった。このような状態で出土した土偶は、妊娠中の女性を象っており肩部までの高さ十二・五糎、肩幅六・五糎、彎曲した腕の長さ四・七糎、脚部二・五糎、胸厚三・九糎、バスト十七・六糎、ウエスト十六・〇糎、ヒップ十六・七糎を示している。特徴的な乳房及び腹部に於いては、左右の乳房が共に半截の楕円球であって、多少の違いがあっても対象的であり、長径三・八糎、短径一・九糎、高さ一・二糎を示す。腹部には、両端がまるみをもったカマボコ状の隆起部が示され、幅一・四糎、長さ四・八糎、高さ〇・九糎が計測出来る。これらのことから妊娠中の女性を象っている象徴的な土偶といえるが、部分的には写実性が加味されており、比較的に人体としての均衡を保っている。

さてこの土偶の時期については、さきに十類に分類した土器のうちいずれと連関するかを吟味する必要がある。土器の包含状況は前述の如く、最下層に安定して出土した鐘ケ崎式、西平式に該当する第三類、第四類、並びに上層部に出土した第十類を除く他の類は層位的に確定できるものはない。一方土偶の層位をみると主要な包含層ではあったが、後期末葉から晩期初頭にかけての時期に比定される陣内一式から陣内五式にわたる各期の資料が混在している層であるため、どの形式の土器と組み合うかは層位からはあきらかになし得ない。ただ晩期に属する陣内四式、陣内五式土器が土偶を出した層位より更に上層に多く出土している事実からすると、陣内一式から陣内三式にわたる後期末葉に比定し得る可能性が大きいことは否定出来ない。

さて、この土偶のほか、本遺跡から出土したとみられる胸部のみの

土偶がある。この土偶は地元の宗氏のコレクションの中にあり、二、三の研究者によって三万田式の土偶と考えられているものであるが㉙㉚、三万田式土器に伴出した大野貝塚㉛の例では胸部が欠損しており比較にならず、三万田遺跡出土の数例㉜や中津高校遺跡の例㉝と対比してみるとき、むしろ今回出土の土偶との関連からも、御領式土器に伴出した中津高校遺跡出土の例に酷似している。したがって御領式の土偶と考えられる。これまで九州内に於いて出土した土偶には、中期以前の資料はなく、すべて後期のものであり、その数二十数例に及ぶが、その多くは三万田式、御領式に属するものと考えられている㉞。このような全般的事情を考慮して、ふたたび出土の土偶について考えれば、三万田式、御領式をそれぞれ陣内一式、陣内五式及び陣内三式、陣内四式と細分し、それぞれ後期に属するものと、晩期に属するものとに区分する場合、土偶が陣内四式及び陣内五式に伴うとは考えられず、さきにも示した陣内一式から陣内三式に伴う可能性が強い、とみた考えをより強くするものであり、後期末葉の土偶と考えられるものである。



挿図 5　三角形土製品

三角形土製品

第Ⅱ区B地点より出土した土製品に、それぞれの端が欠損している三角形の板状土製品がある。この土製品は表裏ともに研磨され、表面には弧形を呈した縁辺の近くに、各辺に平行して一条の沈線がひかれ、それを中心に髭状の細線羽状文が施されている。平面的には各辺が弧状をなす三角形とみられるこの土製品は、その断面による立体感が球体の一部を呈するかの如くであり、裏面に内曲するカーブを持っている。この土製品の類例は九州を含めて西日本の各地からは報告されたものがなく、すべて東地北方、関東地方、信越地方に於いてのみ知られている。この種の土製品が注目されたのは比較的最近のことに属し、南境貝塚の例㉟を端緒とした。特に注目されはじめたのは戦後のことである㊱。逆三角形の土製品とみて、それが関東地方、東北地方の前期から中期にみられた板状土偶から派生したとする見解㊲を妥当な考察としてそれに従うとしても、九州内部に類例をみないのであるから如何ともしがたい。ただ当資料は、その施文から後期末葉の陣内一式ないしは陣内二式の時期の製品と考える。このことは、その特徴である細線羽状文によっても充分肯けるものと考える。

円板状土製品（メンコ）

第Ⅰ区及び第Ⅱ区を通じて数例の円板状土製品が出土している。これらはすべて使用にたえなくなったとみられる土器片を使用したものであって、それぞれの縁は、充分に調整されておらず、不整形なものである。これらの円板状土製品を土偶や三角形土製品の如く、マジックパワーが意識される土製品と同義をもつか否かについては、その発生をはじめとする種々の問題、例へば個々について完成品なのか未製品なのかについても検討せねばならず、ここでは触れないことにするが、県内においても、後期の遺跡㊳に多くみられるものであることを示すだけにとどめる。

有孔円板

円板状土製品に類似する資料で、その中央に小孔をもつものが数例出土している。これらは中央の小孔を除けばさきに示した円板状土製品と同一である。その用途を考えると、懸垂の装飾品か紡錘車が想起されるが、その前者とする場合は、さきの円板状土製品がマジックパワーを有するものと意識される場合にのみ垂飾品とする可能性が指摘されるであろう程、疎雑な製品である。また後者と考えるとしても、晩期の紡錘車や弥生時代以降の紡錘車の如く精巧なものではなく、その小孔に均一性がなく、紡錘車としての用途を充分にはたし得るものとは思われない。したがって、ここではただその形態から標記の名称を用いて記録にとどめるのみとする。

① 賀川光夫「押型文土器共伴資料――九州地方に於ける――」九州考古学2。

② 河口貞徳「出水貝塚」鹿児島県文化財調査報告第七輯。

③ 鈴木重治「宮崎県下の縄文土器」宮崎県立博物館報第五号。

④ 昭和三十二年に宮崎大学、昭和三十三年に国学院大学によって調査が行なわれ、それぞれの大学に資料が保管されており、戦前の鳥居龍蔵氏による発掘資料の一部は宮崎県立博物館に保管されている。

⑤ 昭和三十二年に日高正晴氏によって発掘調査がおこなわれた。資料は日高氏が保管している。

⑥ 昭和三十四年に河口貞徳氏によって発掘調査が行なわれ、資料は鹿児島県立玉龍高校に保管され、一部は大平小学校及び宮崎県立博物館に保管されている。

⑦ 最近田野小学校の山下教諭によって発見された。資料は田野小学校に保管されている。

⑧ ④参照。

⑨ 三森定男「西部日本の縄文土器」人類学先史学講座第一巻及び第二巻。

小林久雄「九州の縄文土器」人類学先史学講座第十一巻。

戦後、宮崎大学によって発掘調査がおこなわれ、現在宮崎大学に保管されている。

⑩ 宮崎県立博物館に資料が保管されている。

⑪ 鈴木重治「九州に於ける縄文土器の編年と住居地」昭和三十六年西日本史学会春季大会の発表。

⑫ 「考古学資料目録」京都大学文学部博物館（九州地方・熊本県の部）

⑬ 「日の影町新畑洞穴遺跡及び大溜包含層調査報告」日向遺跡調査報告書第二輯。

⑭ 資料は宮崎県立博物館に保管されている。

⑮ 西田栄、鎌木義昌「伊予平城貝塚」平城町教育委員会。

賀川光夫「大分県東国東郡国東町ワラミノ遺跡調査報告」

⑯ 熊本県八代郡龍北村西平貝塚。

⑰ 小島俊次「各地域の縄文式土器」日本考古学講座3。

⑱ 河口貞徳「南九州後期の縄文土器――市来式土器」考古学雑誌第四十

二巻第二号。

⑲ 「下弓田遺跡」日向遺跡総合調査報告第一輯、宮崎県教育委員会。

⑳ 熊本県菊池郡七城村三万田東原遺跡の資料は個別に報告されているのみであり、現在熊本県立山鹿高等学校に保管されている。

㉑ 御領式土器は、北九州から南九州全域にわたって出土しており、熊本県下益城郡城南町豊田御領貝塚の資料を標式としている。

㉒ 宮崎県の尾平野洞窟、松添貝塚、大分県の弥爾野遺跡、田村遺跡、熊本県の千原台遺跡、鹿児島県の黒川洞窟の資料などが代表的である。

㉓ 鹿児島県フクアゲ町枯野所在の洞窟。黒川神社より名称が与えられている。現在鹿児島県玉龍高校に保管されている。

㉔ 資料は熊本市立博物館に保管されている。

㉕ 宮崎市青島下著方に所在する晩期を主体とした貝塚。資料は宮崎大学に保管されている。

㉖ 宮崎県北諸県郡中郷村二俣尾平野に所在する洞窟。戦前発表されたものでは「宮崎県北諸県郡二俣尾平野洞窟」小林久雄、考古学十巻第二号。戦後は宮崎大学によって発掘調査がおこなわれており、現在宮崎大学に保管されている。

㉗ ⑳参照及び神道文化会「高千穂・阿蘇」考古学的調査の項参照。

㉘ 潮見浩氏「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」広島大学文学部記要第十八号

㉙ 「熊本県の歴史」文画堂。

㉚ 三島格「肥後荒尾市境崎貝塚発見の岩偶」九州考古学7・8。

㉛ 熊本県宇土郡松橋町大野貝塚。

㉜ ⑳参照。

㉝ 大分県中津市宮永中津高等学校校庭内遺跡。

㉔ 江坂輝弥氏「土偶」狡倉書房

㉟ 八幡一郎「三脚石器」人類学雑誌四―七。

㊱ 江坂輝弥氏前掲書。

㊲ 江坂輝弥氏前掲書。

㊳ 東諸県郡綾町尾立遺跡、串間市下弓田遺跡、宮崎郡田野町ズクノ山遺跡、宮崎市木花野首遺跡など後期の遺跡には多くの資料がみられる。

第二節　石器及び石製品

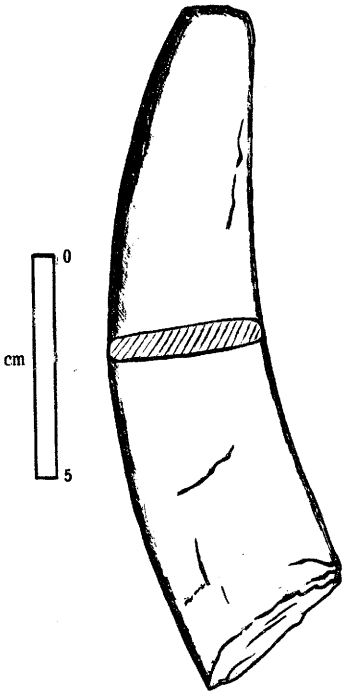
石　器

石器は遺物包含層の最下層より出土した鐘ケ崎式、西平式相当の第三類土器及び第四類土器に伴った若干の石鏃を除いて、すべて混炭の黒色土層以上から出土した。その種類は、石刀、磨製石斧、打製石斧、打製石鎌、打製石鏃、石匙、石錘、剝片石器、石錘、浮子等である。そのうち打製石斧が圧倒的に多く、発掘区が小規模であったにもかかわらず、百点に近い資料が採集されている。この事実は、その特徴的な形態から考察される用途と関連して遺跡の性格や、他の遺物との組み合わせの上でなし得る当時の生業の一端を知る点で、大きなウェイトを持つものである。この打製石斧を中心として順次、出土の各種の石器について記録する。

石　刀

第Ⅰ区の張り出し部における排土作業中に、第五類土器及び第七類土器に混じて、両端が欠損した石刀を発見した。中央部の幅約四糎、長さ二十一糎、厚さ一糎内外を測り、粘板岩製である。表裏ともに良く砥磨され、細い研磨痕が全面に認められる。片縁が直線的で、刃部に当るのであるが利器と称するにはその縁が研磨されても、ゆるやかな小さい面をなしている。一方他の縁は弧を描いてそれに対しており、さしずめこの部分が「ムネ」である。したがって平面的には両端を欠く新月状を呈している。横断面をみると尖端をなさない楔状であって全面ゆるやかなカーブを描く。縦断面からは器全体の扁平さが窺えるが、一方にゆるいカーブをもっている。

さて、縄文式時代の石器としての石刀は、近畿地方以東、特に東北地方に多くみられたものであり、その形態は、石剣、石棒に類するが、その特異性が刃部及び関部にあり、内ぞりにつくられていることである。最近報ぜられた九州内での発見が①大洞A'式と関連することが指摘され、その点から東北的な要素と見做し得る。これらの石刀を出土の石刀と対比するとき、形態の上ではかなり異っており、同一の類型として扱うことは出来ないが、石剣及び石棒との関連において、その用途を考えるときは、必ずしも決定的でないが、祭祀関係遺物としてさきの石刀と同列に扱えるものと考える。これまで石刀は晩期の石器とみられてきたのであるが、熊本県出土の例は、報告者によって



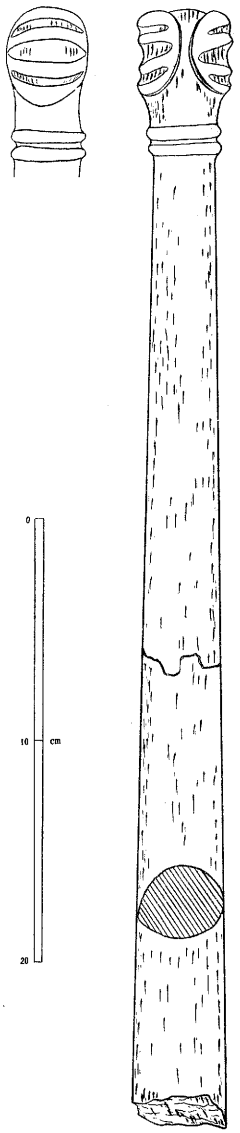
挿図 6　石　　刀

後期のものと考えられている。本遺跡の石刀については、後期、晩期いずれのものかは、明かにすることができない。なお、本遺跡からは、この石刀のほかに佐藤豊氏がかって一点を得ておられる。これも石質は同様に粘板岩製であり、内ぞりの度が強く、一様に扁平であって、砥磨の度も高い。しかも端部の一部を残しており、今回出土した石刀の端部を想定するのに参考となる。

さて発掘調査以前に出土した遺物のうちに祭祀関係資料として、今回の調査の契機の一つとなった石棒がある。この石棒は昭和二十七年四月に高千穂町在住の吉永仁氏によって収集されたものであり、現在、宮崎県立博物館に保管されている。一端に瘤状の頭部をもつものであって、その頭部に彫刻が施されている。その彫刻がX字状結接文であることによって、土器の文様との関係から、陣内一式土器との関係が指摘されるものである。したがってその時期は後期末葉かと考えられる。断面は頭部を除いてほぼ円形であり、直径は頭部に近く三糎内外を示し、損失部に近く三・五糎に及んでいる。瘤状の頭部から徐々に細くなり、二本の隆起帯に挾まれて一本の沈線が刻まれ、この部分において最短の径を示している。現存長は二十九・八糎である。

さらに高千穂町在住の田尻アヤ氏が所有する石棒の破片②がこの石棒と同一個体のように思われたので接合してみると、奇しくも一端において完全に連接した。田尻氏の石棒片は、組み合わされた端より徐々に径を増し、他の一端において最大の径四糎を示す。両者合した現存長五十二糎が測られる。したがって二コの石棒片を接合しても原休の半ばに達するかどうかという部分で折れていることがその断面の径

によって示される。単頭の石棒であったか、両頭の石棒であったかは不明であるが、原体が五十二糎の二倍とみても最小限一米以上に及んだものと想定されるのである。なお、未確認ながら同様の破片が別に本遺跡から採集されていると聞いたが③これが最初の石棒と接合し得るか、否かは機会を得て明かにしたいものである。さて頭部の彫刻を中心として類例を求めると、茨城県稲敷郡陸平、山形県飽海郡上郷村字成興野の例④などに頸部に隆起帯をもつ点で類似するが、それらはともに一本の隆起帯のみである点が異り、陸平例の頭部のX字状結接文は陽刻されているのである。このように西日本はもとより、全国的に類例は数が少い。その彫刻文によって後期末葉の遺品であると考えられる。



挿図 7　石　棒

磨製石斧

Ⅰ区、Ⅱ区を通じて出土した磨製石斧は五例のみである。うち一例のみがほぼ原形をとどめているが、これとても刃部の片面をはじめ三カ所に大きく損失部がある。他の四例は刃部を損失するもの、刃部及び基部を損失するもの、基部のみを損失するものとすべて欠失がある。これらの磨製石斧は形態の上では後期に一般的にみられる蛤刃の形を有し、小形の一例を除いて、幅五糎内外、長さ十三〜十四糎のものである。小形のものは刃部の幅四糎内外、長さ十糎であるが欠失している基部が平坦に磨られており、使用法が他の例と異っていたとも推測される。刃部を欠くものはもとより、刃部を残すものでさえ数カ所に小欠損をみる。それらを使用痕とみるとき相当の使用が窺える。出土の状況からする土器との関係は、五例のうち四例までがⅠ区のA地点及びⅠ区のA、B両地点にまたがって出土し、しかも混炭の黒色土層中であることから、陣内一式、二式、三式に伴うものと考えられ、Ⅱ区の一例も黒色土層中の出土であることによって、すべて後期末葉の所産と判断される。石材はすべて安山岩であり、形態上も共通性がみられる。磨製石斧は早期より晩期まで各時期にみられるが、晩期になると量的には打製石斧にとって代られる傾向がみられるばかりか、小形扁平の片刃石斧や、ノミ形石斧などに変化していくかと思われる。これらの磨製石斧は九州一円にみられる第七類土器に伴って各地からかなり出土している類例が

あることから、典型的な後期末葉の石斧ということができる。

打製石斧

多量に出土した打製石斧は、形態の上で多少の変化はあっても、粗製で扁平という点で共通性があり、一、二の粘板岩製、砂岩製のものを除いてすべて変質の頁岩である。それらを形態の変化にもとずいて、一応厚手づくりで西洋梨形のもの（第一類）と、扁平で大形の短冊形のもの（第二類）、短冊形のもの（第三類）、靴形のもの（第四類）、方形形のもの（第五類）、バチ形のもの（第六類）の六類に分かった。

第一類

この型の石斧は一点出土した。石斧と呼ぶよりも握槌と呼ぶ方が適しているような形である。長さ十一糎、最大の幅七糎あり、変質頁岩製で、西洋梨形を呈する点に特徴があって、その厚さは後述する各型式の石斧と対比して一、二を除いて約二倍に近い厚みを有し、三糎に及んでいる。両面とも第二次剥離によって作られた剥離面をもち、刃部とみられる部分に押圧剥離による粗い再加工が認められ、ほぼ半円に近い粗雑な刃部をつくっている。肩部から徐々にせばめられる基部の長さは、全長の半分に近く、握るに便であるが、おそらく柄を着装したものであろう。このことから手斧または槌とみるのである。後期以後の土器に伴って出土した石斧で類例が見当らず、すくなくとも西日本においては報告されていない。ただ縄文式文化以前のハンドアックスのうち、権現山Ⅰ⑤の時期の石器の形態に酷似する例がみられるが、これとて用途上で類似すると想定出来ても、直接関連あるものとしては扱えない。石質においても本遺跡出土の他の打製石斧と同じであり、しかも使用痕の状態や器面の磨消の状態も他の石斧と特に変化が認められない。してみると後期末葉の時期に、多様な用途に対応して作られた特殊的な形態をもつ打製石斧ということになる。これまで一般に打製石斧として扱われて来たものでも、その用途の分化とともに、形態が変化したことが指摘されるのであって、後述する各種の打製石斧の用途を考える際にも、重要な意義が生ずるものと思われる。

第二類

ここに一括した石斧は、厚さに多少の変化はあるが、長さ十四糎刃部の幅七糎に及び、出土の打製石斧のうちでは最も大形に属し、磨製石斧にもこれらより大きいものはない。これらには刃部を欠くものが多く、原形をとどめるものが少い。これは盛んに使用された結果欠損が多かったからだとみられる。刃部の欠けたものの欠け方をみると、そのほとんどが三分の一から二分の一で折損するほど大きく欠け、基部に近い部分のみを残したものが多い。したがって使用にあたっては、刃部の一部分に衝撃が加わるのでなく、それが刃部全体に加ったとみられるし、しかも次々と折損じて行ったものではなく一挙に折損じたものとみられる。また一部分が欠けたあとで、更に使用することによって全体が欠けたというものでもないことはあきらかである。このことは柄の着装が刃部に対して平行に柄をつけたとするより、むしろ刃部に対して直角方行に着装されたと考えられるものである。したがって鍬のようなはたらきをする土掘り具とみられる。更に刃部に近

く厚さを減じていることも土掘り具と見做すことができる。石質は大部分緑色を帯びた乳白色の変質頁岩であり、他の石材を使用したものは、砂岩製のもの一例のみである。この石材の共通性も同種の形態を多量に作る場合のめぐまれた条件であって、単純なしかも同一の用途にあっては、石材の供給源との関連もあろうが、その撰定の確実さが反映されているものとみられる。なお、この類の打製石斧は、扁平であるという点で第一類とは異り、第三類から第六類までの他の打製石斧と同様の特徴をもっている。

第三類

本遺跡の出土の打製石斧のうち、第三類は最も多く出土したものである。第二類をやや小形化したものともいえるが、その形態にやや変化したものがみられる。刃部はほぼ平坦なもの、やや外反するもの、大きく外反して、中央部がはり出したものなどがあり、またその平面形は、靴型に近く一側面が内反するもの、刃部を底辺とする台形に近いもの、大形の尖頭器の尖端を欠いたような形のものなどである。このように形態に小異はみられても、主要なものは刃部にまるみを持つ短冊形の器形のものであり、扁平な点に共通性を示している。その用途は、形態の類似から第二類の打製石斧と同様土掘り具と考えるのであるが、このとき更に有力な形態上の特徴を示すものがある。図の32—5に示したものに典型的にうかがえ、図32—4においても認められるように、その断面形がカーブをもっている。この断面にみられるカーブを生かし、効果的に使用するためには、刃部と直交する柄を着装し、しかもカーブ側に柄の手許があることが望まれる。従って小形の唐鍬が推測されるのであり、土掘り具としての用途が導き出せることになる。

用具を製作するに当ってその形態からくる効果を考えた上で製作することは当然であり、他の種類に富んだ石器や、形態が分化されつつある土器を示すまでもない。一口に打製石斧と呼ばれる石器が、この時期になって形態の上で多くの変化をみ、その用途に多様性をみるのと相まって、磨製石斧とは明らかに分化し、後述する打製の石庖丁様石器や打製石鎌を始めとする石製品や土製品との関連もあって、原始農耕の具体的な耕具の一つにまで分化することは考え得ることである。それらの農具と直接関係ある用具として、ここに示した扁平な打製石斧を考えてみたい。

また短冊形として一括した打製石斧のうち、図32—6、及び31—4は、その形態において他の一群のものと異っており、これはまた用途の上での変化を反映するものと思われる。32—6は刃部のさきとがりや、その断面の形態から文字通り斧的な用途が考えられものであり、基部の打欠き方からも刃に平行する柄の着装が考えられるものである。31—4は自然面を多く残し、第一次剥離によって、すでにその概形が形造られたものであって、刃部の再調整は他側面にも同様に行なわれているもののようである。これを主要な刃部とすると、短冊形の一長辺に刃部を持つことになり、他の扁平な短冊形の打製石斧とは自ずと用途を異にし、むしろ後述する石庖丁様石器と同様柄を着けず、刃部を使ってのすりきり具と考えられる。

なお、ここに示した第三類の打製石斧は、一、二の粘板岩製のもの

を除いて、第二類の打製石斧と同様に緑色を帯びた変質頁岩が使用されている。

第四類

ここに一括した石器は、その平面においてD字状に片側に張り出しをもつものと、その変形とみられるもの及び第二類乃至は第三類とした短冊形に近いが、片側に浅い彎入がみられるものなどに細分し得るが、全体を通じて足形と称し得るものである。この形態に属するものも、他の大部分の打製石斧と同様扁平であり、各稜線の磨滅の度が高永く使用に耐え得たものとみられる。石質も同様の変質頁岩であるが、31—1は片面に大きな剥離面を残すだけであって、平坦であり、31—3と共に尖端部に主要な刃部を持つものである。これは土掘り具を考えたとしても、与えられた力が局所的に集中し得るという利点が認められる。

第五類

大形の短冊形の打製石斧をほぼ中央部で切断し、調整することによっても作成し得る形態であり、刃部の幅も広く、方形に近い。この類の資料は極くわずか混在しており、図30—5などは典型的なものである。なお、この資料は稜線の磨滅の度が高いばかりか、刃部に対して直角の方向、すなわち縦に多くの浅い条線がみられ、特に刃部に近く顕著であることは、使用痕として認められるものである。この使用痕が部分的でなく、刃部に万遍なく見られることも、用途を考える上に重要である。

第六類

形態の上で撥型と分類し得るものは、第四類（足型）、第五類（方形型）と同様にその数は少いが、第Ⅰ区、第Ⅱ区を通じて出土している。この類は図に示す通り小形であり、その用途においても、自ずと第二類、第三類を始めとする他の扁平な打製石斧と異るであろうが、それとて十分に明らかにし得るものではない。ただ後晩期の磨製石斧の形態の分化の多様性に関連して、小形化されたものが知られている事実と対比してみると、打製の石斧においても形態が分化するにつれ小形のものが生じたもののようである。中期以前にみられない。今後このような小形化された石斧を生産用具の変遷の中で検討することは、興味ある問題の一つである。

以上、六類に分類した打製石斧は、その形態によって一応区分したのであるが、それらの石質や稜線の磨耗度、更に器面の変化に劃一性があり、製作も同巧であって、時期的に多少の前後があったとしても、大差のないものとして扱うことが出来、伴出土器と対比して、およそ後期の末葉から晩期初頭の石器と考えられる。出土の状況からはそれら相互の先後関係を指摘することはできない。また土器型式との相関関係による石器自体の編年が殆んど行なわれていない現在、これ以上の推論は不可能である。

さて、打製石斧は、早期から晩期までの各時期にわたって磨製石斧などと共に普遍的にみられる石器であり、時期によって変化のあることは否定できない。かって打製石斧をその形態によって、分銅型、小判型、匙型、足型に区別することも行なわれ⑥、また扁桃型、撥型、

短冊型、杓子型、分銅型と分類し、その順において時期的な変化と捉えられたこともある⑦。これらは関東地方の資料を中心としたものであるが、先に示した第一類から第六類までを、これに対比してみると第一類の西洋梨型のものを除き、撥型、短冊型として扱えよう。第四類（足型）及び第五類（方形型）は短冊型の変形とみてさしつかえない。短冊型のものは関東地方において中期の勝坂式に一つのピークをもって、それ以前には例の少いもののようであり、また分銅型は、加曽利B式以降に集中的に現われる後期の特徴的な形態といえようが、この間にあって、土掻き⑧と呼ばれた杓子型のものがあることは見逃せない。土掻きが竪穴住居を作る場合などに使用されたとしても、それだけに限定することは、まず考えられないことであって、土掻き―土掘り具を文字通り広義に捉えるのが妥当であろう。後期の主要な打製石斧であった分銅型は必ずしも各地方に及んでおらず、九州地方では、主流が短冊型であり、その変形としてこれが認められるに過ぎない。しかも本遺跡においては先にも示した通り、分銅型の変形と考えられて撥型が小形化されて出土しているに過ぎず、関東地方の特徴をそのまま本遺跡でみることはできない。下楠田貝塚の例を始めとして、九州における後晩期の打製石斧は短冊型、またはその変形である。これらの扁平な打製石斧が中期以前に余り多くみられないのに、後晩期に至って急激に量を増しているのは当時の生業の反映の一つとみるのである。先にも触れたように、柄の着装の方法と使用痕跡とから土掘り具とみられるのは短冊型の扁平な第二類、第三類を中心として考えられるのである。

打製石鎌

三日月状に弧を画き、その弦部の中央から一先端部にかけて刃部がつくりだされている打製石器がある。長さ十四・五糎、中央部での巾四糎内外、同じくその厚さ一・五糎内外のものであり、弦部での彎入は一・五糎にも及んでいて、粘板岩が使用されている。この石器の刃部は内彎した弦部にあり、その他の部分では、再調整が認められない。その形態から掻き切ることを目的とした、すり切り具が考えられる。後述する打製の石庖丁様石器とほぼ同様の機能をもつ用具であろうが、その効用については、より効果的な形態をもっている。そりの度の高いことから、農具の鎌を想起させるものであり、これまでにこの時期の類例は知られていない。磨製の石鎌⑨については福岡県の例⑩が早くから報ぜられ、その後も類例を増している。これらは弥生式期のものであり、異質のものであるため同一に扱えないが、形態上は多くの類似点が指摘し得る。されば磨製の石鎌が石庖丁と対比し得るように打製の石鎌も打製の石庖丁様石器と対比し得るのであって、その形態の分化の中で派生し、より効果的な機能を果したものと考える。磨製石鎌や石庖丁が水稲の収穫にあたって使用された石器であるのに対して、この打製石鎌は必ずしも栽培植物の収獲に用いたものとは決められないが、この時期に植物の栽培が行なわれ、一種の原始農業が存在し得たとするなら、そのことに直接関係し得る用具とみられよう。

打製石庖丁様石器

扁平な打製石斧と同様な出土状況を示し、その石質を等しくする石

器に打製石庖丁様石器がある。これらは打製石斧ほど多くは発見されないが完形品が多い。形態によって三種類に区別し得るが、その変化をそのまま時期の変化の反映とはなしがたい。その平面形が短冊型の打製石斧に類似するものは、その扁平度において類似し、大きさも長さ十二糎内外、幅五糎内外と相近く、再調整された刃部が長辺にある点のみが異るのみである。刃部はやや内彎するものと、ほぼ直線的なものとがある。また図に示した資料は不整形な長楕円形をなし、基部から刃部へと急激に厚さを減ずるもので、より機能的な形態を示し、刃部の調整も十分に行なわれている。この刃部はやや外彎する点で前者とは形態の上で異っている。三日月状、ないしは半月状の形態を持つものは刃部が外彎している点で図示したものに類似するが、その扁平度においてはその二分の一にもみたない。これらは、短冊型の扁平打製石斧を製作する過程の一部を変更し、刃部の位置を長辺に変えることによっても当然作り得る筈であるが、当初からその石材を選定した上で整形しているものと考えられる。

さて、これらの用途は、刃部の位置からして打製石斧の如く、振りおろす力による用具とは考えられず、完型品の多いことから考えても強い力によらず、また強い衝撃が加わらない。したがって、破損度の少い用途のものと考えられる。してみると柄の着装されたものがあったかもしれないが、すり切り具と考え得ることができる。類例は関東地方の中期以後にみられ、殊に後期の加曽利B式以後に多く見出すことができるし、県内でも下弓田遺跡を始めとして、後期以後の遺跡にその例が指摘される。晩期のものは、よりその扁平度が高いようであり⑪、これを弥生式期の石庖丁の源初的な形態とみるむきもあるが、磨製の石庖丁は稲と関連ある遺物であって、直接には連結しがたい。それよりむしろ宮崎県下にも多くみられ⑫、東九州から瀬戸内に主要な分布をもつ打製の石庖丁とこそ関連するものとして指摘されるのである。ただ禾本科の植物の採集には効果的な用具であるとしても、工具として一般的な用途にも使用し得るのであるから、その用途を限定して考えることはさしひかえたい。

石　匙

出土の石匙は縦型のものと横型のものがそれぞれあるが、頸をもつ有柄のものは縦型のもののみである。またそれらは形態の上でバライェティーに富み、縦型にも大形なると小形なるとがあり、中には無柄のものがある。横型のものは図に示したものに端的にみられる如く、剝片に刃部を中心として加工されるのみである。無柄の縦型のものもその用途においては他の縦型の石匙と同様のことがうかがえる。扁平の度において横型のものが高く、より機能的なものともみられるが、用途については多少の異りがあったと思われ、図示した横型のものなどは石庖丁様石器との関連が強いものとみられる。大いさも長さが十一糎、九糎内外（復元して）六糎、十糎、七糎、五・五糎とそれぞれ異り、それが用途と関連するものとみられる。石匙を動物性収穫物の皮剝ぎを中心とした処理用具と考える以外、他の工具に使用されなかったとみることは出来ず、採集経済が基調をなした当時、重要な石器の一つとして持続したものであり、その中で用途、機能に分化が生じたのは当然である。

縄文式中期に原始農耕が発生した一つの証拠として、動物性収穫物の処理に用いられたとみる有柄石匙が中期以後に激減することを指摘されたことがあるが⑬、九州ではむしろ有柄石匙が持続したことを強調してよいから、原始農耕の発生に伴う現象とみることは適当でない。

石　鏃

第Ⅰ区、第Ⅱ区を通じ、発掘によって得られた石鏃は五十点に近い。茎を有するものはなく、すべて大きく股を有するものと、基部が直線的につくられたものとである。主要なものとしては、平面五角形のもの、基部に比して長さの長いもの、押圧剝離面が少く再調整の粗雑なものなどである。全体を通じてその製作は粗雑である。石質をみると瑪瑙、粘板岩、チャート、黒燿石など種類に富むが、粘板岩、チャートが主要なものである。黒燿石は姫島産のものと阿蘇産のものとが混在している。これらは後晩期に普遍的な様相をもっており、出土量の多いことは、その消耗率の高いことにもよろうが、生活の依存度の高い生業を暗示するものとも思われる。なお、これらの資料は各層にわたって、万遍なく出土したものである。

石　錐

粘板岩製の石錐が一点出土している。この石錐の製作は石鏃と同様のテクニックによる。なお、本遺跡から出土して高千穂町在住の佐藤豊氏が所有する、石錐は優品であるから、合わせて図示しておく。

石　槍

頁岩製の石槍片が一点みられる。現存長四・五糎、最大の幅四・二糎、厚さ一糎を示し、断面は扁平な楕円形に近いものであり、後期に普遍的な資料である。

石　錘

両側を打ち欠いた石錘が一点出土している。この石錘は扁平な砂岩の小礫を素材としており、長径六・五糎、短径四・五糎を示す。

軽石製浮子

第Ⅰ区及び第Ⅱ区の各層を通じて軽石片が多量に出土しているが、それらのうちには図示したものをはじめとして、加工されているものが数点ある。中央部に貫通した孔を有するものと、側面が打ち欠かれているものとがあるが、それらをともに紐掛け、紐通しとみることによって、浮子と考えてよいものである。九州では海浜遺跡にしばしばみられる石器であり、鹿児島県草野貝塚の出土例の如く特に彫刻⑭はないから、垂飾品とするより浮子と考えられるものである。

剝片石器

黒燿石製の剝片石器が二点出土している。これらはともに無土器時代のスモールブレイドに類似する。一は断面三角形で長さ五・二糎、幅二糎内外、厚さ〇・八糎内外であり、基部にプラットフォームを持ち、一面に打瘤痕を残している。又部は片側にのみつくられており、側面の中央部の一部に押圧剝離が施されている。二は一と同様片面に大きな剝離面をもつが、又部は基部に対する一方の端にあって、片側より押圧剝離がなされている。これらをその形態の類似から無土器時代のものとするのは早計であって、九州では後晩期の遺跡から数例出土している。すなわち古くは有喜貝塚⑮をはじめとして、田村遺跡⑯礫石原遺跡⑰、百花台遺跡⑱などにその例がある。最近では中国地方

の岩田遺跡⑲からも同様なものが報ぜられている。このようにしてみると、後晩期の石器とみてよいようであり、さきに示した西洋梨型の握槌とともに後晩期の石器の分化の一つとして、今後なお検討さるべきものである。

有孔円石

第Ⅱ区の混炭黒色土層中から、粘板岩製の小形石製品が出土している。ほぼ円形に近く、直径二・二糎内外、厚さ〇・二糎大のものであって、中央に〇・六糎内外の径をもつ孔が穿たれている。全面にわたって研磨されているが、特に彫刻はない。貫通する孔を持つので垂飾品ともみられるがその用途は明らかでない。県内の、綾町尾立遺跡⑳から表面採集されたものに類品が一点あるが、尾立遺跡出土の土器がおおむね後期のものとみられること、また用材、製作が似ていることなどから後期の垂飾品の一つとして扱い得るものである。

小玉

調査の最終日に、前夜来の雨で洗われた第Ⅰ区A地点から緑色の小玉が発見された。この小玉は直径〇・三糎に及ばない翡翠製であり、断面から胴張りの形がうかがえる。穿孔は片側からおこなわれたものようであり、一方の端に至って、外面から調整したものである。この時期の小玉は、九州で類例が少く、他の形態を示す玉でも、肥後における数例㉑を除いては報告されていない。なお、中国地方で御領式㉒を主体とした岩田遺跡において数例出土していることを特記しなければならない。

以上が本遺跡出土の石器及び石製品であり、磨製石斧、石刀、石棒、打製石斧、打製石鎌、打製石庖丁様石器、石匙、石鏃、石槍、石錘、軽石製浮子、剝片石器、有孔円石、小玉とその種類に富み、信仰関係品をはじめとして、利器としての土掘り具、狩漁猟用具、その他の工具、垂飾品などにわたるものである。これらは生活内容の複雑性を示しており、生業の内容を知る上で土器などとの関連から多くの問題を提起するものと考える。

① 乙益重隆氏「熊本県出土の石刀二例」九州考古学13
② 高千穂高等学校「高千穂地方出土品地名表出土品分布図」所収の資料であり現在は宮崎県立博物館に保管されている。
③ 高千穂町教育長甲斐清喜氏の教示による。
④ 佐藤伝蔵「日本石器時代石棒頭部彫刻考」東京人類学会雑誌第十二巻一〇九頁
⑤ 芹沢長介「無土器文化」考古学ノート先史学時代—日本評論新社
⑥ 坪井正五郎「西ヶ原貝塚探究報告」人類学雑誌八—八五頁
⑦ 酒詰仲男「本邦先史石器類概況」人類学先史学講座第十九巻
⑧ 大山柏「神奈川県下新磯村勝坂遺跡包含地調査報告」史前学会小報1
⑨ 弥生期の石庖丁の一部をその形態の分類によって石鎌型とするむきもあるが、ここでいう石鎌はそれと同義ではない。
⑩ 森本六爾「筑前発見の磨製石鎌」日本原始農業所収、東京考古学会
⑪ 昭和三十二年国分直一氏らによって発掘された鹿児島県大渡遺跡の例
⑫ 鈴木重治「宮崎県立博物館収蔵の無孔石庖丁について」貝塚六十九号
⑬ 上野佳也「有柄石斧試論」考古学研究30
⑭ 草野貝塚出土の類例は鹿児島県立玉龍高等学校に収蔵されている。
⑮ 浜田耕作、小牧実繁、島田貞彦氏「肥前有喜貝塚発掘報告」人類学雑誌第四十一巻一号〜第四十一巻二号
⑯ 賀川光夫「大分県大野郡朝地町田村遺跡調査報告」朝地町教育委員会

⑰ 西北九州特別委員会（日本考古学協会）によって調査された。
⑱ 西北九州特別委員会（日本考古学協会）によって調査された。
⑲ 潮見浩氏前掲報文
⑳ 東諸県郡綾町尾立遺跡から表面採集された資料は現在宮崎大学の保管するところとなっている。
㉑ 曽畑貝塚、三万田東原遺跡等。
㉒ 御領式を細分することについては本文中に指摘した通りであり、ここでは報告者の使用する名称に従った。

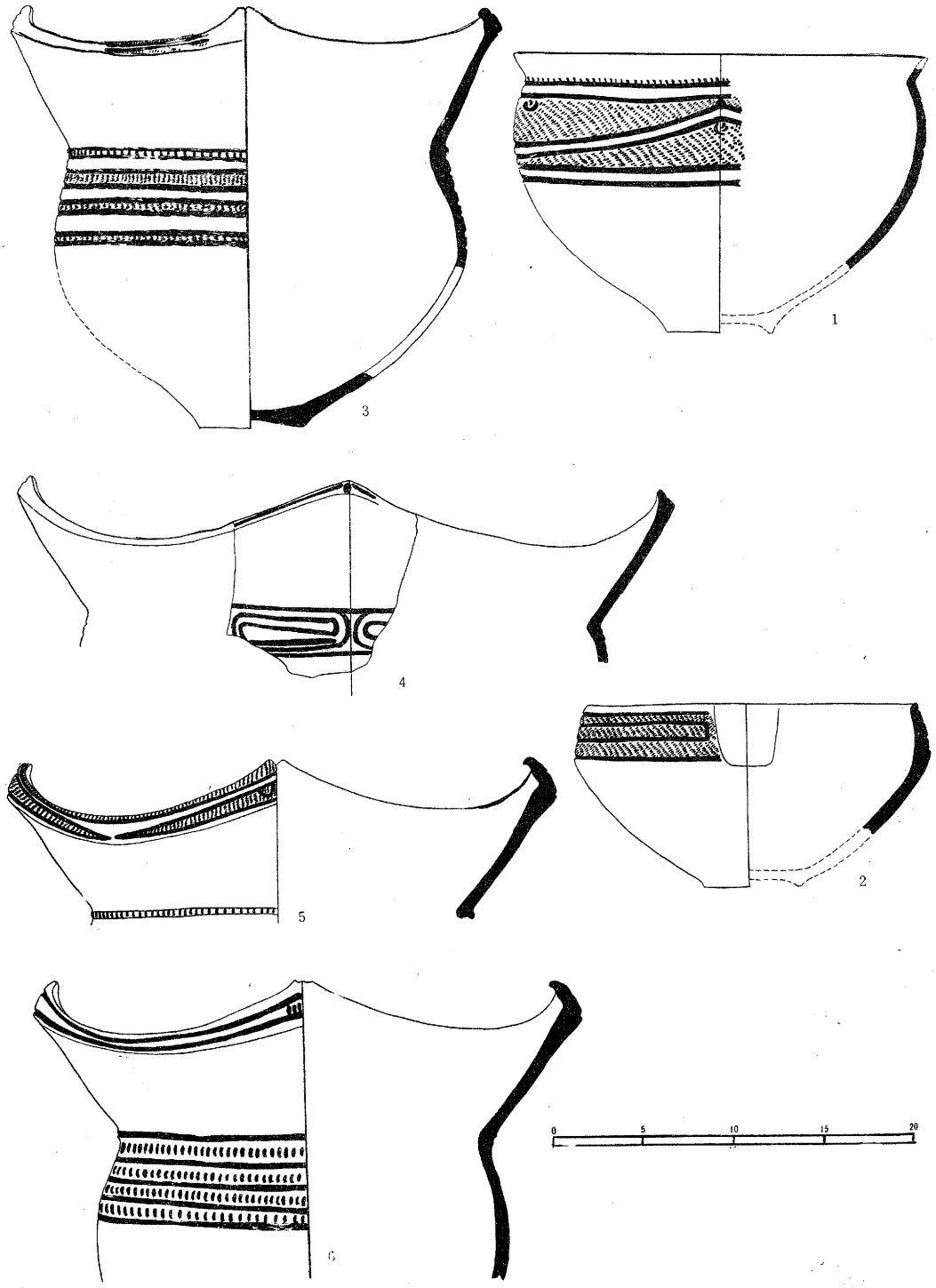
第三節　自　然　遺　物

第一節及び第二節において本遺跡出土の文化遺物について述べたが、次に自然遺物についてその名称を記録する。

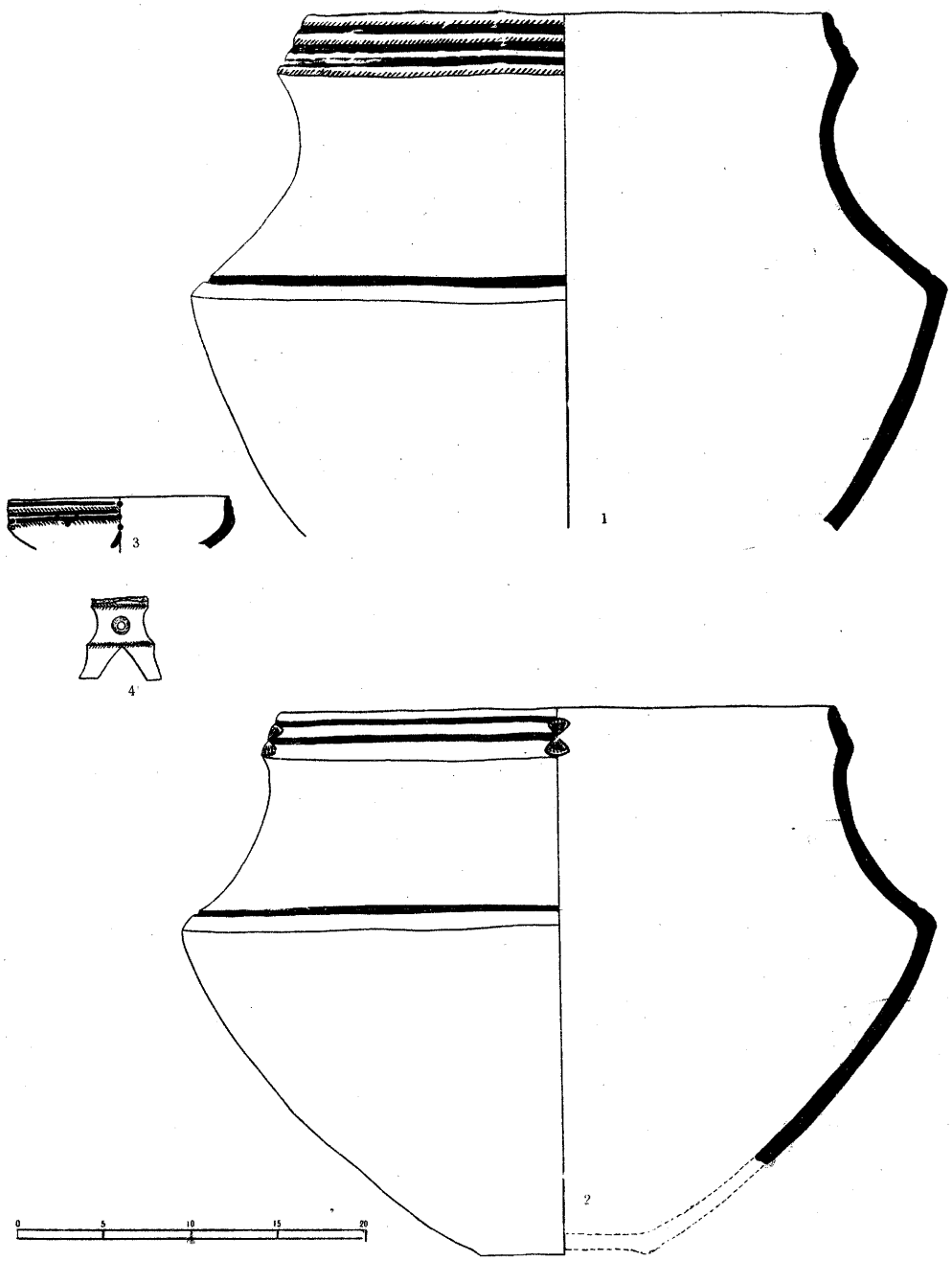
一、木炭片及び木炭粉　（多量）
二、鳥獣骨片　（少量）
三、魚骨　（少量）
四、植物の実（トチ？）　（少量）

なおこれらの自然遺物については、九州大学に鑑別を依頼してあり、その結果が明らかになった際あらためて公表することとしたい。

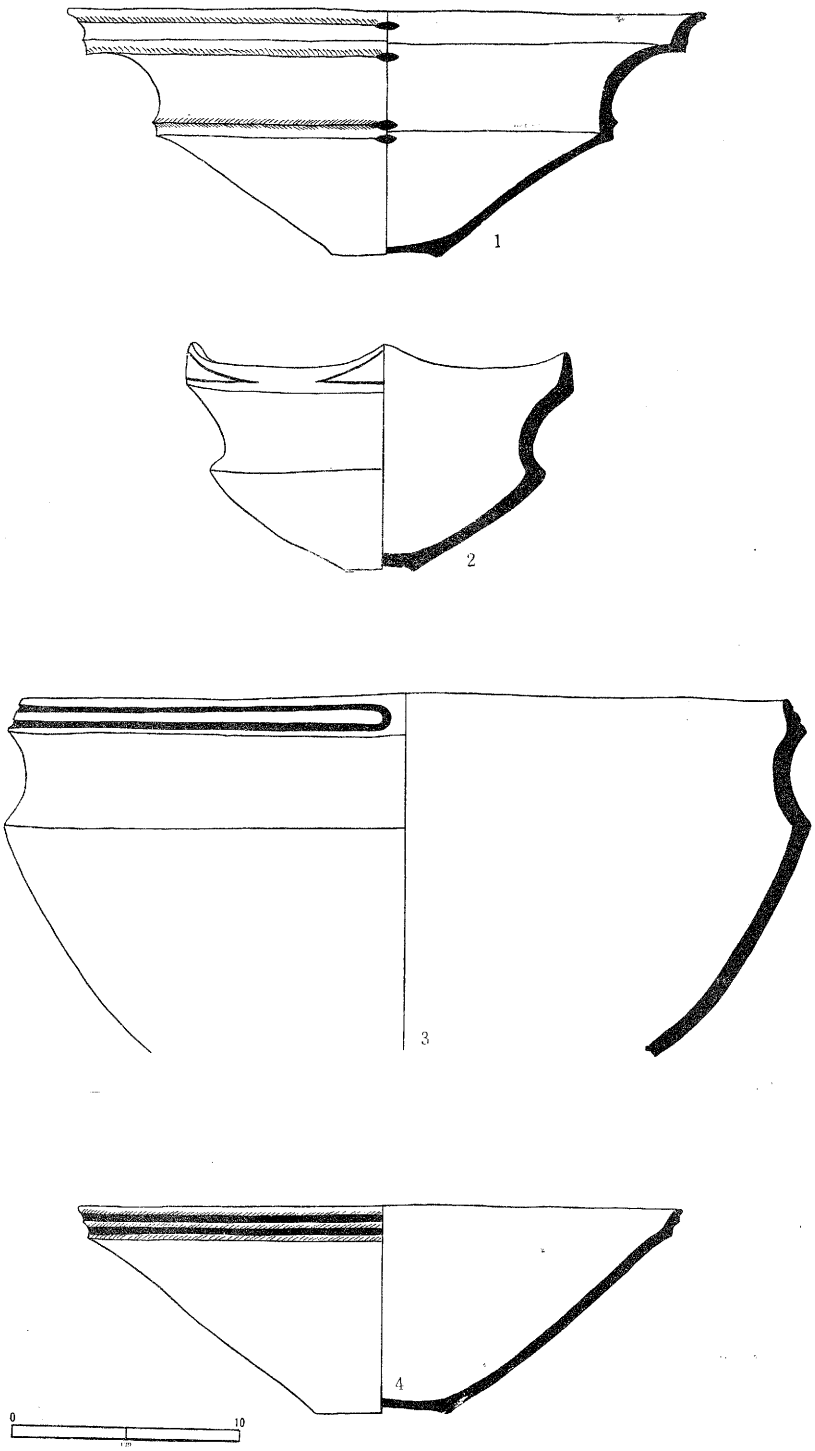
（鈴木）



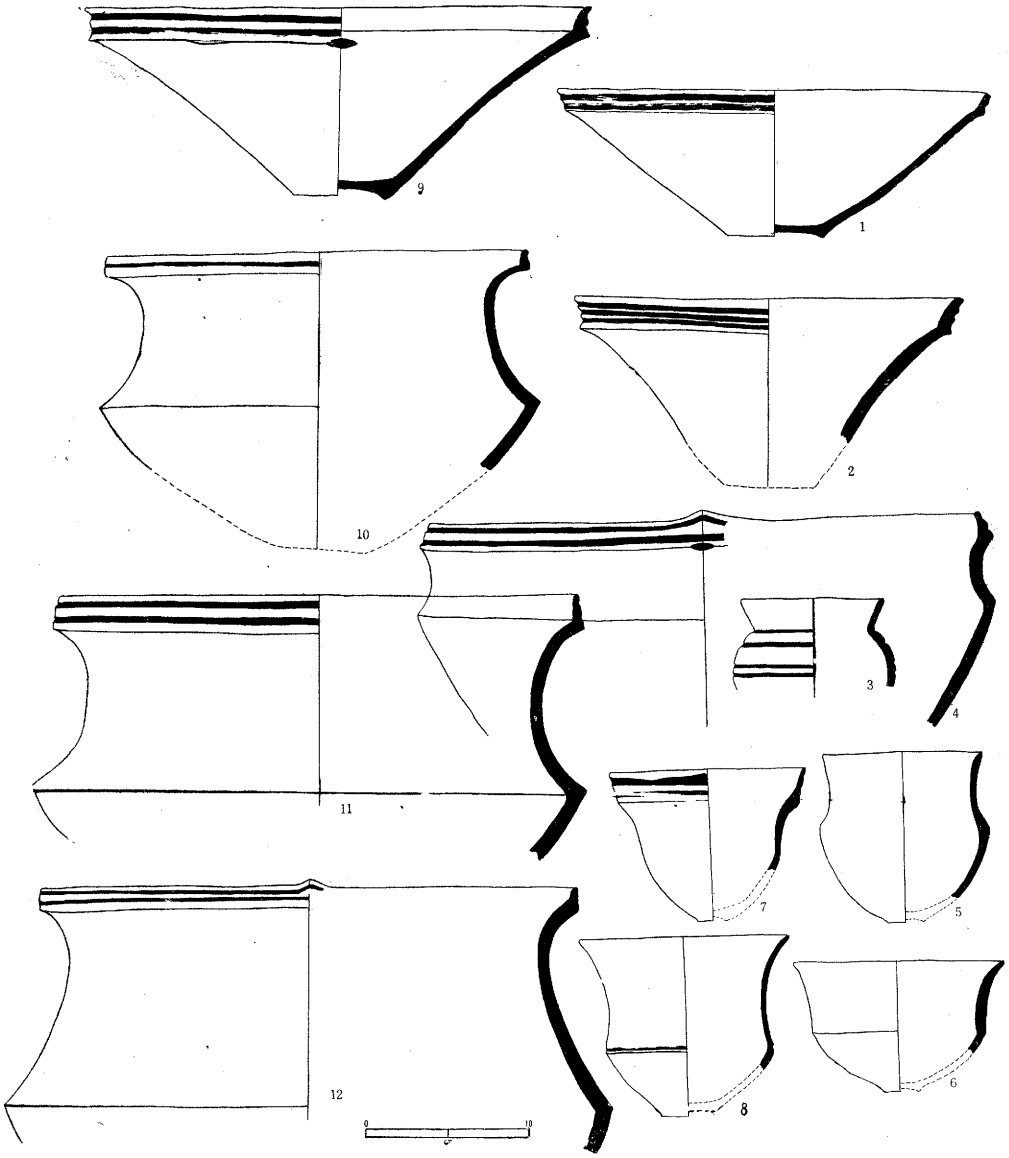
第 4 図　第三類土器，第四類土器



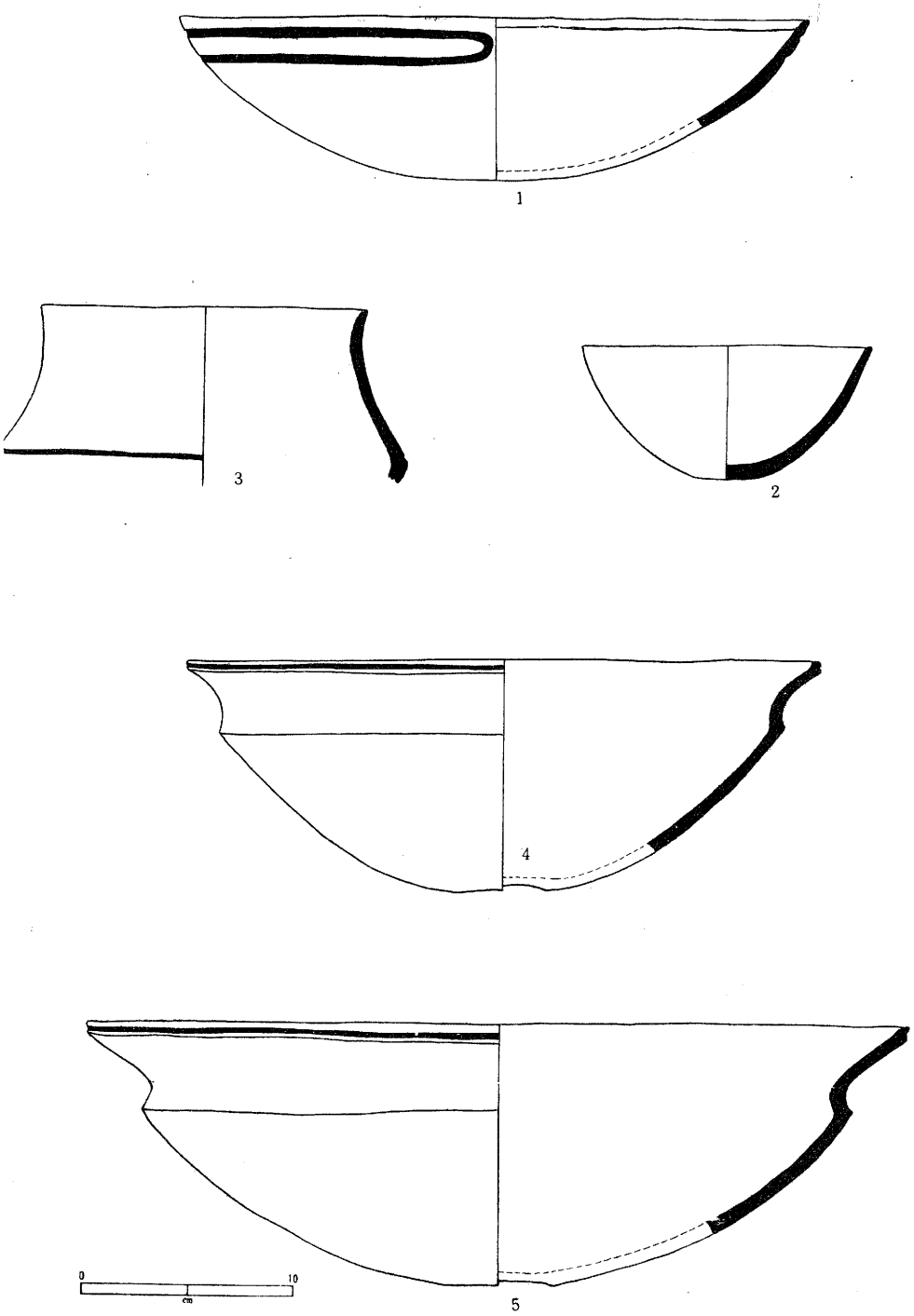
第 5 図　第五類土器



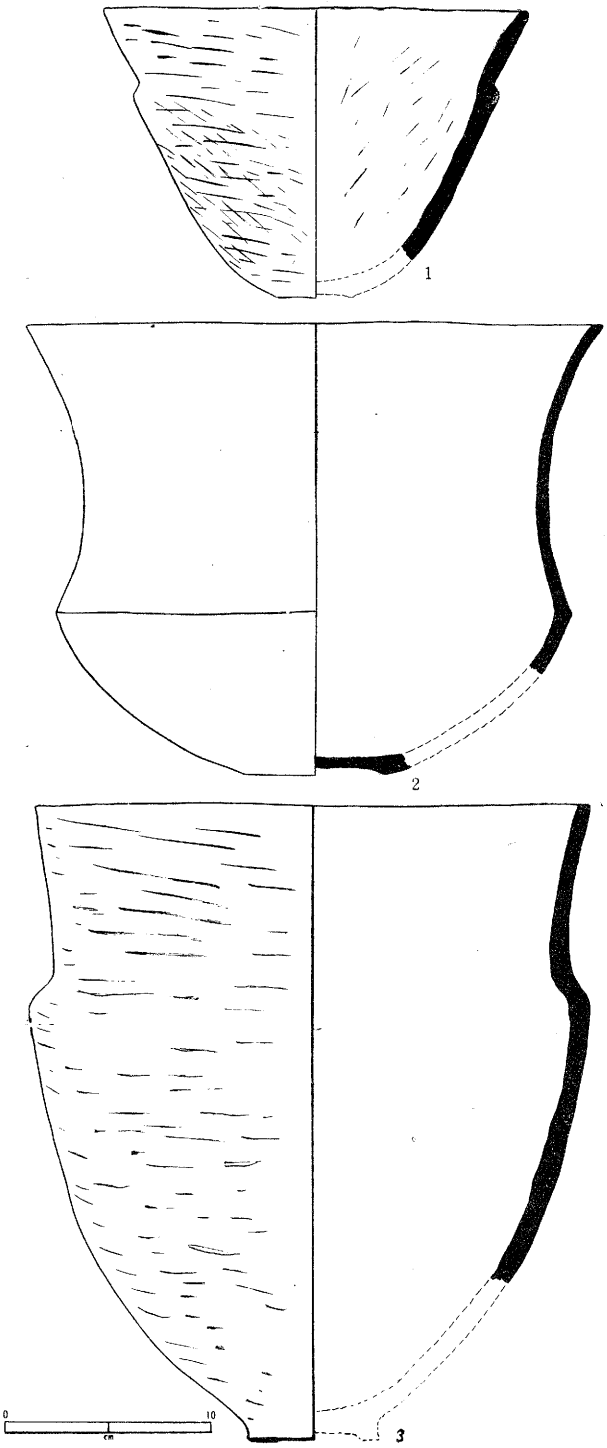
第 6 図　第六類土器（陣内式）



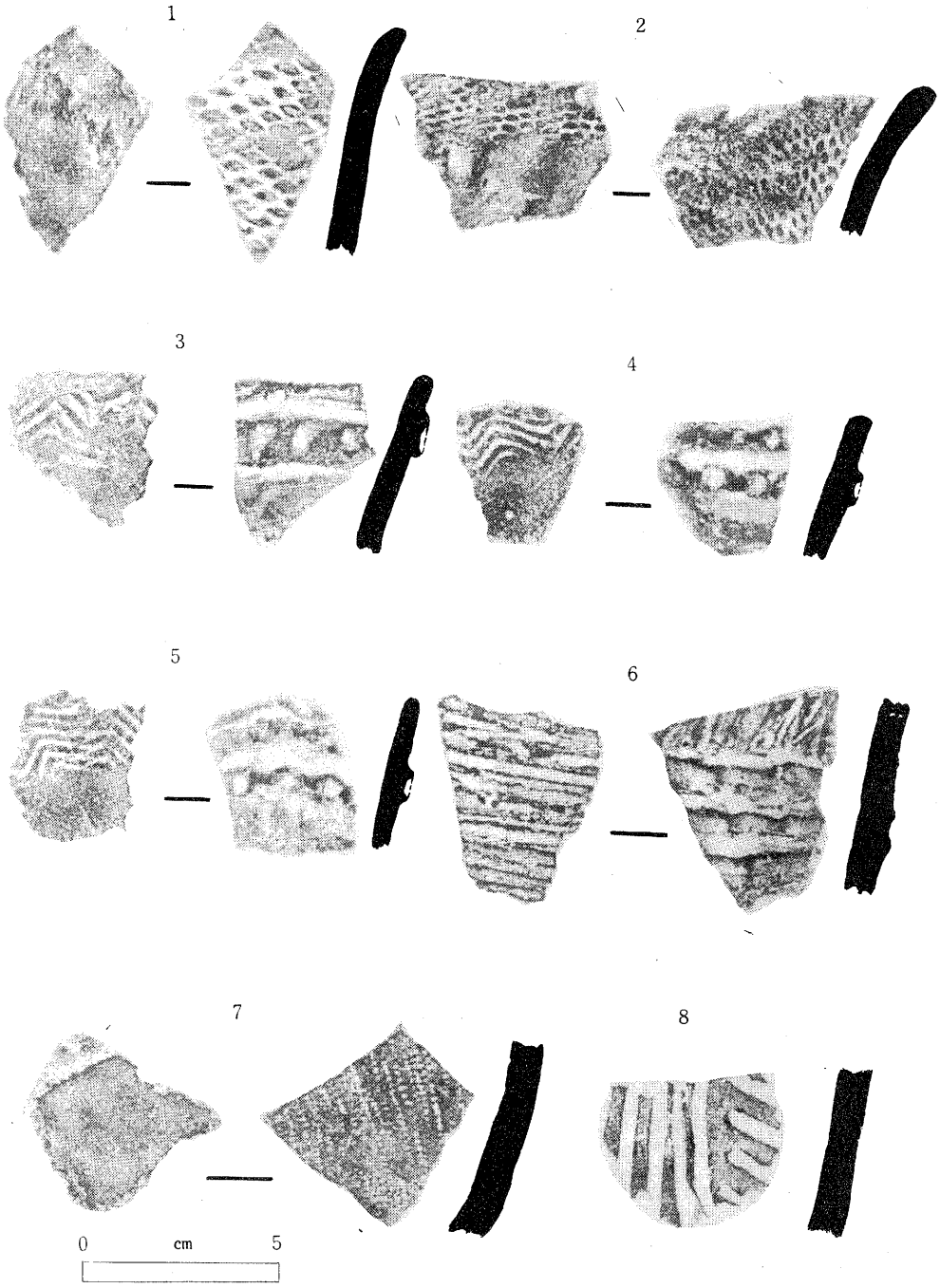
第 7 図　第七類土器



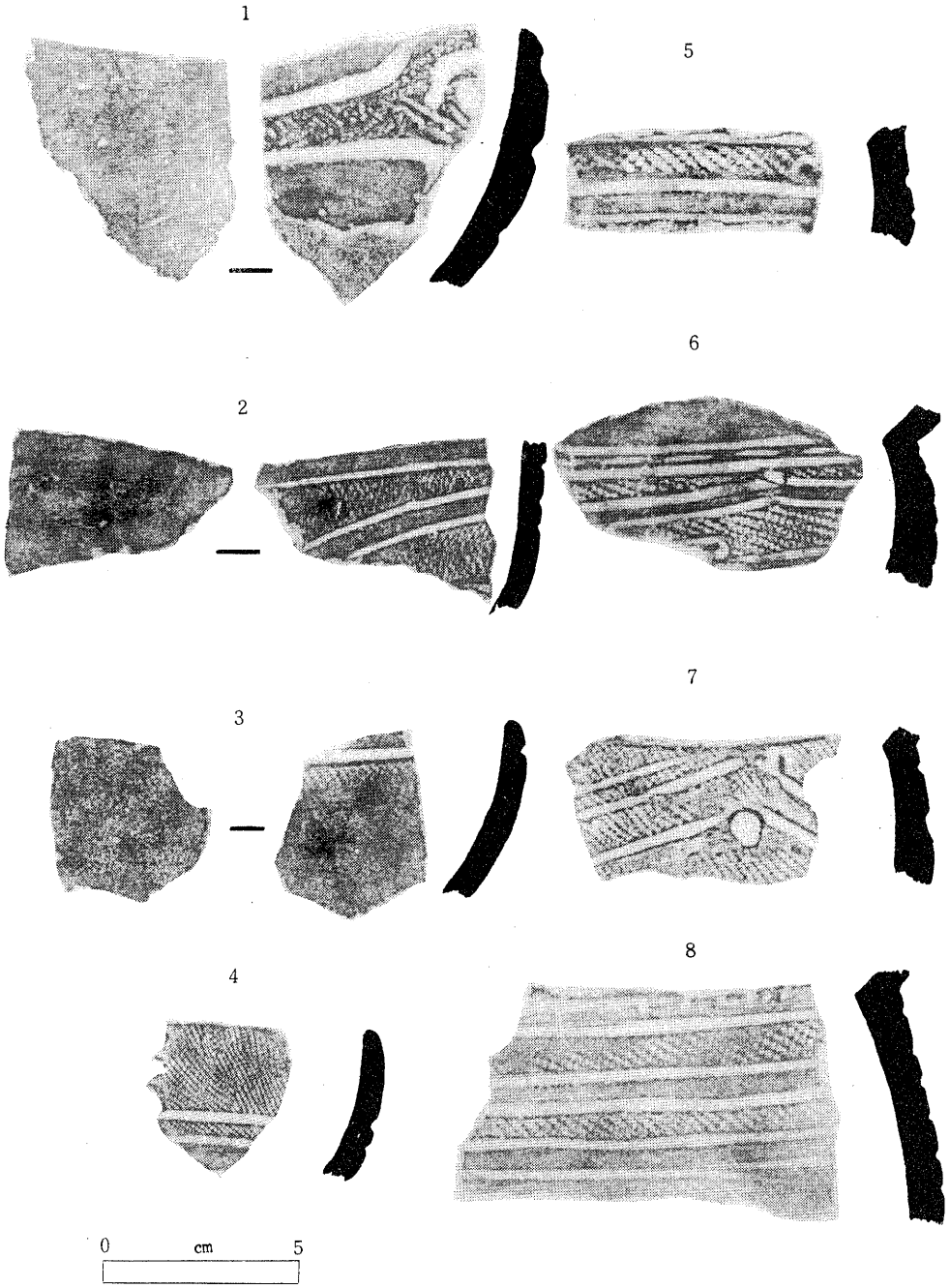
第 8 図　第八類土器，第九類土器



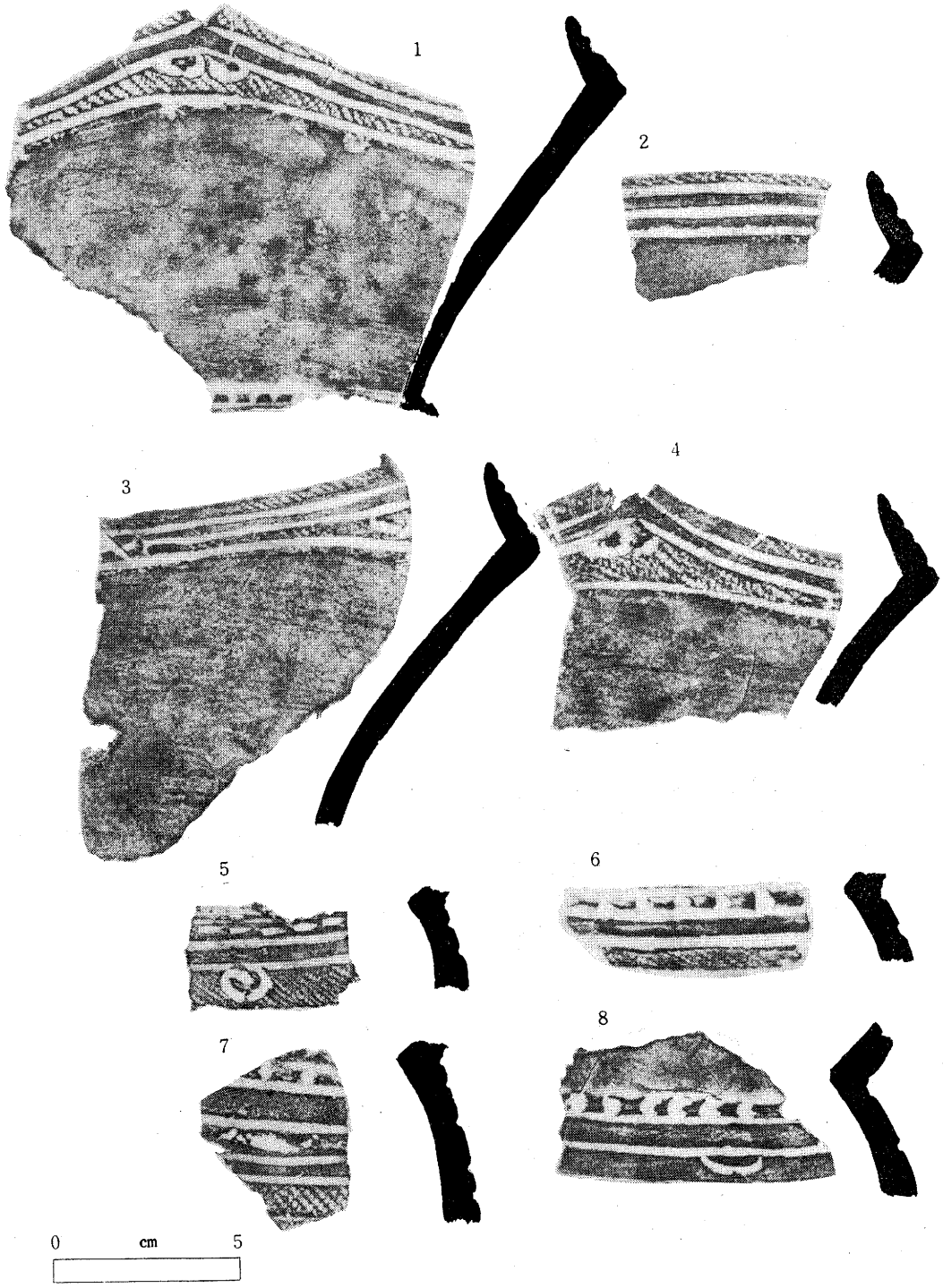
第 9 図　第十類土器



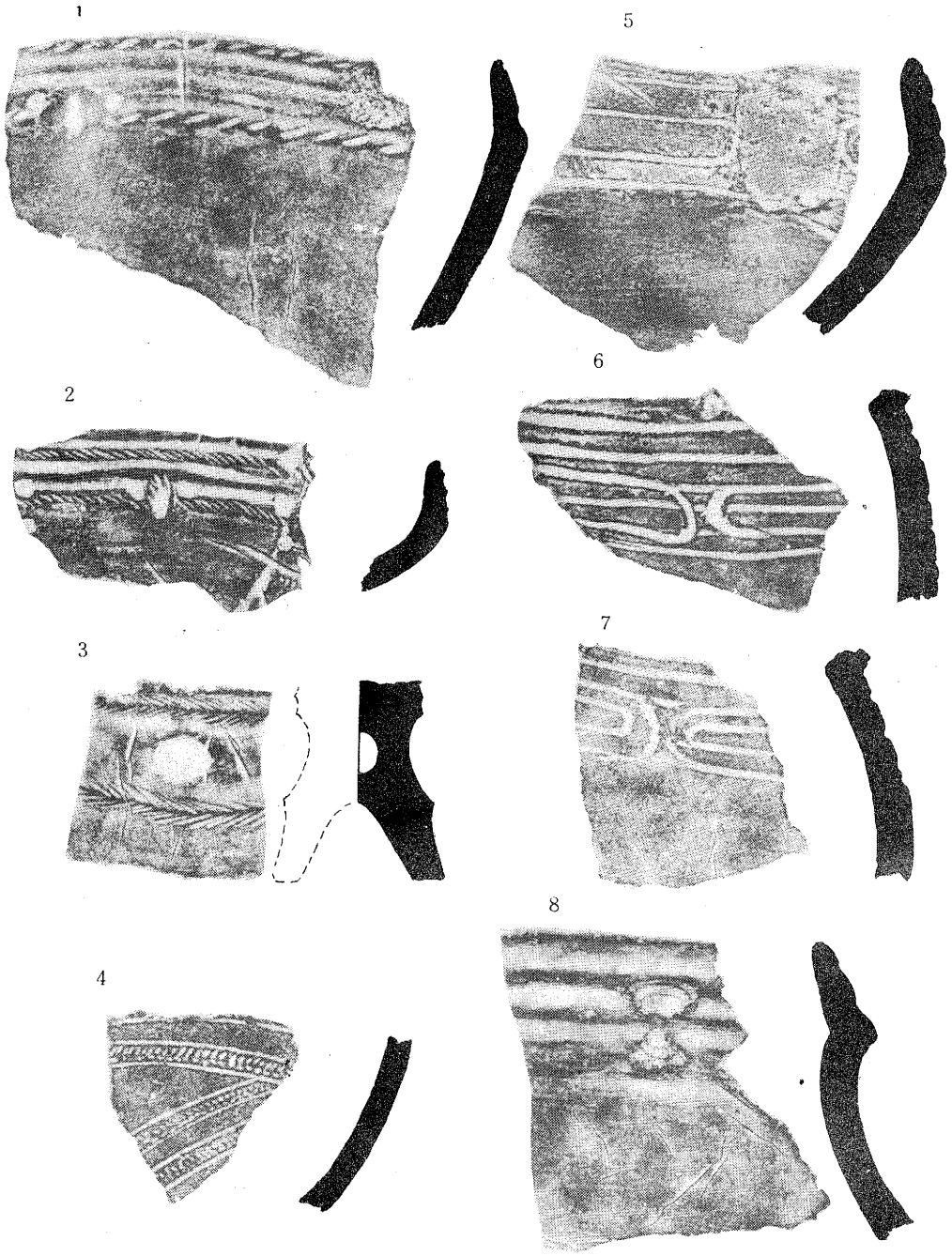
第 10 図　第一類土器・第二類土器



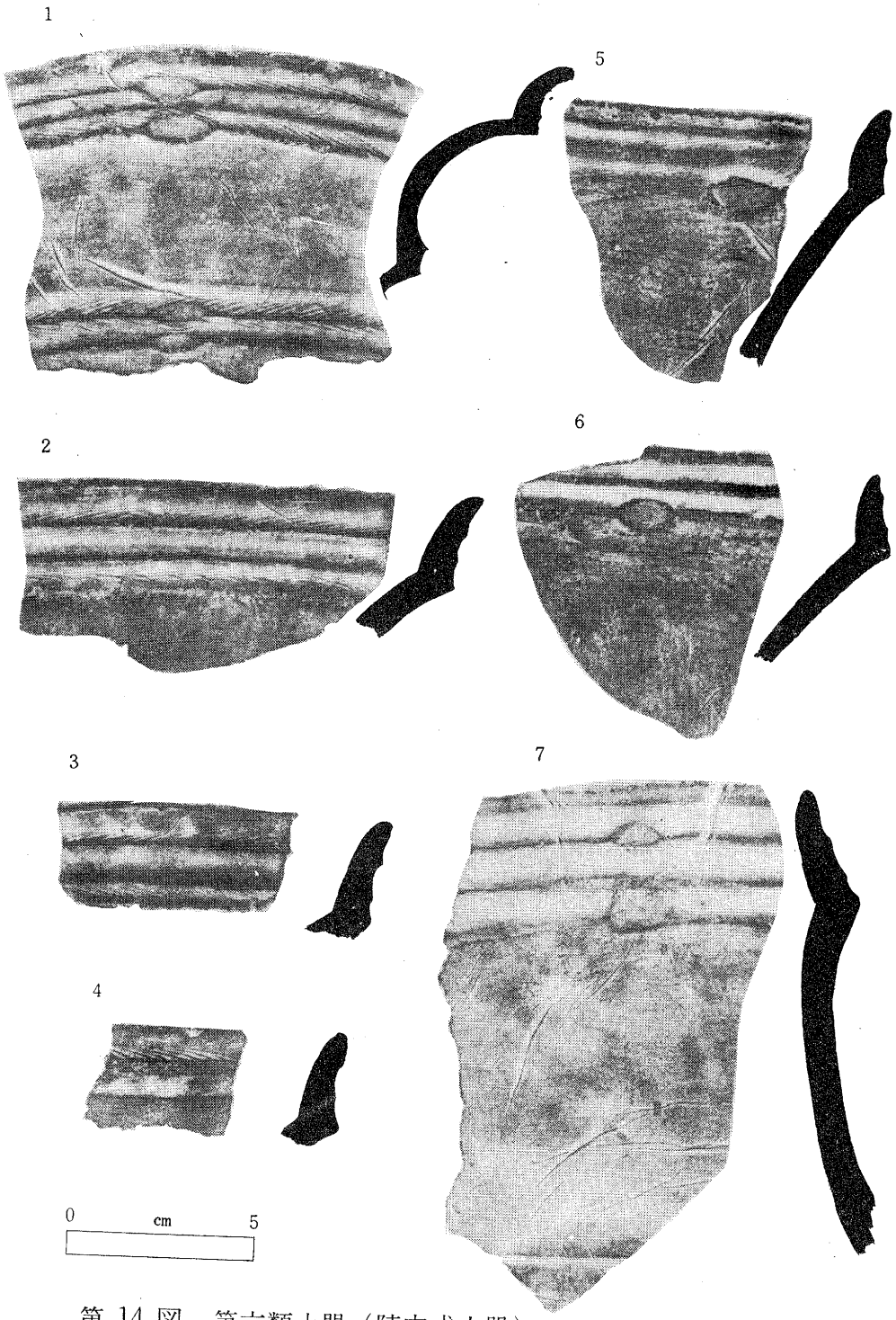
第 11 図　第三類土器・第四類土器



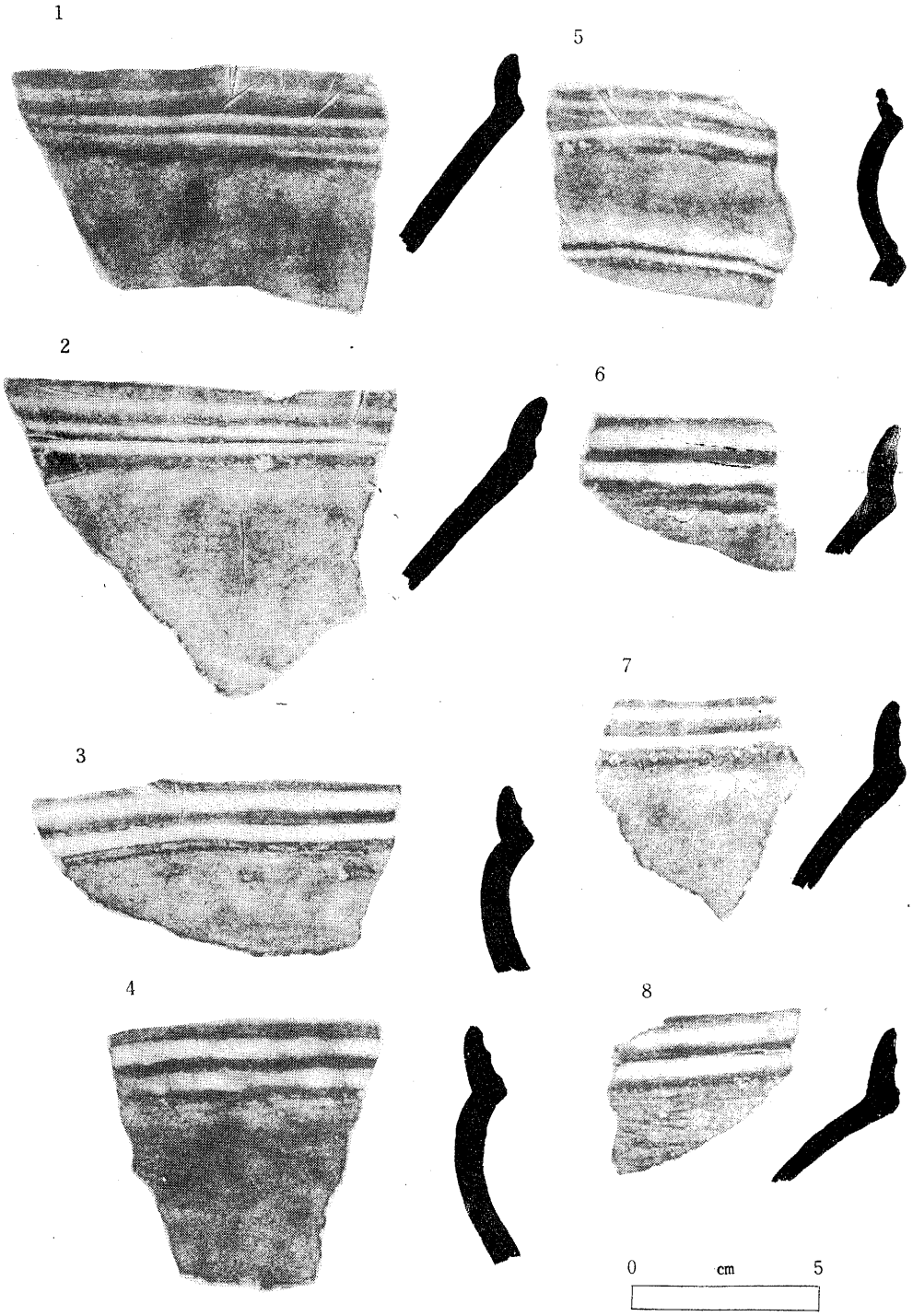
第 12 図　第四類土器



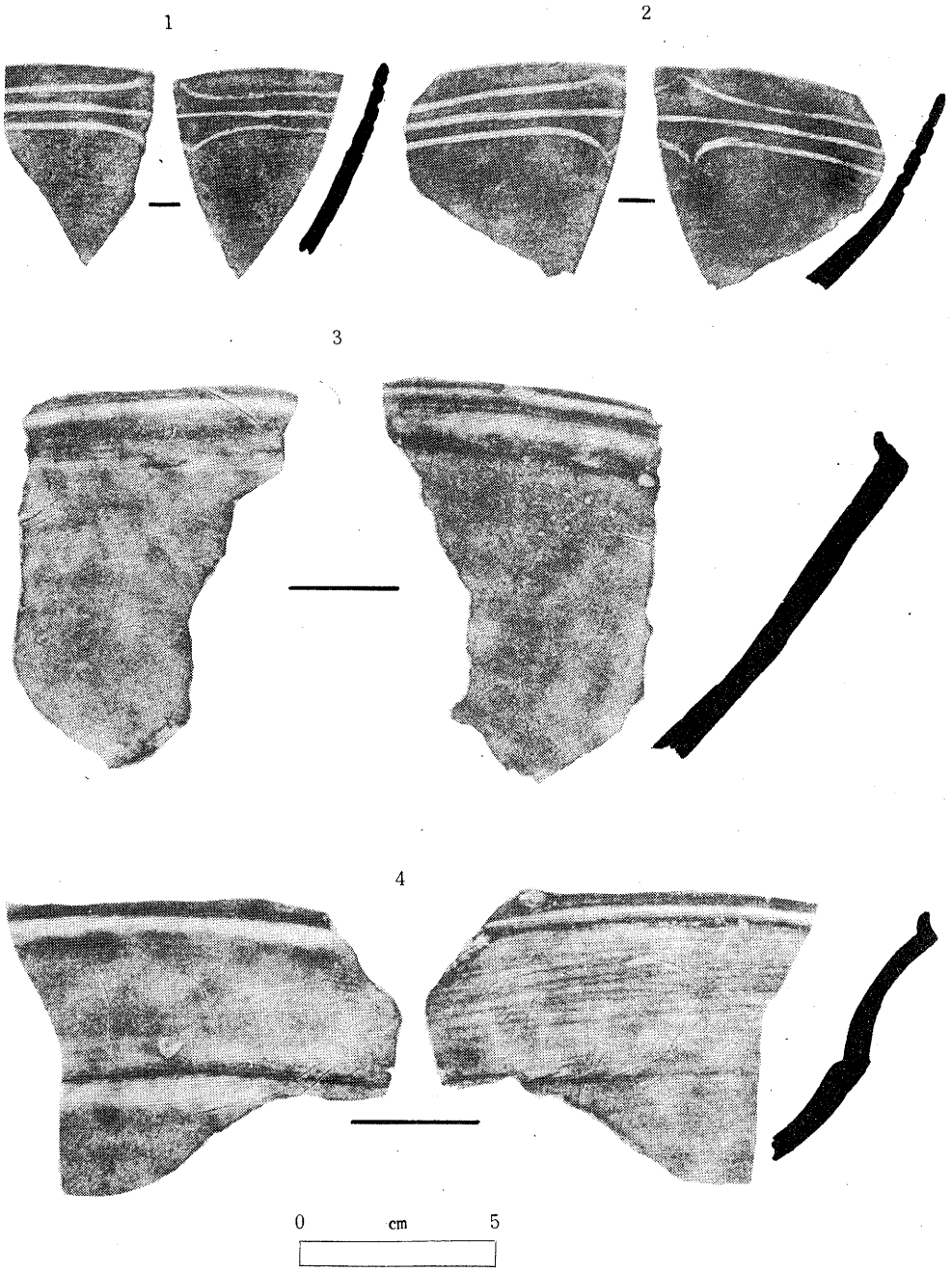
第 13 図　第五類土器



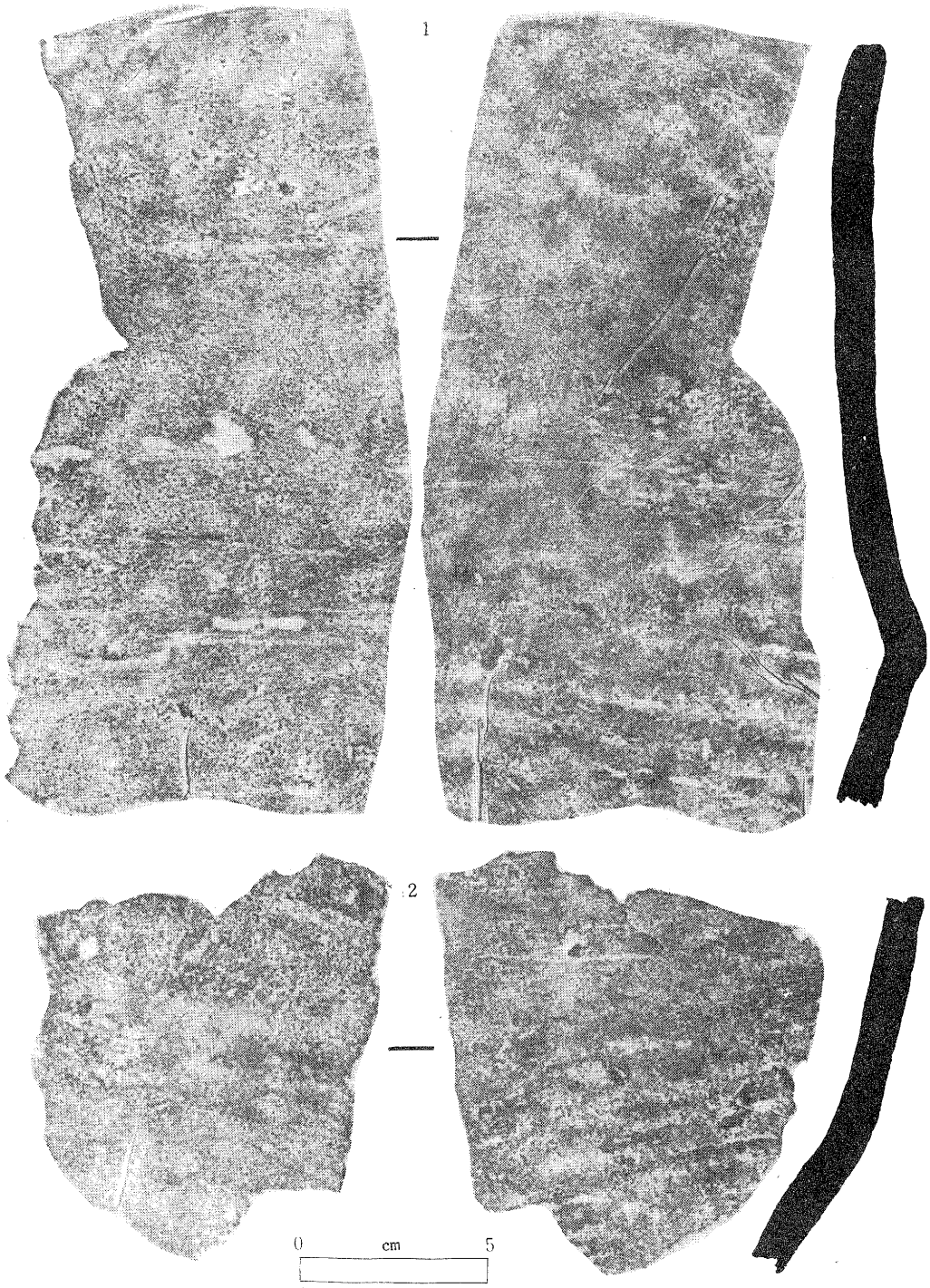
第 14 図　第六類土器（陳内式土器）



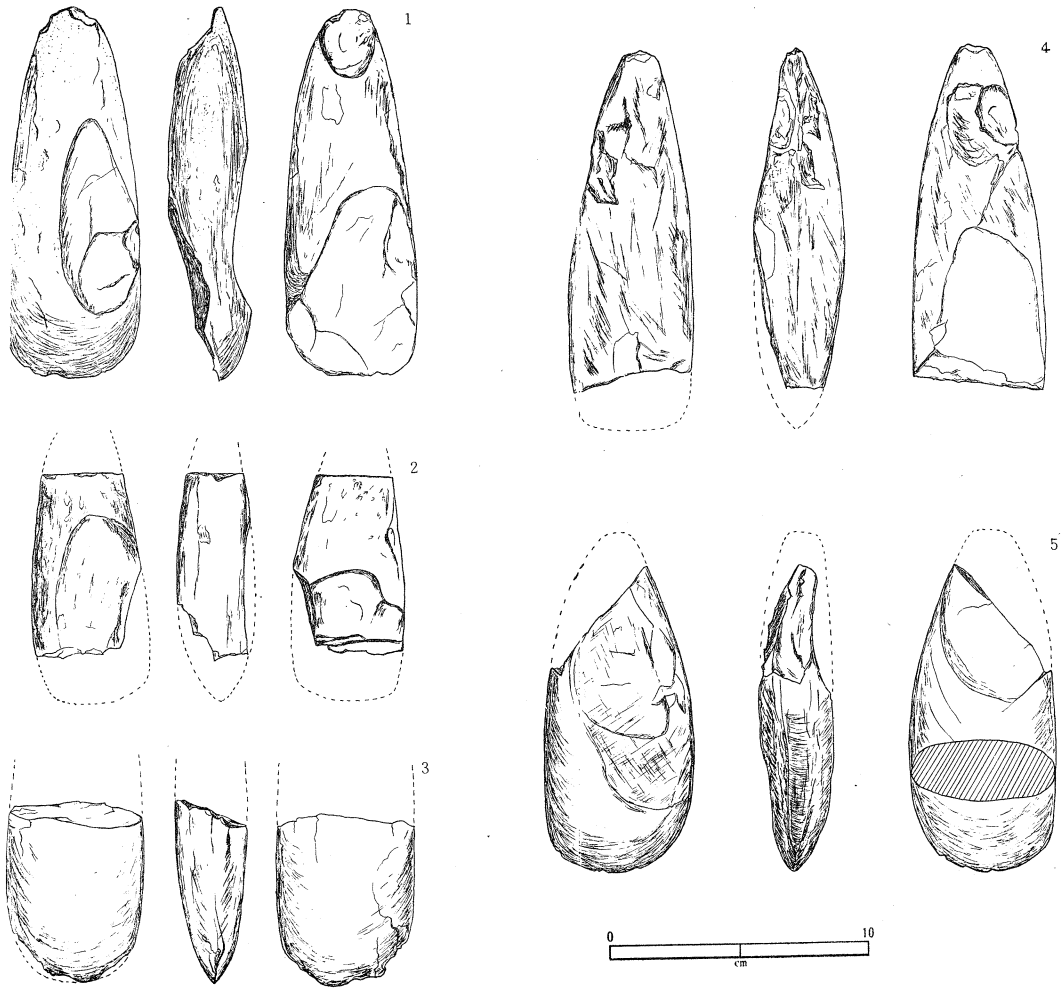
第 15 図　第七類土器



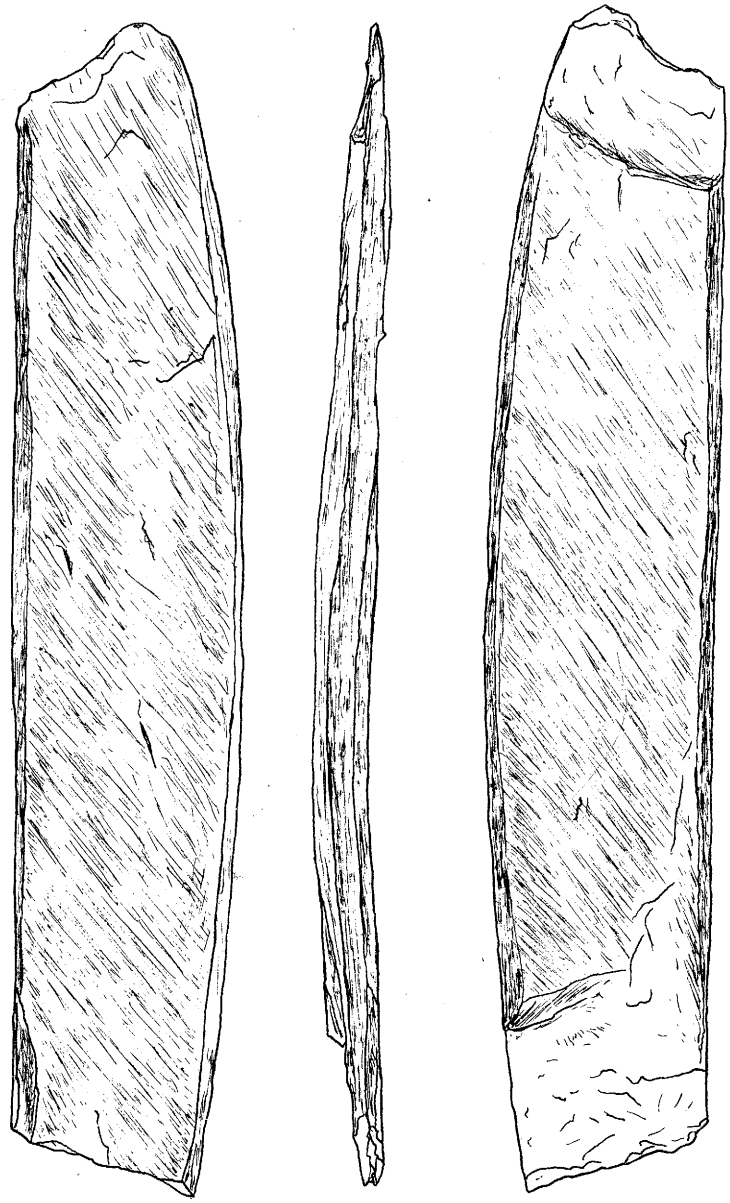
第 16 図　第八類土器・第九類土器

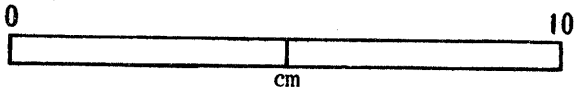


第 17 図　第十類土器

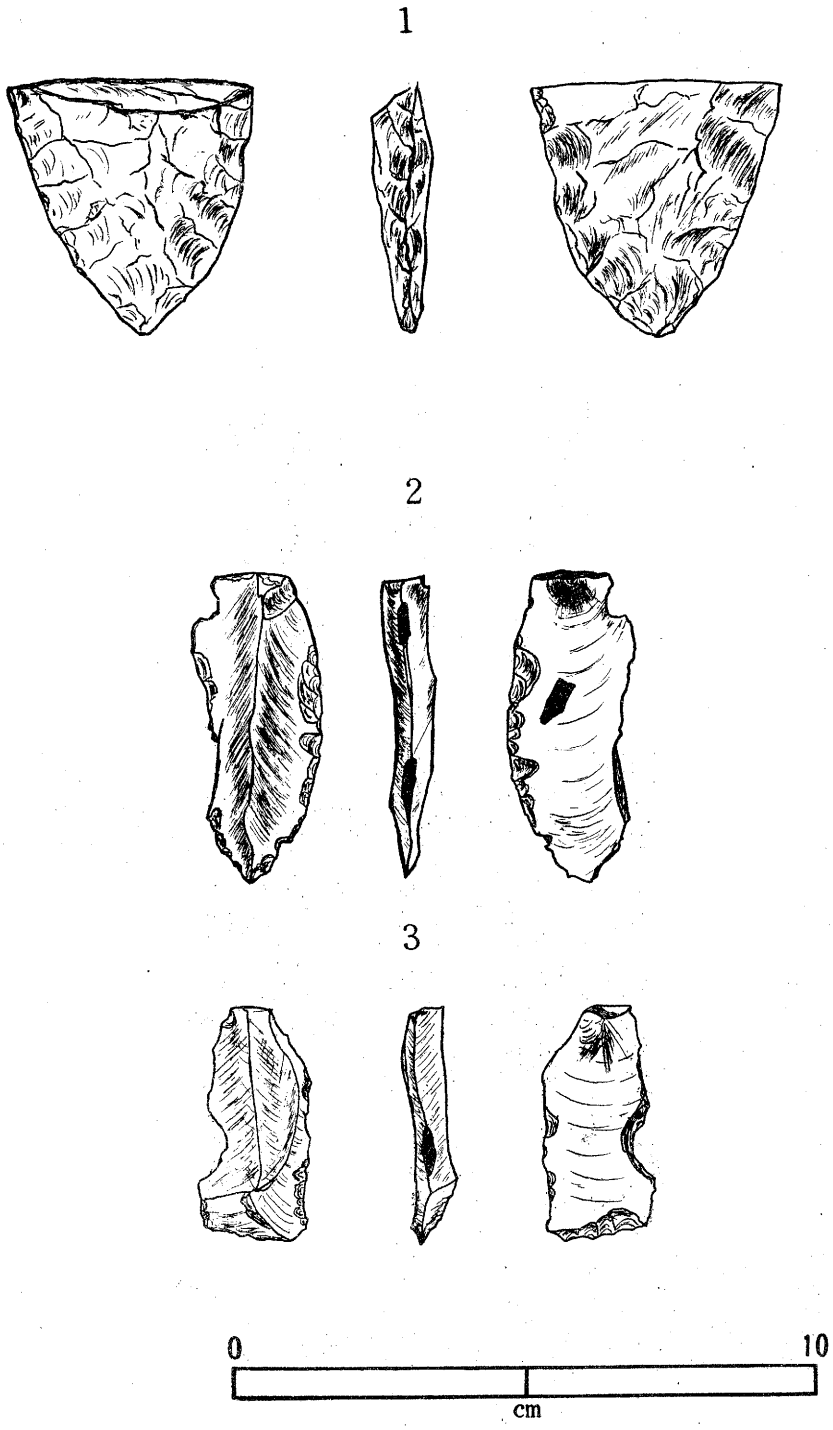


第 18 図　磨製石斧

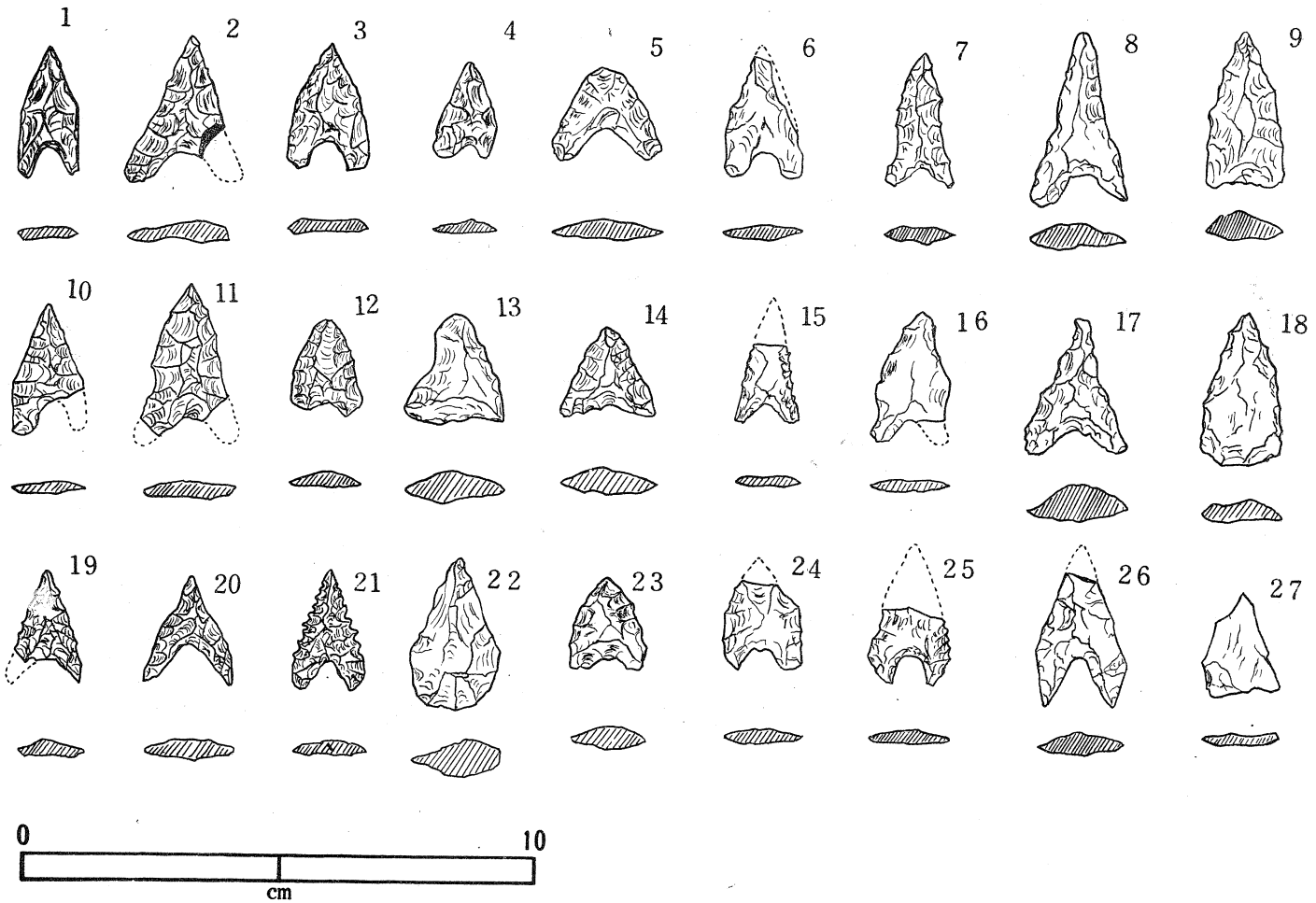




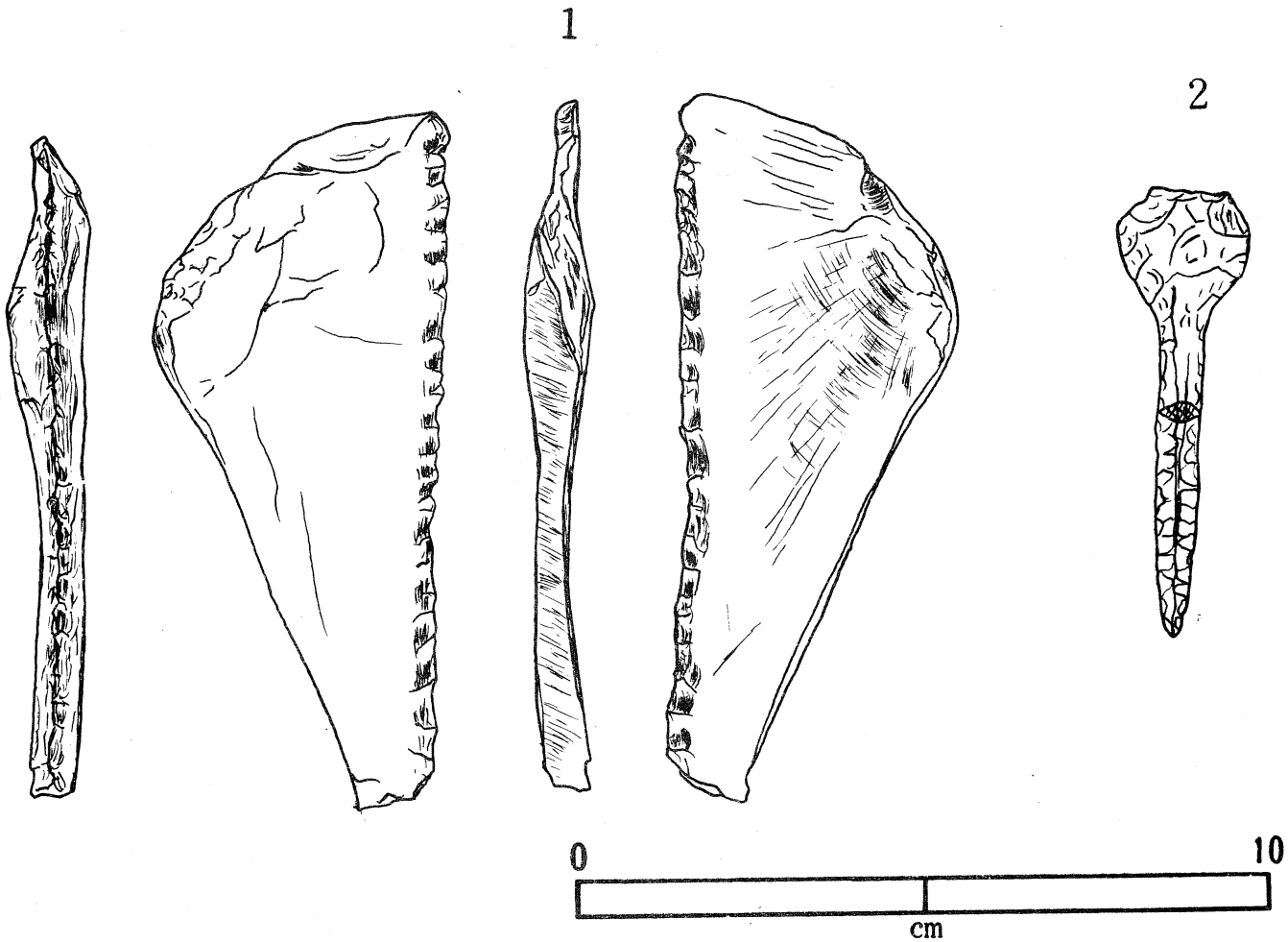
第 19図　石刀



第 20 図　ポイント：ブレイド

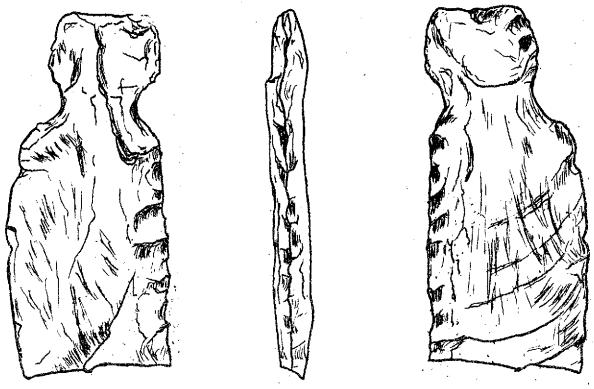

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
10
cm

第 21 図　石　鏃

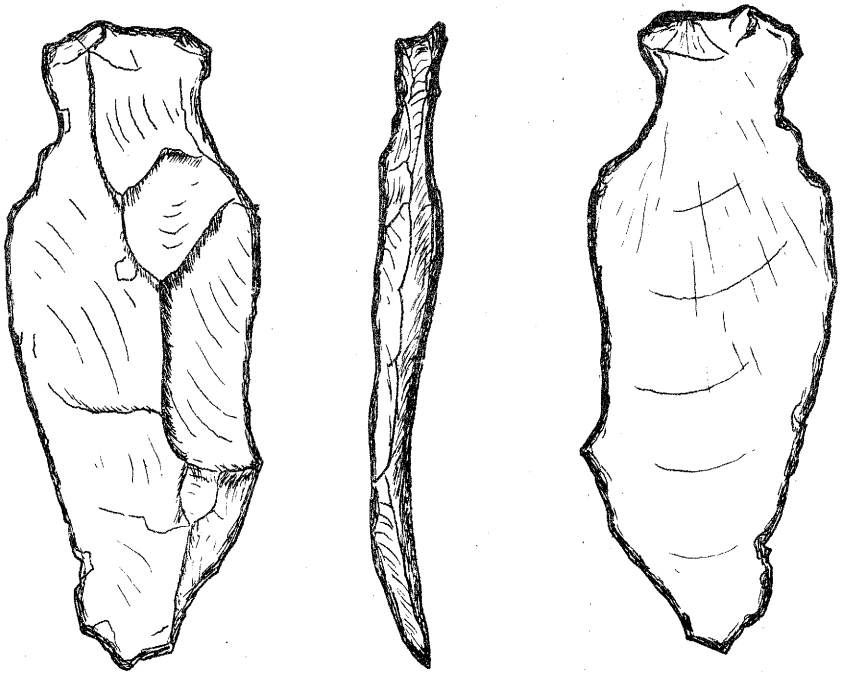


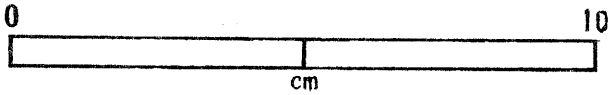
第 22 図　石　錐：石ヒ

1

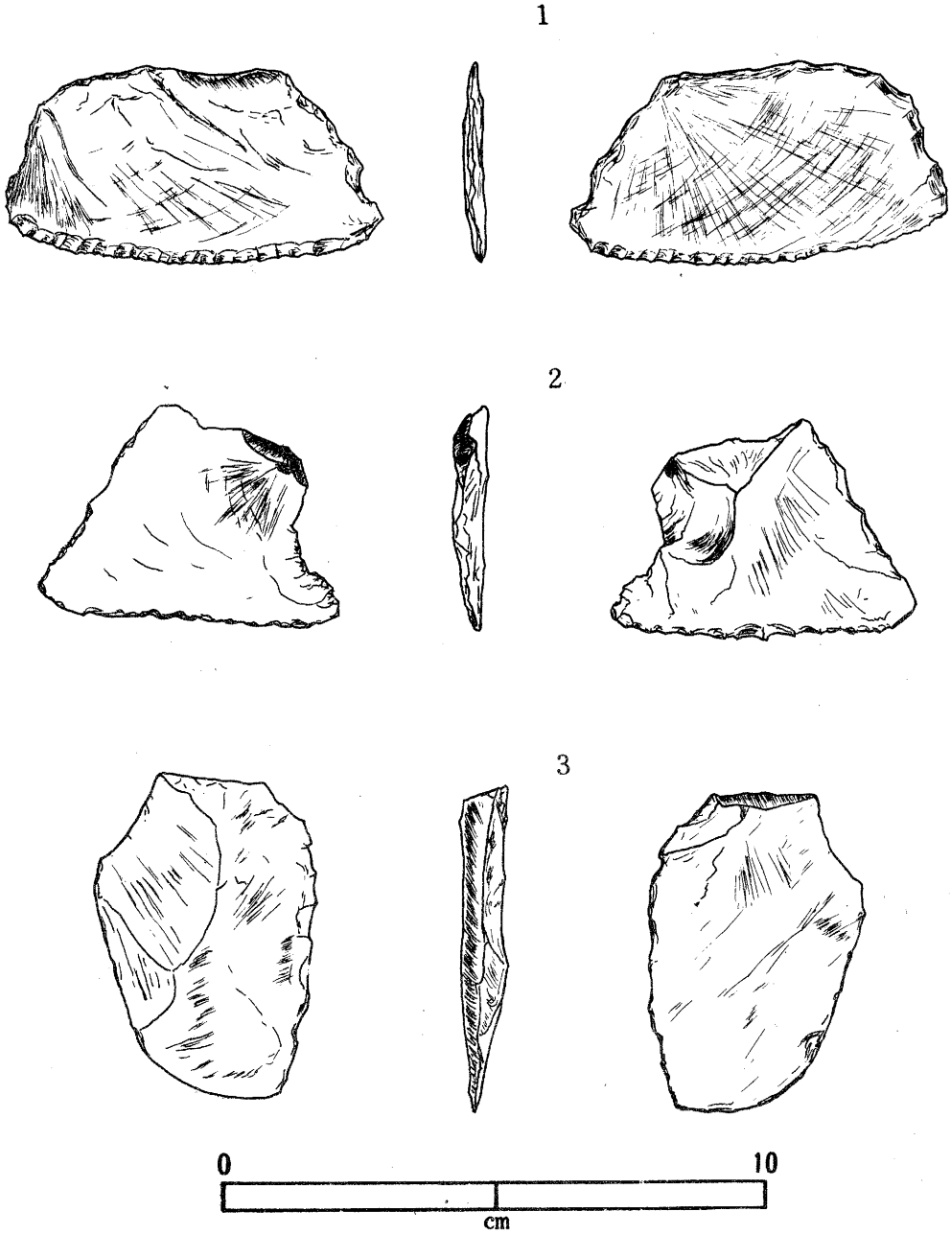


2

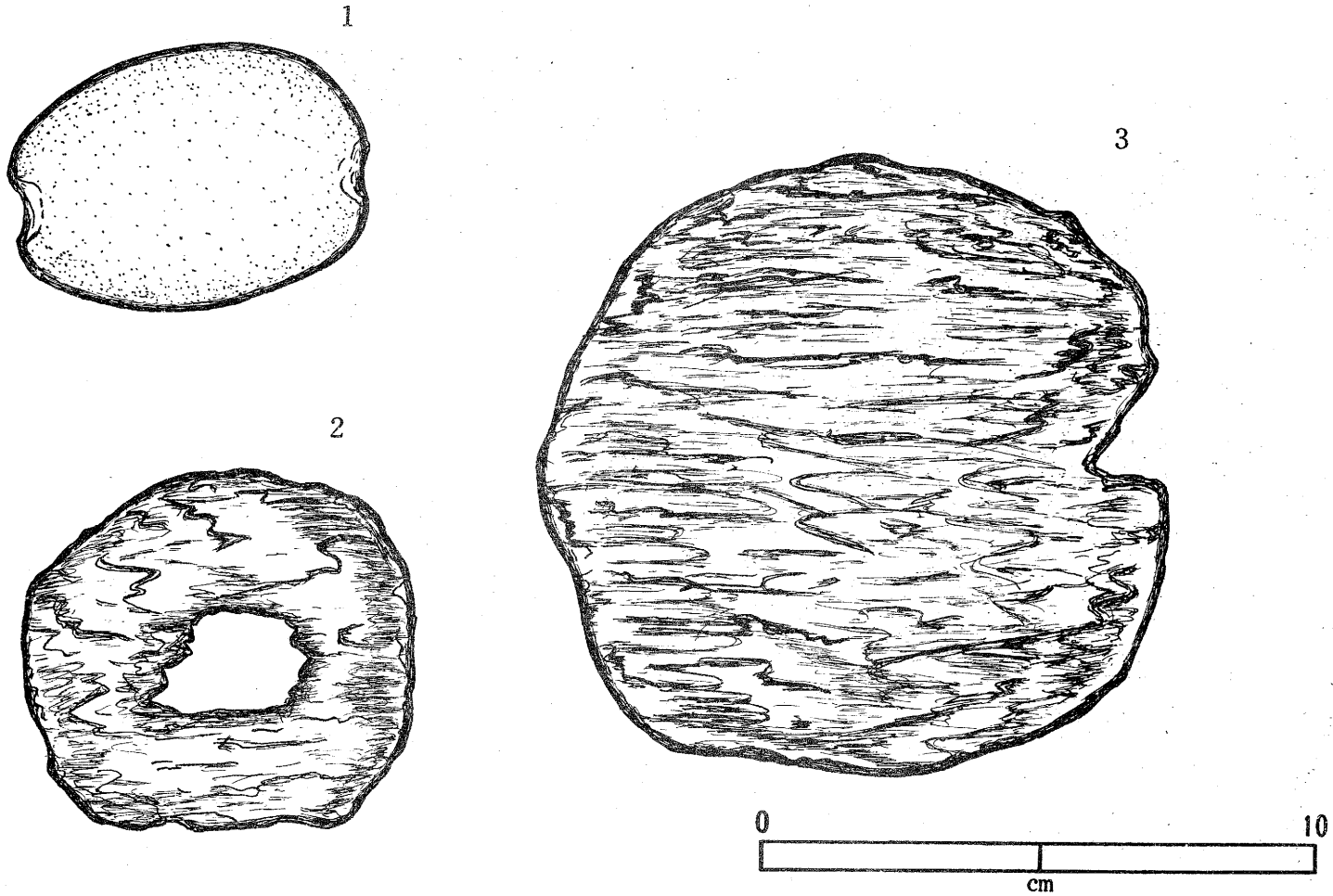




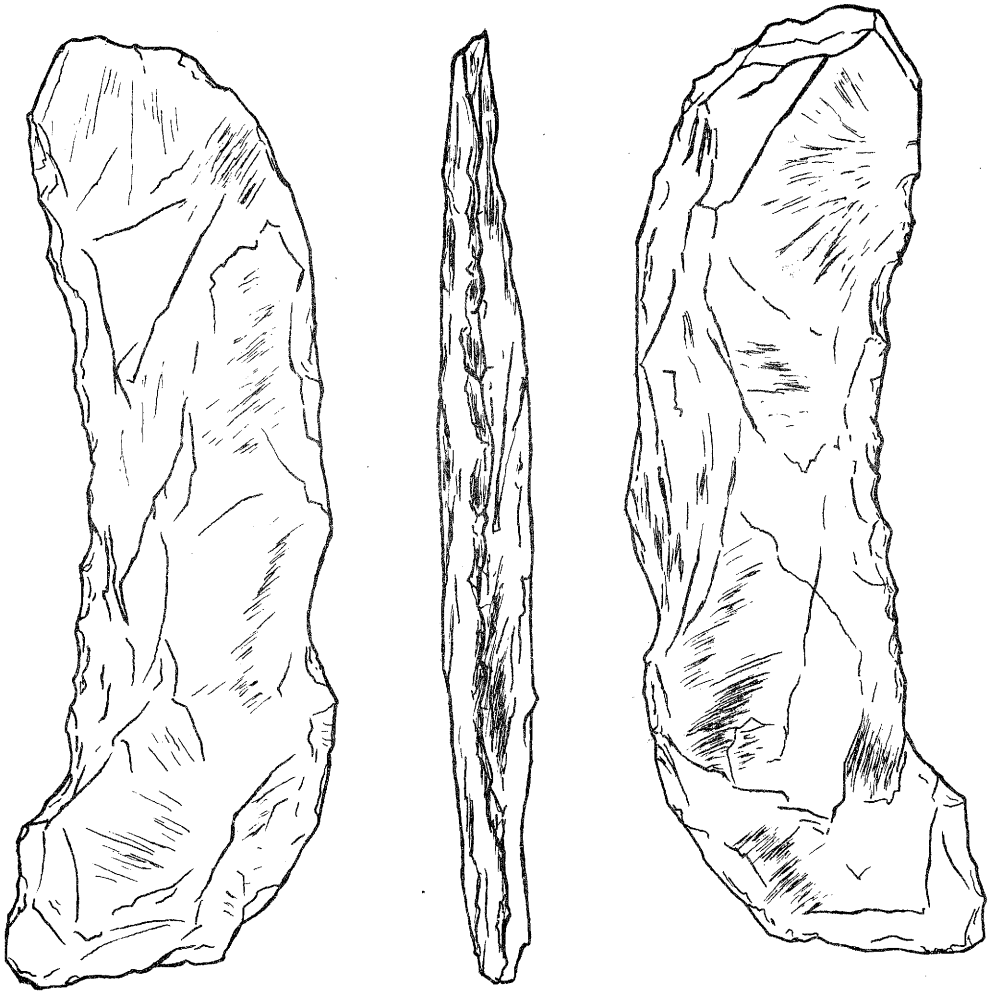
第 23 図　石　　ヒ



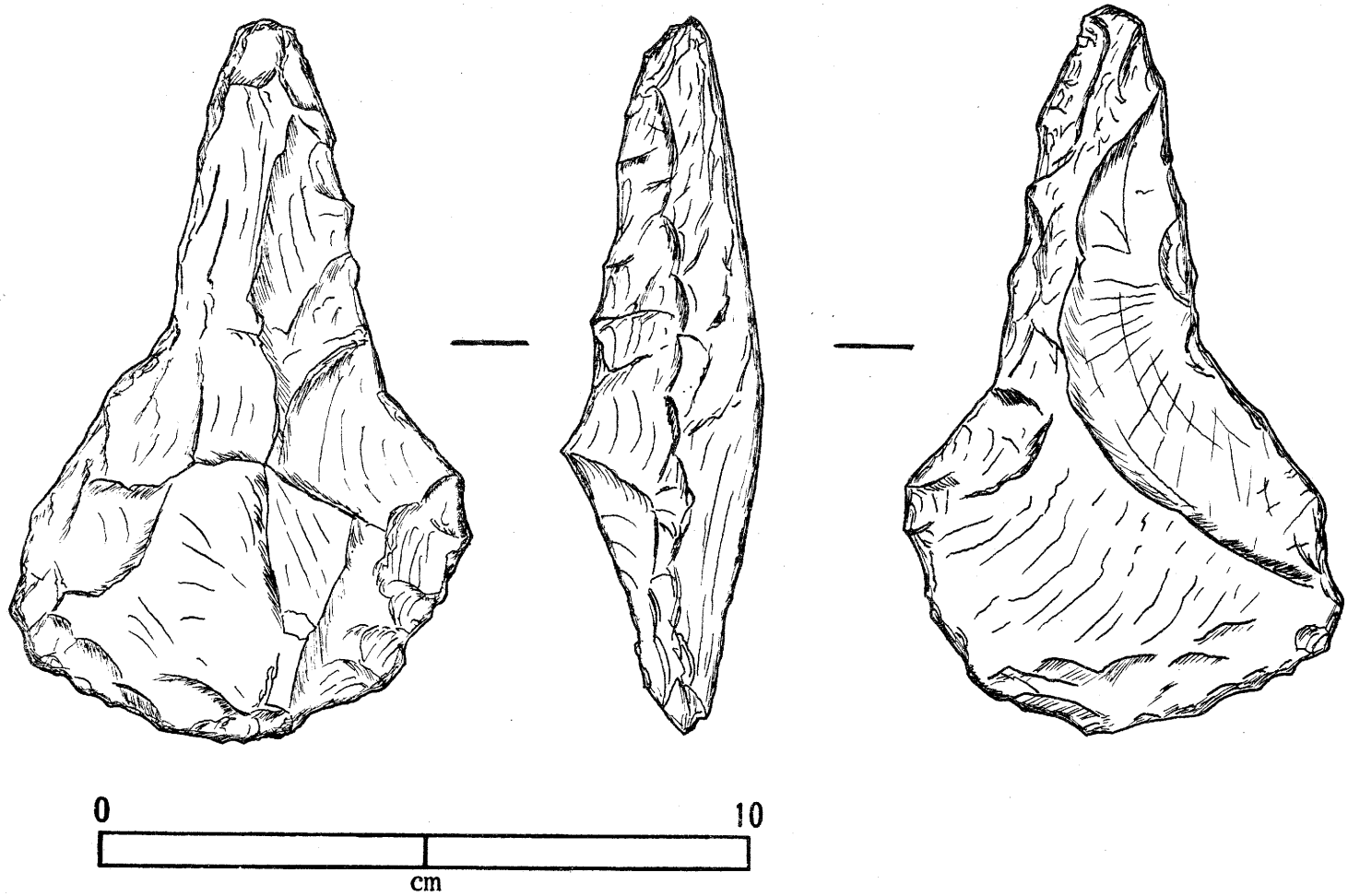
第 24 図　石　　ヒ



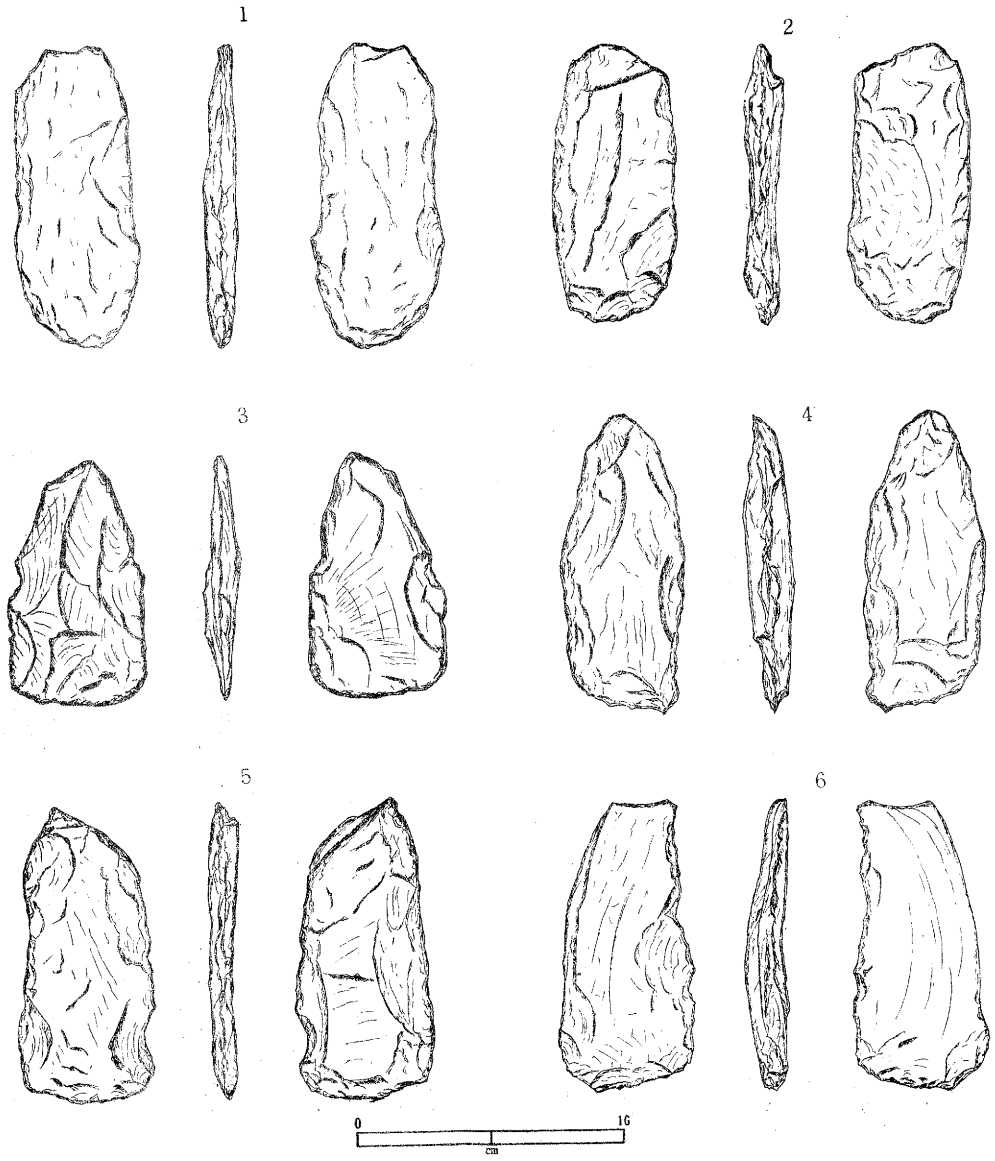
第 25 図　石　錘：浮　子



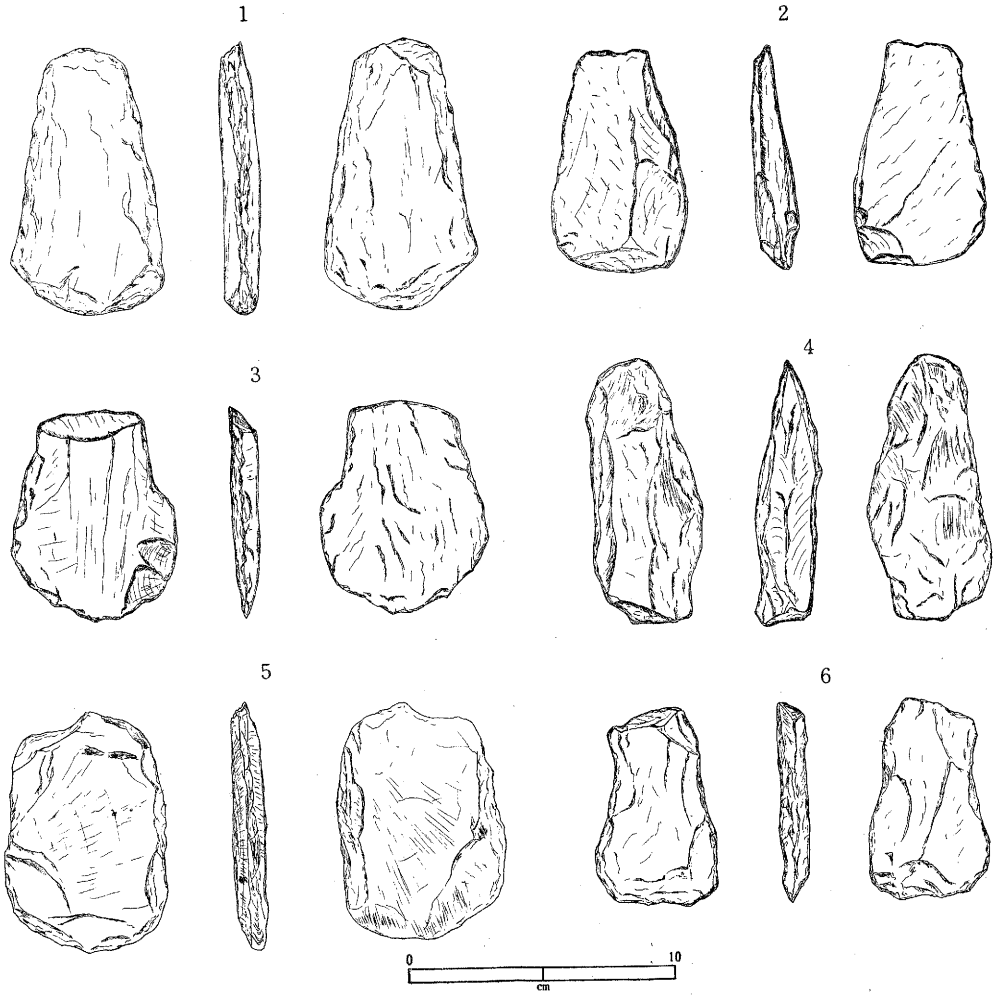
第 26 図　石　　鎌



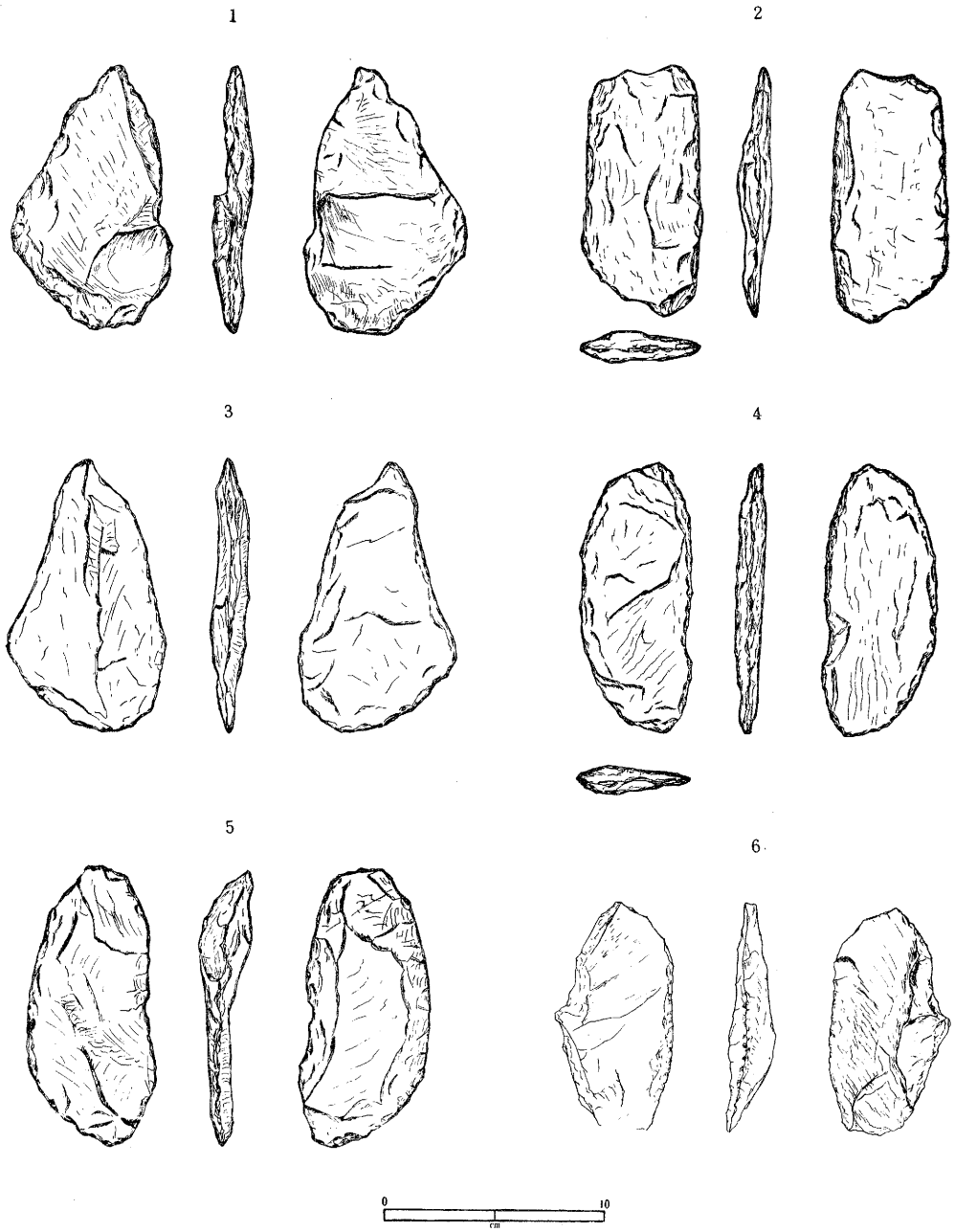
第 27 図　打製石斧



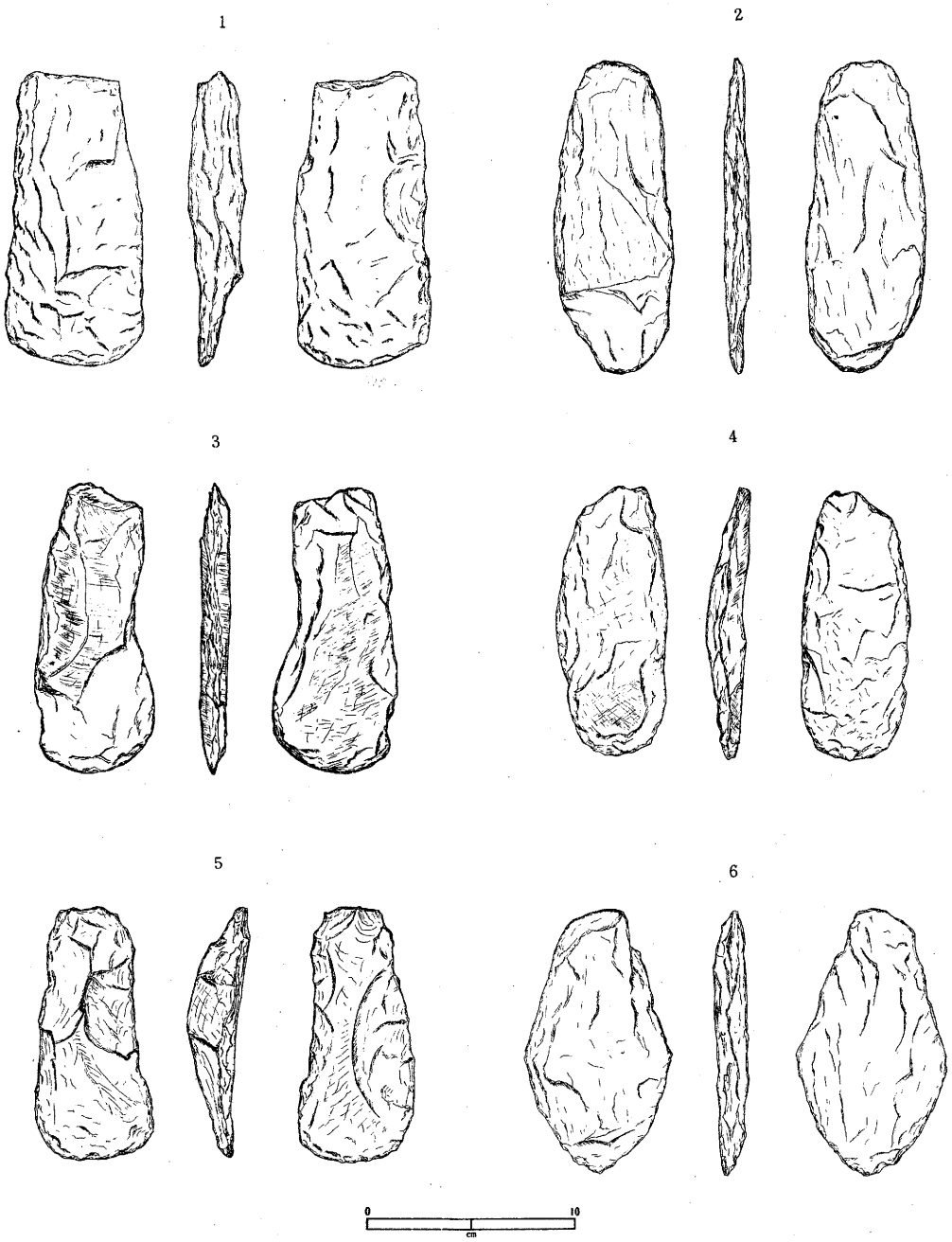
第 28 図　打製石斧



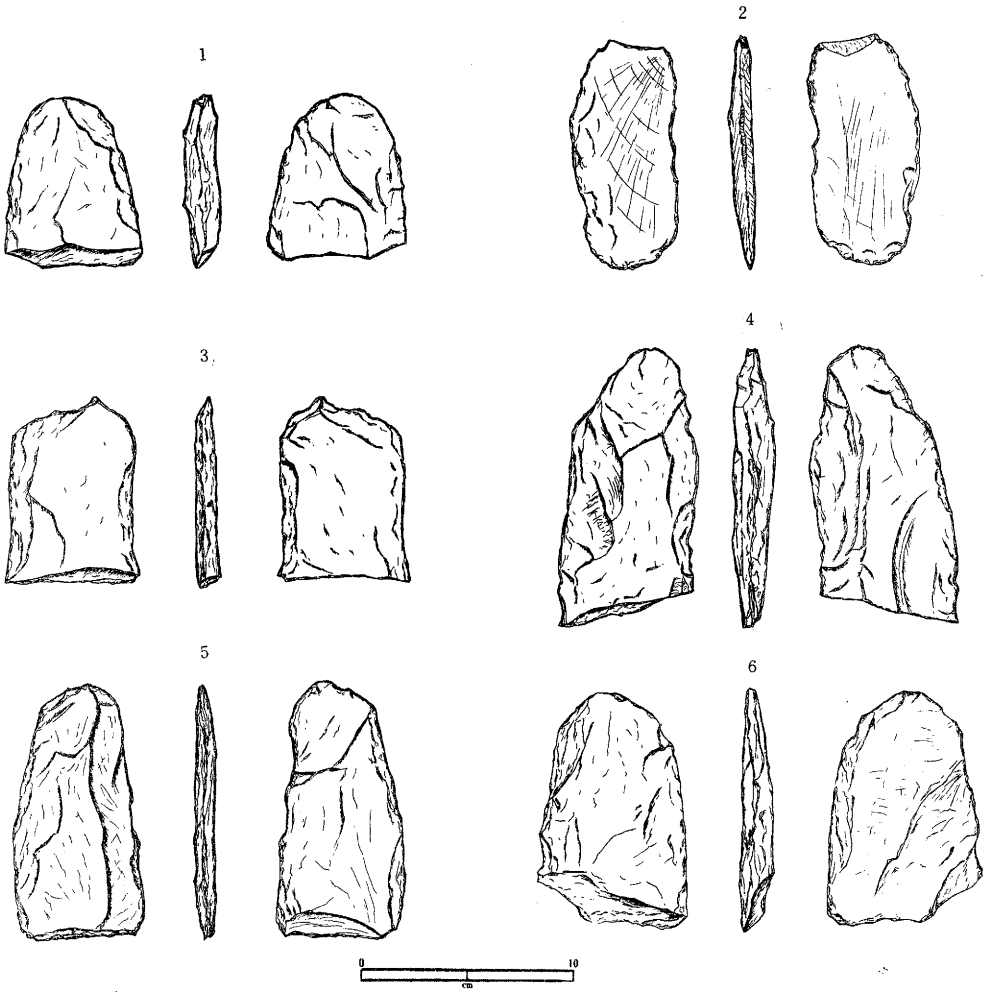
第 29 図　打製石斧



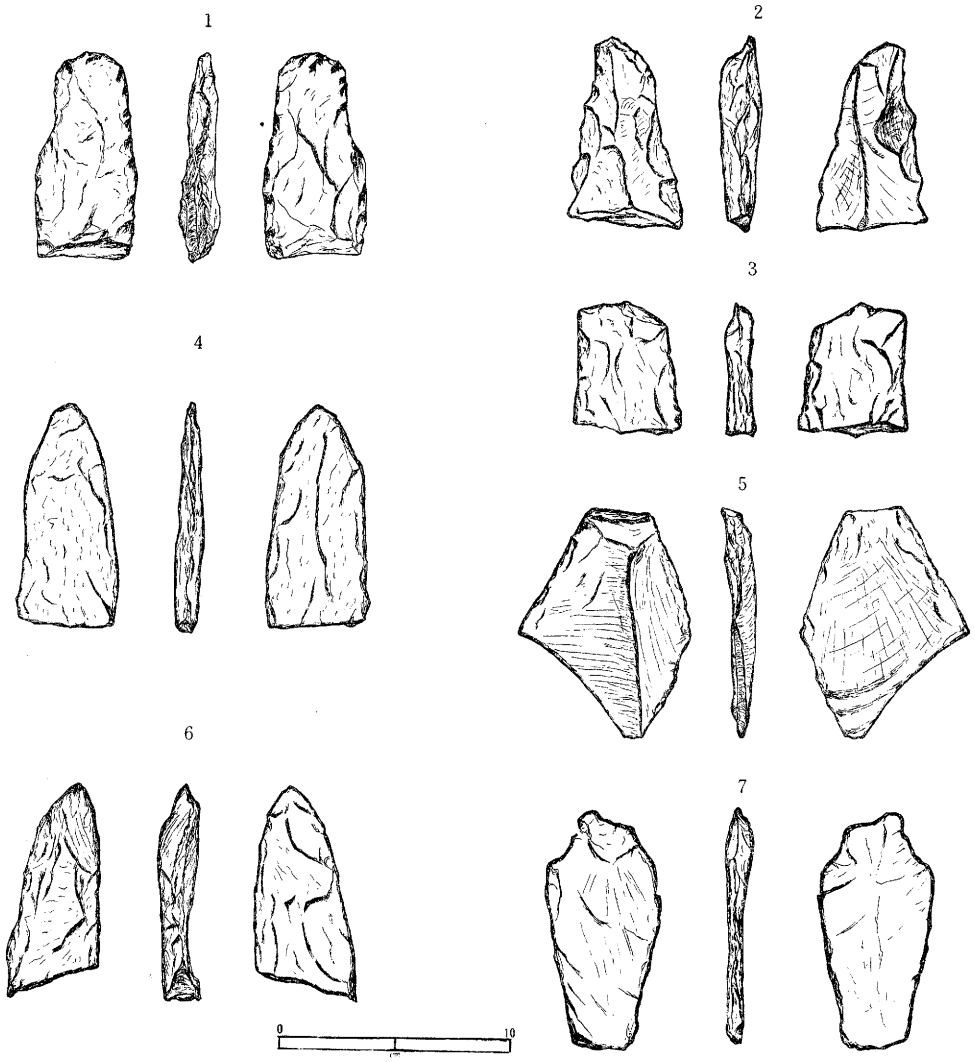
第 30 図　打製石斧，石庖丁様石器



第 31 図　打 製 石 斧



第 32 図　打 製 石 斧



第 33 図　打 製 石 斧

第四章　出土遺物の考察

第一節　陣内式の設定をめぐつて

九州に於ける縄文式土器の研究は、研究史的には肥後の縄文式土器の研究がその主流をなし、先駆をなしたがその後南九州から東九州にかけて多くの遺跡が調査され、最近北九州に於いても弥生式期への推移を中心として縄文式晩期の遺跡が教多く調査された。その間にあって土器の編年に関する研究は、三森定男氏①、小林久雄氏②らによって基礎的な作業がおこなわれ、戦後は、賀川光夫氏③、芹沢長介氏④江坂輝弥氏⑤、渡辺正気氏⑥らによってかずかずの発表がおこなわれて来た。これらのうち当遺跡の主体をなす後晩期土器に関する編年として共通して扱われたのは鐘ケ崎式、西平式、御領式などであり、二、三の研究では南九州と北九州とを区分して、南九州の後期に岩崎上層式、指宿式、市来式、草野式を、晩期に黒川式を認め、北九州に鐘ケ崎式、西平式、三万田式、御領式、夜臼式を設定している。このうち南九州の市来式については、その細分によって草野式を後行するものとして分離し⑦更に先行するものとして下弓田式とが分離された⑧。このようにして下弓田式↓市来式↓草野式の序列を認めることとなった。北九州では、鐘ケ崎式、西平式はともかく、三万田式については標式となる遺跡の内容が公表されないままに使用されているばかりか、型式としてはかなり不安定である。さきに土器の項で第五類土器（陣内一式）、第九類土器（陣内五式）として扱った一群が略三万田式に該当するもののようであり、三万田東原遺跡出土資料の公表が関係者によってなされるのがまたれる。又御領式は古くから使用されて来た型式であるが、その細分が可能であって、さきに示した後期の一群と、晩期の一群とに区分し得る。第七類土器（陣内三式）、第八類土器（陣内四式）がそれにあたる。長崎県の中田遺跡などは前者を主体とするものであり、熊本県のワクド石遺跡は後者を主体とするものである。なおこれらに後行する晩期の資料として、古式弥生式土器の追求のなかで確認された夜臼式や、最近調査された山ノ寺、原山、女山、礫石原、百花台などの各遺跡⑨からは粗製土器を主体とした晩期の土器が出土しているが、それらにのいてはまだ公表されていないからここでは触れないことにする。

さて、以上みて来た九州に於ける後晩期土器の編年は、最近になってようやく細分化がおこなわれ、発表されたものとしては、まず鐘ケ

崎式についておこなわれたものがまず指摘される。これは磨消縄文系土器の細分として捉えられ、平城式の検討から進展し⑩、ワラミノ遺跡出土の土器によって更にその展開をみた⑪。それらの土器は本遺跡に於いてはごくわずか出土しただけであり、主体をなす土器群の分類には直接には関係ない。してみると類例を他に求めて独自の分類が試みることが要請される。本遺跡に関連ある遺跡としては、熊本県の御領遺跡⑫、三万田遺跡⑬、大野貝塚⑭、千原台遺跡⑮、境崎貝塚⑯、鹿児島県の黒川洞窟⑰、宮崎県下の尾平野洞窟⑱、松添貝塚⑲、鳥帽子野遺跡⑳、大分県の田村遺跡㉑、長崎県の礫石原遺跡㉒、山ノ寺遺跡㉓、原山遺跡㉔などを挙げることができ、更に、九州外では、山口県の岩田遺跡㉕、兵庫県の元住吉山遺跡㉖、奈良県の橿原遺跡㉗、宮滝遺跡㉘、滋賀県の滋賀里遺跡㉙、岩手県の大洞貝塚㉚、などが考察の対象となる。これらのうちには後期の単純遺跡ばかりでなく、後期から晩期にわたるもの、また晩期のみの資料を出すものがあり、複合の遺跡でも、層位的に把握されているものと、そうでないものとがある。そこでまず九州内に於ける主要な関連遺跡間の組み合わせが検討されねばならない。晩期のものから検討すると、黒川洞窟、礫石原遺跡、尾平野洞窟、松添貝塚などの遺跡からは、黒色精製土器と、研磨されない深鉢、ないしは甕型の粗製土器とが出るが、それぞれの間にあっては組み合せ上に多少の変化がみられても、その様相が、同一視し得るので、黒川洞窟を標式として黒川式と、ここに一つの時期を設定し得る。また田村遺跡、千原台遺跡、山ノ寺遺跡、原山遺跡にあっては、前二遺跡が御領遺跡出土の資料との関連の上で、精製度の退化、施文上での形式化、さらに浅鉢にみられるその多様性から、これまで御領式として扱われて来たものを大きく二分することの妥当性を示し、これら二者によって代表される一群の土器は晩期の黒川式に先行する一時期に比定し得るものである。一方後二遺跡については、粗製化の展開と、口唇部にみられる刻み目や晩期末葉の夜臼式との組合せ関係などから、別に一時期を設定し得るものであり、更にそれぞれを細分することも可能である。九州以外の地域に於ける晩期の関連資料は、東北地方にその盛行をみた雲形文、入組文の展開から、大洞A'式として標示される工字状文を主文様とする一群であり、これが西漸して、関西の滋賀里遺跡、橿原遺跡などに含まれることは、古くから知られている。このようにみてくると、本遺跡出土の晩期の土器は、これまで一般に御領式として扱われたもののうちの一部分である。黒川洞窟、千原台遺跡、礫石原遺跡、松添貝塚などの資料と関連する第八類土器（陣内四式）及び精製研磨された工字状文によって特徴ずけられる三万田遺跡出土の晩期大洞A'式系の一群の資料と関連ある第九類土器（陣内五式）、更に山ノ寺遺跡や岩田遺跡の粗製土器や、凸帯文土器と関連する第十類土器の三種に大別することが出来る。これらはさきにも触れた通り、その順序の先後関係が指摘されるのである。

後期については鐘ケ崎式、西平式として扱い得るものはその編年上の位置が確認できるから除外し、それらに後行するものを問題としよう。それは本遺跡出土の土器にあって、量質ともに主体をなす後期末葉の時期の土器があたるのである。さてその関連遺跡としては九州内に於いては御領貝塚、三万田東原遺跡、大野貝塚、境崎貝塚など熊本

県下に主要なものがあり、九州外にあっては岩田遺跡、元住吉山遺跡などがあげられる。御領貝塚のそれは、御領式土器として標式され、九州一円、さらに中国地方の一部にも分布しているものであり、さきにも示した通りその一部には晩期に編年される一群のものが含まれる。また三万田東原遺跡出土の資料にも大洞A'式系の晩期の一群があって、かなずしも一括して扱うことができず、これまでの標式には検討の余地が生じてくる。そのために後期の一群の資料として単純に把握される類例を他に求めると、前者にあっては長崎県の中田遺跡、後者にあっては熊本県の境崎貝塚の資料がうかびあがる。一方これら二者の先後関係については、熊本県の大野貝塚に於いて層位的に捉えられたように、三万田式として扱われたものが下層に、御領式とみられたものが上層に発見されたので、三万田式の一群が先行することは確かになった。本遺跡出土の資料のうち境崎貝塚、三万田遺跡などに類例が求められる後期の一群と、中田遺跡、御領貝塚などに類例を求められた一群とを、それぞれ陣内一式、陣内三式として分類し、その先後関係は大野貝塚で知られた通り、扇状貝圧文や、細線羽状文に施文上の特徴のある一群を陣内一式として扱い、先行するものとみたわけである。

かくて本遺跡出土の後晩期の土器を、これまでに報告されている諸遺跡を参考しつつ、第五類、第七類、第八類、第九類、第十類と分類し得たのであり、その順に於いて先後関係を認めたのであった。ただ出土の土器のうち主要なものの一つである第六類土器は、類例を他に求めることができず、あらためて検討する必要を生じたのである。これら一群の土器は器形に於いては第七類土器（陣内三式）に通じ、施文手法に於いては扇状見圧文、細線羽状文、工字状文など第五類土器（陣内一式）に共通するところが多い。したがって形態、施文上の特徴などから第五類土器（陣内一式）と第七類土器（陣内三式）の中間的な性質をもち、編年上の位置もおのずから限定されてくるのである。ここに於いて第五類土器と第七類土器との間に第六類土器として分類したものであり、他に類例が報告されていないので特に陣内式と呼び今後の編年上の基準としたわけである。この型式は地理的には九州のほぼ中央部に位置する本遺跡の資料を標準としたとしても、肥後を中心とする三万田式や、御領式などとの関連から、北九州的な性格をもつものと判断されるのである。このことはまた本遺跡で出土した土器のうち、全九州にひろく分布する晩期の一群の土器を除いて、第三類、第四類、第五類、第七類などの土器が主要な分布圏を北九州にもつこと、更に南九州にひろくみられる後期の指宿式、市来式などが本遺跡に於いて出土していないことにもうかがえる。したがって陣内式は、北九州的な性格を持つものと推定されるのである。宮崎県下に於いては指宿式、市来式が大淀川流域の南部に主要な分布圏をもつもののようであるから、この線こそ北九州的な陣内式文化圏と、南九州的な文化圏の境界をなすものかと云え、見通しが立ったのである。

なお本遺跡出土の後晩期の資料を中心とする編年表を示せば次表の通りである。

時期＼地域	北九州	西九州	東九州(1)	東九州(2)	南九州	瀬戸内	関西
後期		出水	小池原1		岩崎上		
		南福寺	小池原2	綾A・B	指宿	福田KⅡ	天理
	●鐘ケ崎	北久根	●〃3 ●〃4	下弓田			北白川上層
	●笹1	●西平1	●春木	●	市来	●彦崎KⅡ	●元住吉山 ●宮滝
	笹2	三万田K (西平2)	大石1	陣内1式	草野	津雲B	
	中田	御領K		〃2式 〃3式			
晩期	礫石	御領B	大石2	〃4式	黒川	黒土BⅡ	滋賀里
	小浜	三万田B	ネギノ	〃5式		黒土BⅠ	橿原
	山寺		田村				

(●印は磨消縄文及び磨消縄文伴出)

① 三森定男「西部日本の縄文式土器」人類学、先史学講座第一巻、第二巻
② 小林久雄、「九州の縄文土器」人類学先史学講座第九巻
③ 賀川光夫「各地の縄文土器―九州」日本考古学講座3
④ 芹沢長介「石器時代の西部日本」築地書館
⑤ 江坂輝弥「縄文文化」考古学ノート先史時代2日本評論新社
⑥ 渡辺正気「九州地方縄文及弥生式土器編年表」九州アカデミー1、文画室
⑦ 河口貞徳「南九州後期の縄文土器―市来式土器―」考古学雑誌第四十二巻二号
⑧ 宮崎県教育委員会「下弓田遺跡」日向遺跡総合調査報告書第一輯
⑨ 日本考古学協会西北九州特別委員会の調査
⑩ 西田栄、鎌木義昌「伊予平城貝塚」平城町教育委員会
⑪ 賀川光夫「大分県東国東郡国東町ワラミノ遺跡調査報告」
⑫ 熊本県下益城南町豊田御領貝塚
⑬ 熊本県菊地郡七城村三万田東原遺跡
⑭ 熊本県宇土郡松橋町大野貝塚
⑮ 熊本市千原台遺跡
⑯ 熊本県荒尾市境崎貝塚
⑰ 鹿児島県フクアゲ町柱野黒川洞窟
⑱ 宮崎県北諸県郡中郷村二俣尾平野洞窟
⑲ 宮崎市青島下著方松添貝塚
⑳ 串間市大東鳥帽子野遺跡
㉑ 大分県大野郡朝地町田村遺跡
㉒ 長崎県島原市礫石原遺跡
㉓ 長崎県南高来郡深江村大字梶木字新開場、山ノ寺遺跡
㉔ 長崎県南高来郡北有村原山遺跡
㉕ 山口県熊毛郡平生町岩田遺跡
㉖ 兵庫県神戸市垂水区細田元住山遺跡
㉗ 奈良県高市郡畝傍町御坊橿原遺跡
㉘ 奈良県吉野郡中荘村宮滝遺跡
㉙ 滋賀県大津市滋賀里町滋賀里遺跡
㉚ 岩手県大船渡市赤崎町大洞貝塚

第二節　扁平打製石斧の用途を中心として

本遺跡出土の石器のうち主要なものは、さきにも触れた通り変質頁岩を原材とした扁平な打製石斧の一群である。これを中心として他の石器や土器などの遺物、更に遺跡の立地条件などが総合的に検討されて、はじめて当時の生活内容のが明らかになるであろう。精神生活、社会面、経済面と各範にわたってその検討が要請される。そこで生活をささえる基本的な生産の内容を検討してみる。土器は、その用途において煮沸形態、保存形態、その他特殊な意義をもつものであるが、生産や採集に直接関連するものではあり得ない。そこで全体の出土遺物のなかでも主要なもの一つとなり、石器のうちでも量的に他を圧する扁平な打製石斧と石鏃とに主眼を置くことが望まれる。これらを検討するまえに、まず時期を限定してみると、土器の編年からみちびかれるように、後期末葉から晩期にかけての時期が対象となることはあきらかである。

さて打製石斧については、古ぐから各地の多くの遺跡で調査されており、縄文期にあっては早期から晩期に互って普遍的な遺物である。また打製石斧の形態の分類は、研究史的には、坪井正五郎博士の見解や①、史前学研究所の一連の仕事を通じて大山柏氏らの見解②が古くから公表されている。また関東地方を中心として、昭和の十年代までに確認し得た資料を総括的に扱ったものとして酒詰仲男氏の考察がある③。大山柏氏の見解では、その中期以降に用途が分化するものとみて、杓子型を土掻きとして扱っている。たしかに中期以降の打製石斧の形態の変化は、それ以前のものと同一視することの出来ない傾向がみられるのであり、それが土器の変化や住居址を単位とする集落のあり方の変化と対応するものとみられる。量に於いてその増加を示した短冊型石斧や分銅型の石斧が中期から後期にかけての主要な型式となっている事実は、関東地方を中心として確認されている。一方戦後には飛騨地方の資料を中心として大形化された打製石斧を鍬の一種とみて、源初的な農耕具とみる見解や④、これとも関連して原始農耕のあり方を、栽培植物を中心として検討するなかで追求した論考もみられた⑤。後者にあっては栽培植物、定住性の問題、農耕具としての遺物及び社会機構の問題にわたって原始農耕に関する問題提起がおこなわれている。これらを通じて縄文期に於ける原始農耕の問題は、各地に於いて追求されたのであり、中期の土器に伴うとみた米や⑥、同じく中期の住居址内から出土したコッペパン状炭化物⑦などがそのゆるがぬ資料として報告された。その前者は層位的に確実でないから一応除外するとしても、後者は焼パンとみられたものであり、その主成分をなす澱粉が砂糖、米、里芋、麦の類かと、報告者によって指摘されている。

かって森本六爾氏は「縄文時代に農業が存在した積極的な証拠がない。しかしながら中期以後は狩漁猟の複雑な発展に伴って漸次農業発生への諸前提が発生した」とし更に「縄文中期以後に仮りに農業が存在したとしても、水稲耕作による農業とは別性格の農業であり、農業史的に云へば、様式を異にした農業であったことであろう。栽培された植物も自然稲以外に求めねばならぬことになるのではないかと思われる。」⑧と述べたが、それが除々に証明されつつあるようにもみえ

る。このように縄文式中期以降の生活資料獲得の方法の変化は、栽培ないしは保護育成されたとみる植物の検討、集落構成の変化などの社会的な条件、更に耕具とみるべき遺物の検討を求めている。これはかならずしも関東地方を中心とする地域のみでなく、他の地域に於いても同様の社会的変化が、指摘されるものである。九州についてみると、後期の市来式に伴う例⑨などで集落規模の拡大化が認められたものであり、このことは、中期から後期にかけての主要な遺跡の規模からも指摘されるものである。農耕具としては本遺跡出土の打製石鎌がその形態からして、栽培植物、保護育成植物の収獲により効果的な用具とみられるものである。それと関連して昭和十年代に調査された福岡県の下楠田貝塚出土例をはじめとして、後期から晩期の主要な石器となっている扁年な打製石斧が本遺跡にも多量に出土していることは、さきにも記した通りである。これに対応するかのように磨製石斧が晩期に入って小形化される傾向がみられる。一方弥生期に於ける的な用途を持つとみられた片刃石斧⑩は、収獲用具としての石庖丁が一般的に弥生式中期後半以後に、鉄に換えられ、それ以前に於いても形態に変化がみられたのと同様⑪、後期に入ってからは急激に消失し、鉄製品に換わるもののようである。もっともこの時期に於ける鍬的な用途をもつ石器は、必ずしも片刃石斧に限定されるものでなく大形の打製石斧も使用されたとみられるのである⑫。その源初的な形態を示すとみられる扁平な打製石斧は、先に述べた通り、使用痕が土堀り具の一種とみられるのである。本遺跡に出土しなかった石皿も、その組み合せの上で考えて置く必要がある。西日本には石皿が少いと云われて来たが、戦後の調査によって九州内にも多くの資料が報告されており⑬、そのほとんどが後期のもので、しかも一遺跡から教例みられる場合が多い。他の地方の中期以前の石皿と対比すると、より大形であって、長さ五十糎以上に及ぶものがしばばあり、しかも形態も整斉である。後期の石皿は、それ以前の石皿と、機能に於いて基本的には変わらないとしても、使用の頻度や量的な異りは、当然考えられるのであり、それが伴出する扁平打製石斧の大量の出現と関連するとみられる。かくて扁平な打製石斧の用途は、土堀り具として、竪穴住居作成などの作業に使用された上に、栽培ないしは植物の保護育成の用具と考えることができる。さればとて、ただちに当時の生業を、採集から切り離して考えることは早計であり、その基調が採集にあったとみるべきである。本遺跡から打製石鏃が多量に出土しているのもこのことを示す。本遺跡の立地条件からして、湧水にめぐまれるばかりか、附近に水量豊富な河川をひかえ更にやや平担に起伏する山野がひろがっていることから、縄文式後期から晩期においては、動物性收獲物や、食料とし得る植物の採集が基調となっていたとみられ、多くの経験を通じて知り得た植物の保護育成や栽培が併せ用いられたと考える。（鈴木）

① 坪井正五郎「西ケ原貝塚探究報告」人類学雑誌八―八五
② 大山柏「神奈川県下新磯村勝坂遺跡包含地調査報告」史前学会小報1
③ 酒詰仲男「本邦先史石器類概説」人類学先史学講座第十九巻
④ 澄田正一「日本原始農業発生の問題」名古屋大学文学部研究論文集Ⅺ
⑤ 酒詰仲男「日本原始農業試論」考古学雑誌四二―二
⑥ 清水潤三「米を出土した縄文文化の遺跡」日本考古学協会第十八回総会

「縄文時代に於ける農耕文化」歴史教育五―三

⑦ 藤森栄一「縄文中期農耕有否に関する新資料」日本考古学協会第二十七回総会

⑧ 森本六爾「農業起源と農業社会」日本原始農業新論、東京考古学会

⑨ 宮崎県串間市下弓田遺跡に於いては昭和三十五年に三例、昭和三十六年に六例、計九例の住居址が発見されている。

⑩ 森本六爾「弥生文化と原始農業問題」日本原始農業、東京考古学会

⑪ 森本六爾「石庖丁の諸形態と分布」日本原始農業新論、東京考古学会

⑫ 倉光清六「伯耆の打製石斧―その大型品について」日本原始農業、東京考古学会

⑬ 山田良三「人吉盆地の石皿」古代学研究十八号。なお宮崎県下に於いては綾町尾立遺跡、田野町芳ケ迫遺跡、串間市大平遺跡、串間市下弓田遺跡などから大形品が出土している。下弓田遺跡と関連のある志布志湾近辺では鹿児島県肝属郡志布志町天提遺跡からも類例が出土している。

第五章　九州における縄文後期の一、二の問題

― 所謂陣内遺跡出土土器に関連して ―

第三章で遺物の項において細論した本遺跡土器は、九州縄文後期から晩期に至る間の土器形式を大かた網羅した。しかしそれが所謂層位的な先後関係で把握し得なかったとはいえ、大きく磨消縄文、磨研土器、晩期土器の三つの層を確認し得た点は非常に有意義であった。一類から十類に形式分類した本遺跡出土土器の大部分（一、二類を除く）が後、晩期に属し、それぞれ三つの層位に含まれることは本遺跡の土器が、九州の縄文後期末葉―晩期えの一つの標式的なものと解釈するにふさわしいものであった。そこで本項においてはそれぞれの層位にしたがい特徴とする問題を提起して九州縄文後期の推移を検討することにした。

第一節　陣内三、四類土器の展開

前項、第三、四類土器として他類土器と区別した所謂磨消縄文は、広口、山形に隆起した口縁部を持ち、胴部を球状に誇張させた鉢形土器である。この土器は口縁部が内反りの文様帯となり、その部位に線と磨消縄文をもって装飾する。又上胴には同じく線と磨消縄文を混用した文様を施して飾り、器面は篦による研磨をもって調整している。この種類の土器は、且て西平式土器と汎称されて九州縄文後期の一時期を標式したものである。しかし所謂西平式土器の特徴は以上の如く、九州に他類土器を認めない程顕著なものであったが、この類土器が更に二つの様式に分離され、その一つが鐘ケ崎式土器の磨消縄文盛期に続き、他の一つが三万田K式と共通時期に対比することが可能になった。したがってこの二つの相異を従来の概念にしたがえば西平一、同二式と区別することができる。本遺跡においては三、四類がそれぞれ西平一、二式に類するものということができる。この点、左の図式が成り立つものと思う。

鐘ケ崎式（磨消縄文文化）

西平一式（陣内三類）―　―西平二式（陣内四類）―三万田K式　―

右の如く土器の推移を考えると磨消縄文の終末を西平一式（陣内三類）の時期に求めることができ、二式においては羽状縄文を基調に研磨土器えと推移する。このような問題を提起するためには左の共通す

る三つの遺跡をあげる必要がある。

一、宮崎県高千穂町陣内遺跡　土器包合層

二、長崎県国見町筏遺跡　貝塚、土器包合層

三、大分県別府市春木遺跡　土器包合層

右の三つの遺跡は所謂西平式土器とそれに続く後期遺物を豊富に出土し、それぞれ土器形式の差を層位で把握することが可能なものである。しかもこの遺跡は鐘崎式土器が混入しない西平とそれ以後の土器のみで占められ、一応鐘崎式土器とは完全に別系列になるものと見られるものである。したがって西平式土器の盛衰を考える場合一応鐘崎式とはわく外の位置で考察し、鐘崎式土器との先後関係を別の遺跡に徴して考察する必要がおこってくる。この鐘崎、西平を同時に考察可能な遺跡として大分県鶴崎市小池原遺跡の例を挙げてそれぞれ先後関係を考求することができるが、これは今後の細考にまち度い。さて鐘崎式土器と称する磨消縄文の盛期は明かに西平式土器に先行する種類の土器で、ここに西平一式として把握した陣内三類は、磨消縄文終末の一様式であると見做すことができる。次に陣内三類よりその特徴を述べよう。

陣内三類(西平一式)三類土器は口縁部く字形に内反し、広口、長頸、胴部誇張による平底の土器である。口縁部の四部位に山形波状が印象的で、その波状部を中心にく字形内反の文様帯が存在する。この文様は所謂縁帯文様的なもので、山形波状部に文様の集中が見られ、線と磨消縄文を混用して文様効果をあげる。又長頸部と下胴部は研磨調整による素文で放置、肩部には二本線を基調に教条の波線を施し、それぞれ磨消縄文をもって装飾する。特に注目するのは胴部が球状に誇張され、底部の安定した点である。この種土器は長崎県筏遺跡、熊本県西平遺跡、大分県春木遺跡など九州の西北端から東南部を従断する地方に分布する。したがって九州の東北端と南西端には分布が稀薄で、北端、南端はその圏外となる可能性をもつ。

陣内四類（西平二式）四類は三万田K式と通称する土器にも関連するもので、口縁部く字形に内反し、広口、長頸の鉢形土器で、器形上一式と大差なく観察されるが、特に目立った特徴といえば胴部の張りが減退することである。又文様の施文位置は三類と同じであるが、口縁部施文はうすい線刻で、磨消縄文を見ない。更に上胴部は左右から集合する二本の線が、中央で返転し、その部位がx状を呈する。このx状返転線刻は更に中央と一本の線を加えて線刻効果をあげる。このようなx状入組文様が主体で、ここに磨消縄文の施文を見ない。このように施文技法に顕著な特徴が見られて三類と明確な相異が指摘される。

さてこの四類土器の出土は山口県岩田遺跡など比較的九州北部、西部日本にもその分布が延び東九州から四国西部にも及ぶことが知られているので、これは三類の発達、即ち後期末葉の研磨土器の物語るものであろうと考えることができる。三類の分布から発達して次第に分布圏を広げる可能性を持つ。

右三、四類土器は器形の共通性という呪術性を離れて観察すると、その分布上に大きな広りの点で相異をきたす。細部にわたれば、口縁部や胴部の誇張の優劣、更に磨消縄文の減退—消滅などがそれぞれ特

徴とされ、x状入組文様や、研磨土器化えの問題などが指摘される。決定的な相異といえば、新要素の文様構成が、x状入組文として出現し、それが三万田K式えの祖源的な役割をえんずる点であろう。この関係は西平―三万田K式の合理的な解釈として特記されるものである。このような西平式土器の一、二式の分類展開は、西平と三万田K式の時期的先後関係を指摘する有力な材料で、その関係を筏、春木などの遺跡から共通に見い出すことができる。

本遺跡三、四類の分類から九州における磨消縄文の減退、消滅の時期を具体的にすることが一応可能となるが、その問題は三、四類でしかし従来の編年からすると三万田K式の時期には西平の様式残存形と見て磨消縄文の消滅を決定ずける。又この縄文消滅期と積極的な関係があるかどうか問題を残すとしても、黒色研磨土器と細石器とが目立って共伴して、縄文消滅期をこの分野で特徴ずける。土器形式の新たな展開と同時に、この細石器の再登場は興味深い。この細石器の新たな登場の問題は更に今後の細検討が必要であるので時期を見て細論を試る。

第二節　所謂陣内式土器と縄文終末期

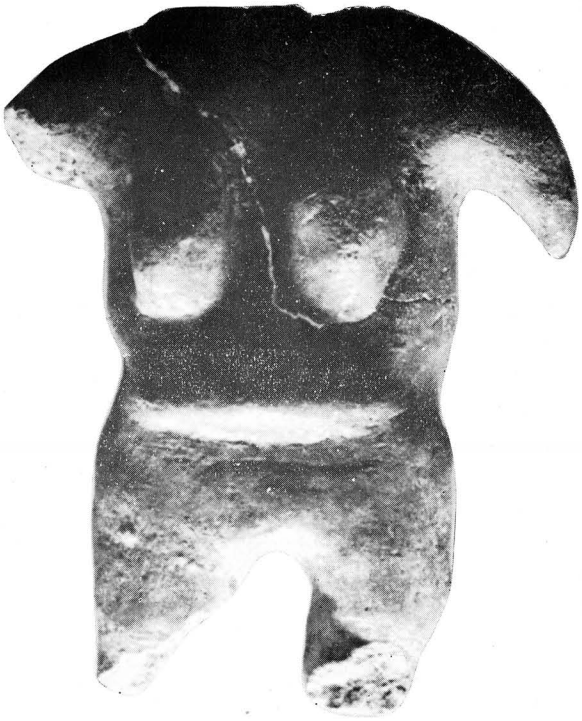
前項第四章において鈴木氏が所謂陣内式の設定を試みた陣内第五類―九類の土器様式とその先後関係は、これが層位的な関係で把握されたとはしないにしろ、同一遺跡の出土例であると同時に、それぞれの類別された土器を他遺跡の単純資料に対比すれば、それがそれぞれ先後関係を意味するものと考えてよい。しかも、それは黒色研磨による後期後葉の土器を基調に晩期中葉に及ぶ一連の土器形式を網羅する点で、今後東九州の編年表で陣内式と呼ぶことにした。更に重要なことは後期―晩期を結ぶ編年表で、或は御領と呼び、更に黒川、山寺Aと呼ぶ不便を同一遺跡において集合、集成の可能な遺跡として九州後期後半―晩期前葉を陣内式土器の標式において統一することは種々の混乱をさけて有意義である。

さて陣内遺跡より出土された豊富且つ複雑な資料を整理するにあたり、きわめて注要すべき問題は、磨消縄文の発達と、黒色研磨土器の展開である。この二つの問題を整理すると、最近の新資料中、宮崎県綾遺跡や、大分県湯平遺跡において典型的な関東中期加曽利E式土器と見る小量の資料が指摘され、磨消縄文の祖型を東方にもつことが指摘されつつある。これと同じように後晩期の特異な資料、特に九州に普遍的に見られる三万田、御領を基調とする土器が、同じく北部九州から元住吉山、宮滝など東方えの広がりを考える時、これ又、この種土器の展開を関西以西の地を含めたものの上で検討しないわけにはいかぬ段階となった。更に晩期資料における黒色土器が、黒土BⅡや、滋賀里の如く古くからその特徴が指摘されている如く、寧ろ、その広がりは西に延びる可能性が強い。このようにしてみると刻目凸帯をもって知られる山ノ寺式土器が、西に広がる縄文文化のカテゴリーより遊離して九州、特に北部に濃縮されてしまう結果になる。山寺―夜臼という支石墓や磨製石器を伴う一群を以上の縄文式文化の大勢の中で把握することが果して適当であるか否か、今後の問題はこの点に集中される。

さて更に興味深い点は、縄文消失の陣内四類、（西平Ⅰ）に比較的

顕著に見出された細石器が、この土器の分布や盛行とは別に九州のみの所産として晩期に亙って更に盛行を見る。しかもこの所産は芹沢氏の指摘の如く半島との対比において、その生産手段を含めて考えなければならぬ生活具（ライフ・トール）であって、この問題を含めて、陣内遺跡出土土器と細石器の問題は更に重要である。もしこの問題を解決し得るとすれば九州における縄文後晩期は、わが国古代史上更に重要度を増すであろう。そうした問題を含めて陣内式設定はきわめて重要で、且つ従来の混乱を除き得るものであると確信するのである。（賀川）

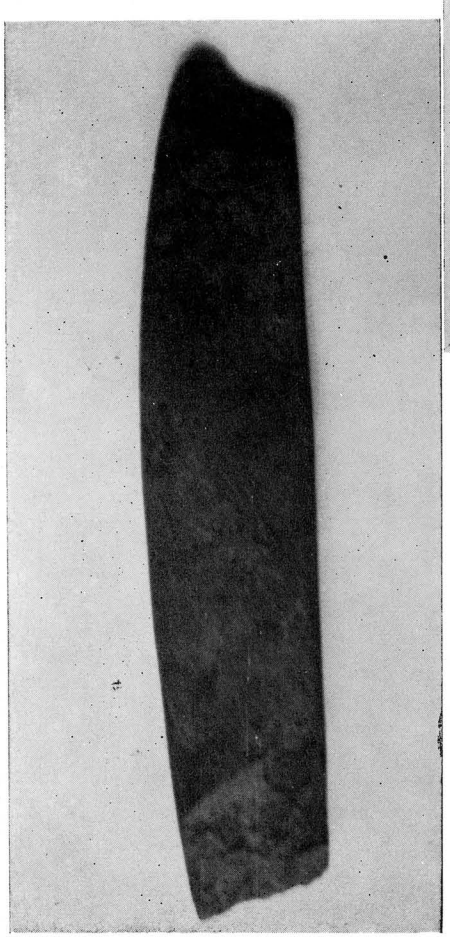
図版



1　土　　偶

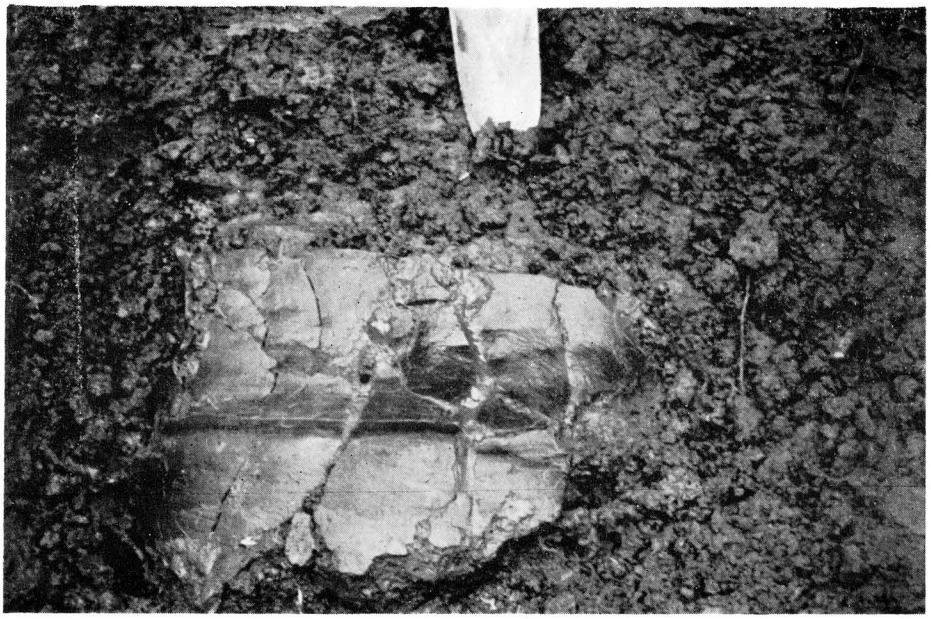
2　石　棒

3 石　　刀　（表）



4 石　　刀　（裏）

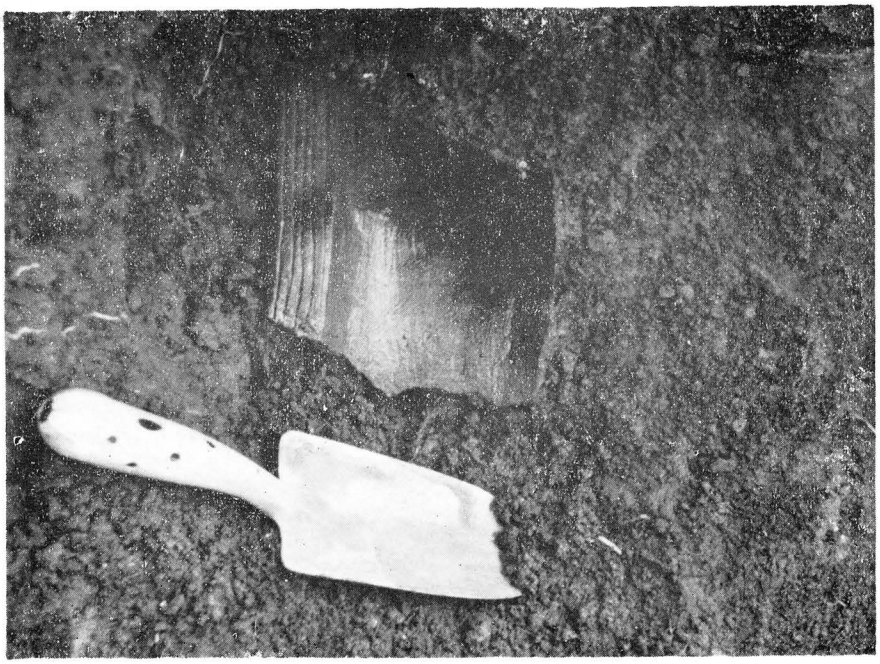
5 出　土　状　況



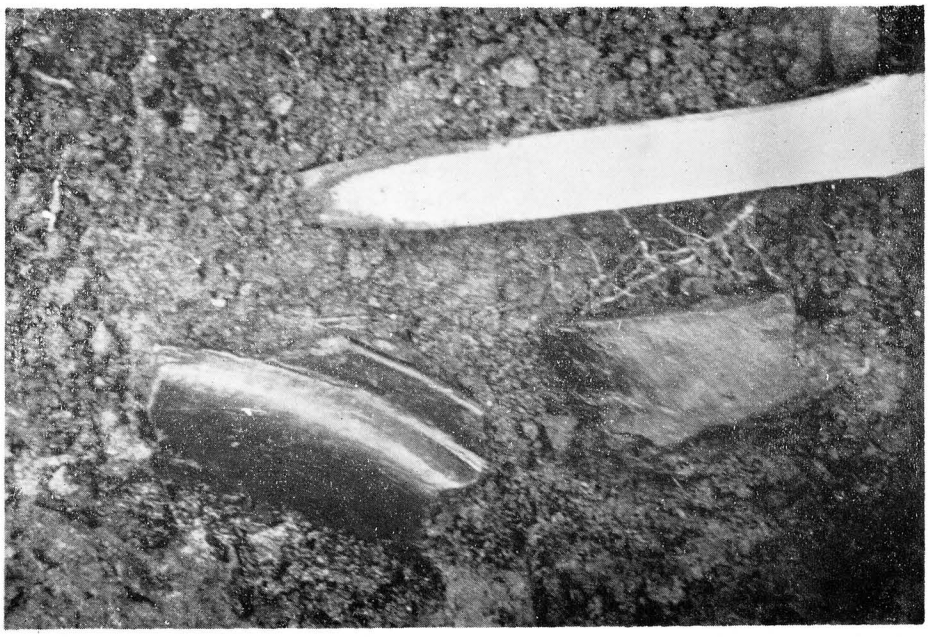
6 出　土　状　況

7 出　土　状　況

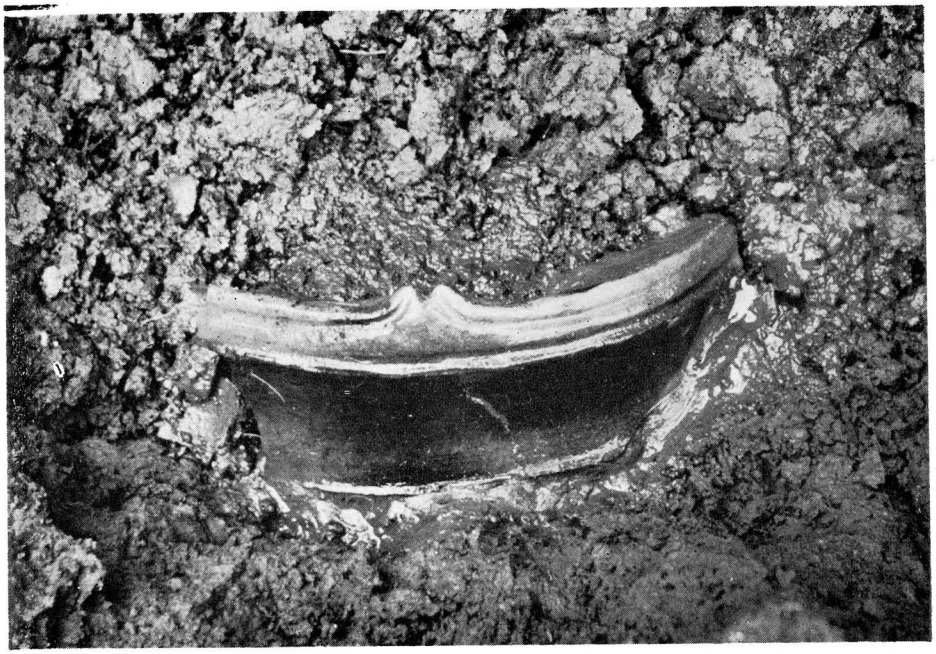
8 出　土　状　況



9 出　土　状　況



10 出　土　状　況

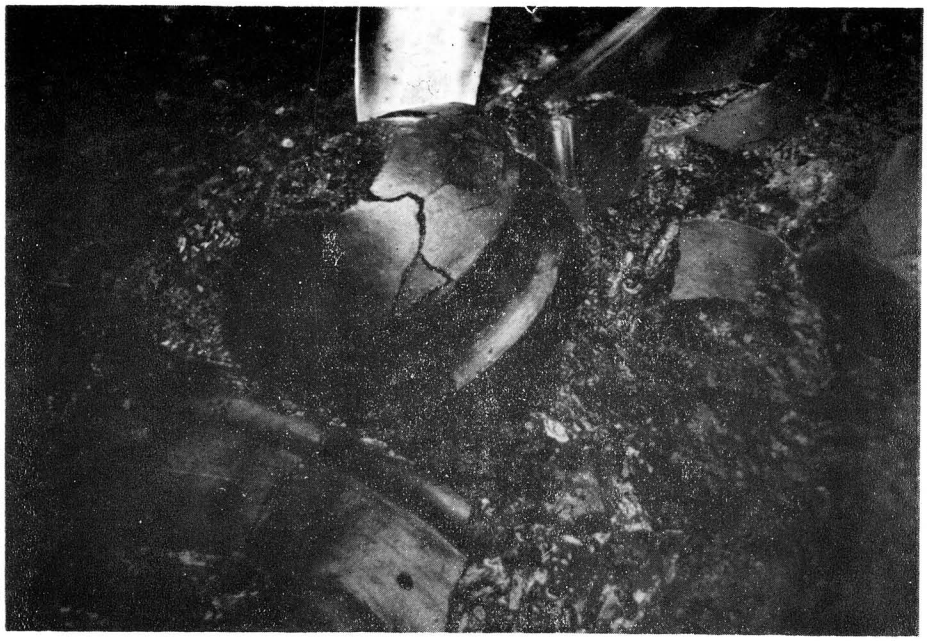


11 出　土　状　況

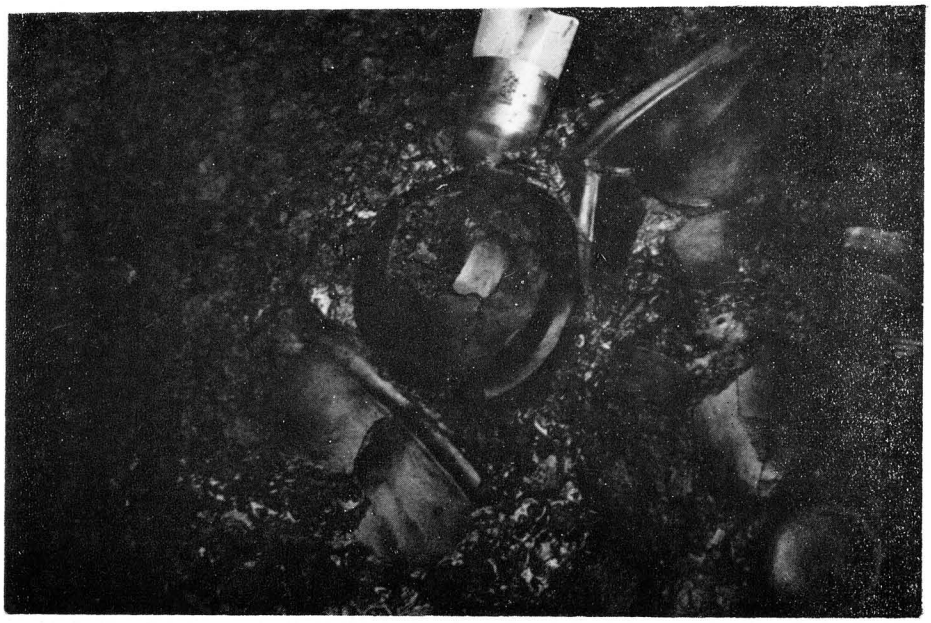
12 出　土　状　況

13 出　土　状　況

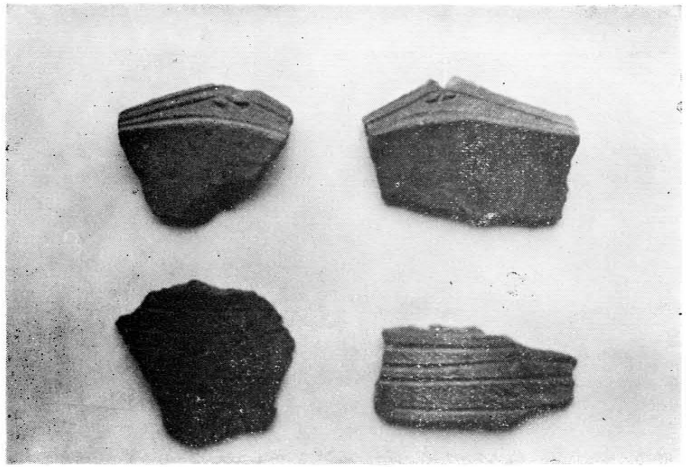
14 出　土　状　況



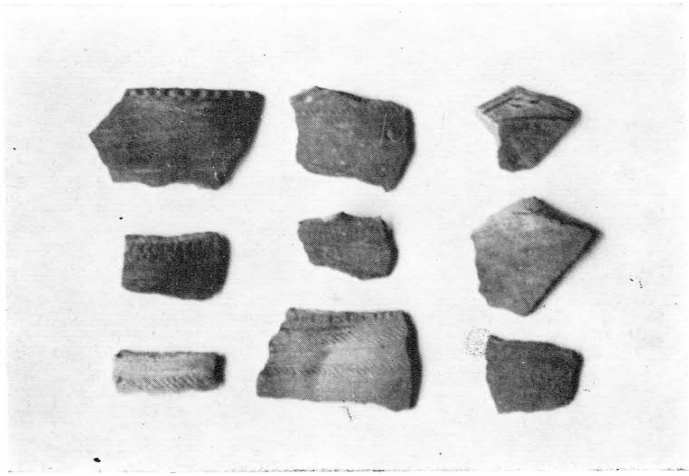
15 出　土　状　況



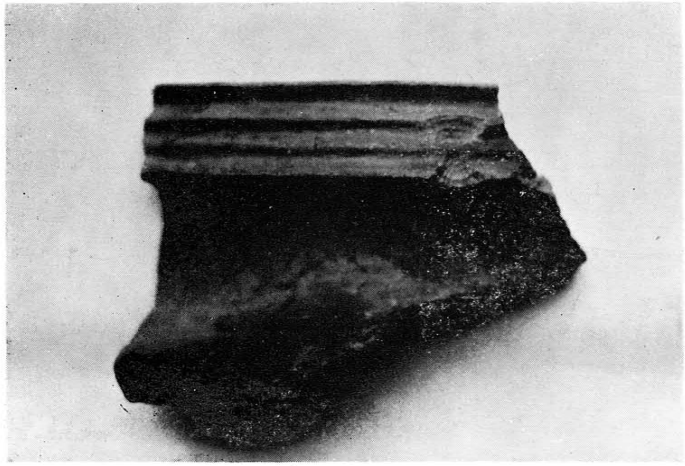
16 出　土　状　況



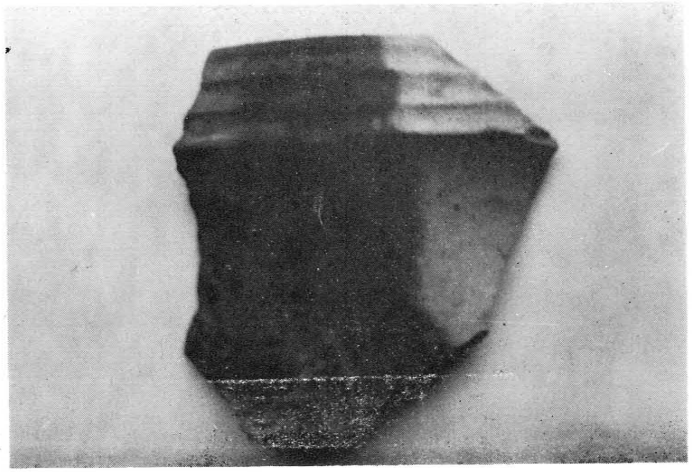
17 第　四　類　土　器



18 第　四　類　土　器



19 第　五　類　土　器

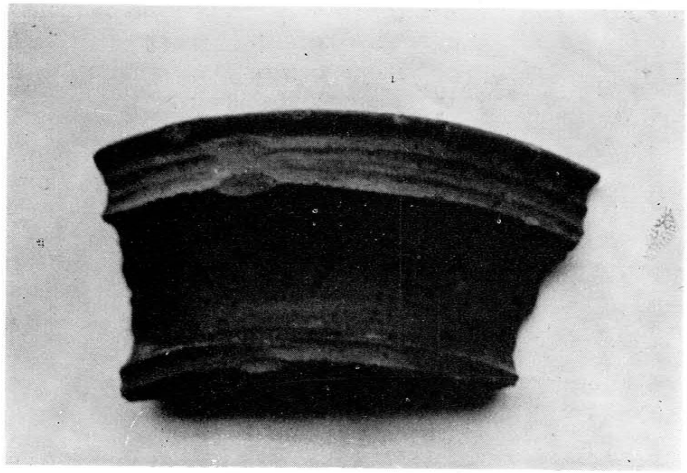


20 第　五　類　土　器

21 第　六　類　石　器

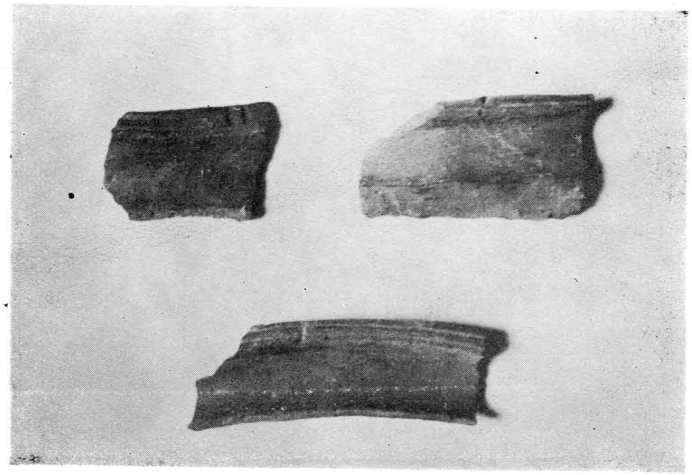
22 第　七　類　土　器

23 第五類土器第八類土器

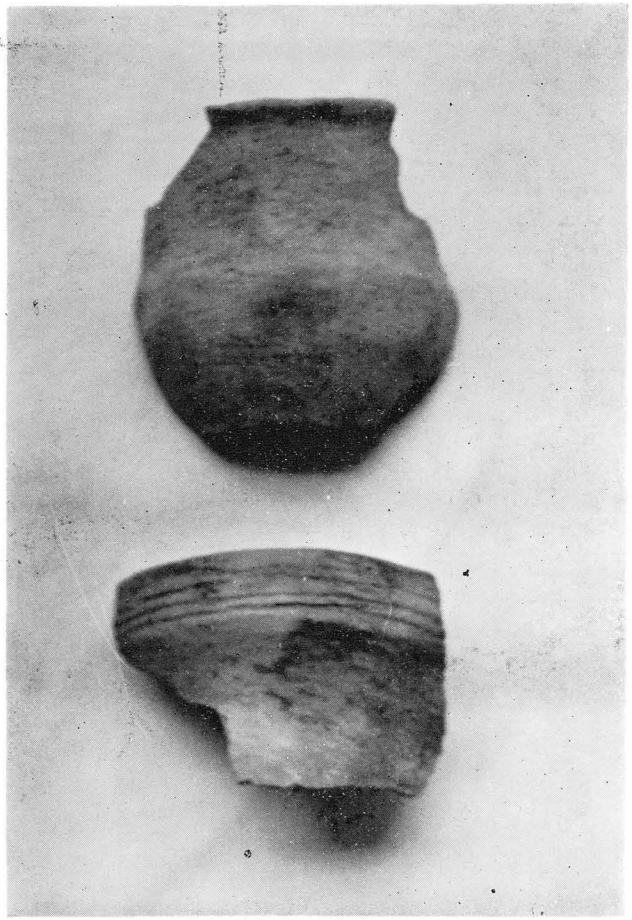


24 第　六　類　土　器

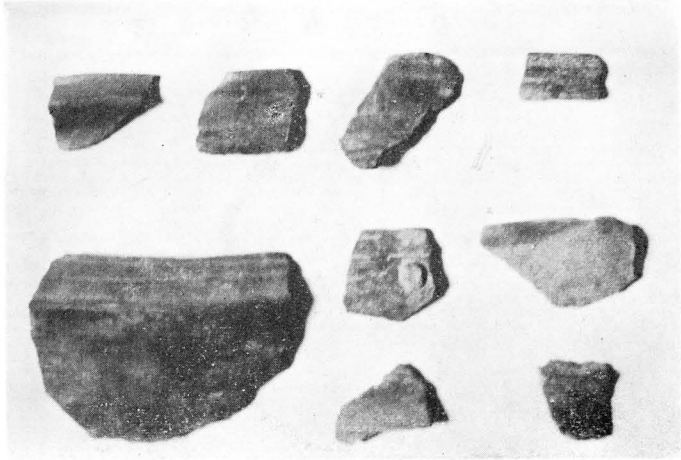
25 第　七　類　土　器



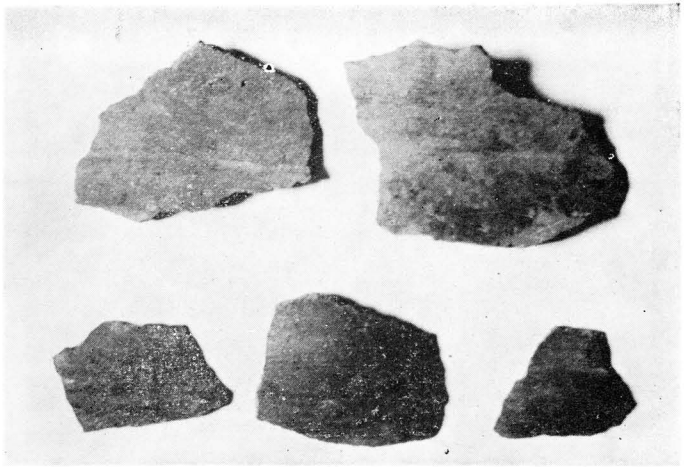
26 第　九　類　土　器



27 第　九　類　石　器

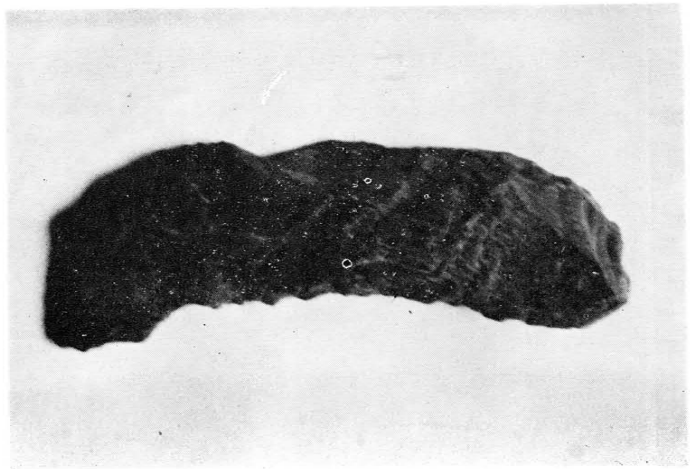


28 第　九　類　土　器

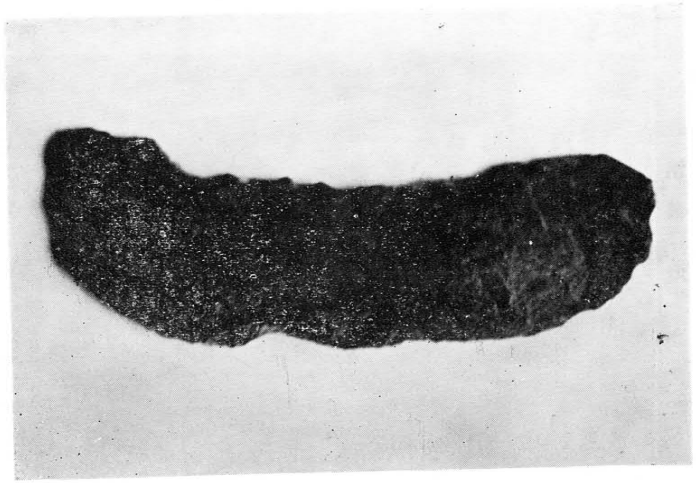


29 第　十　類　土　器

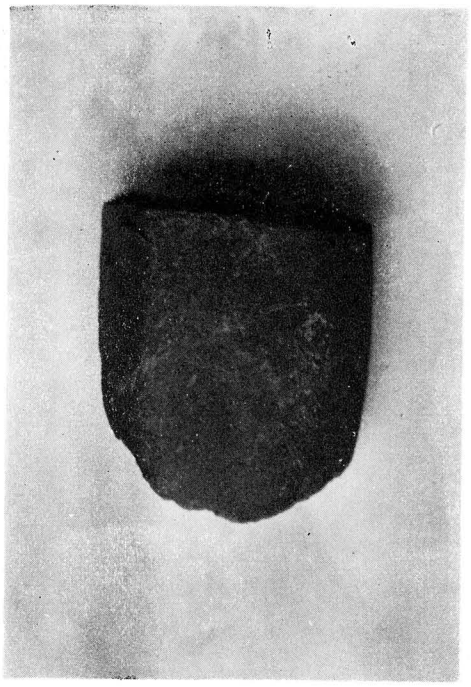
30 石　　棒



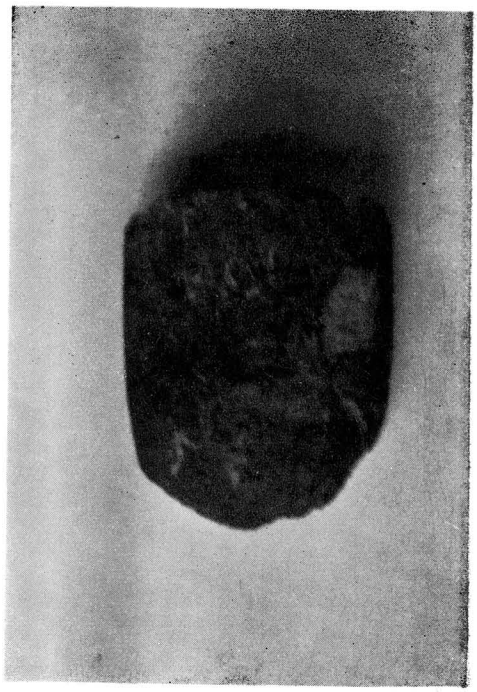
31 石　　鎌



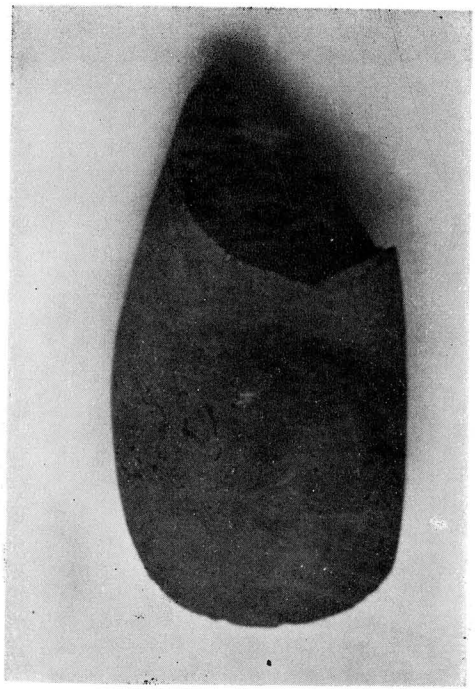
32 石　　鎌



33 磨　製　石　斧

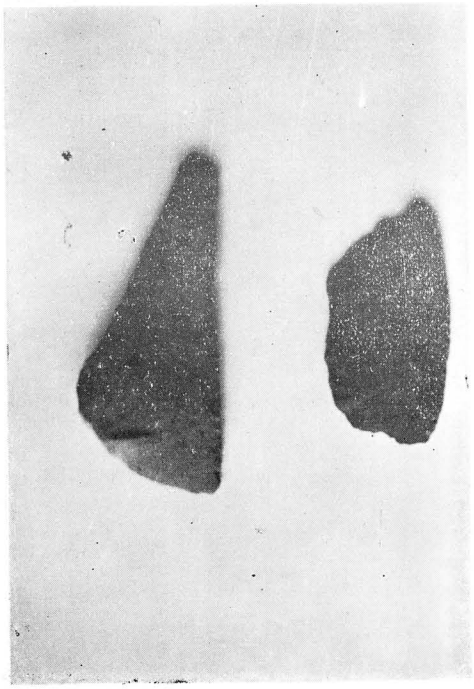


34 磨　製　石　斧

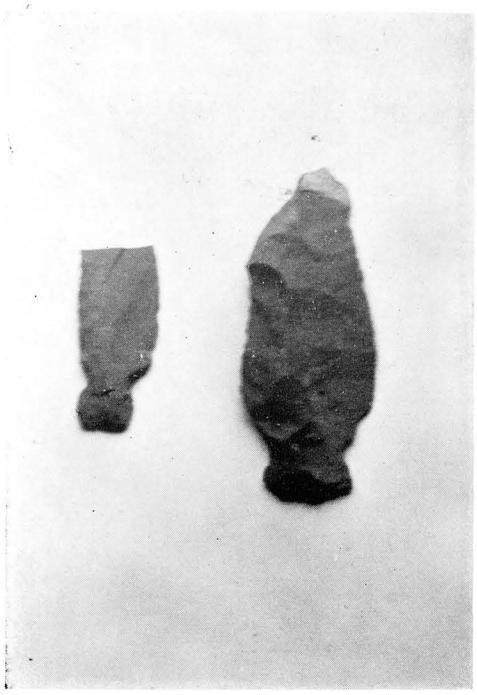


35 磨　製　石　斧

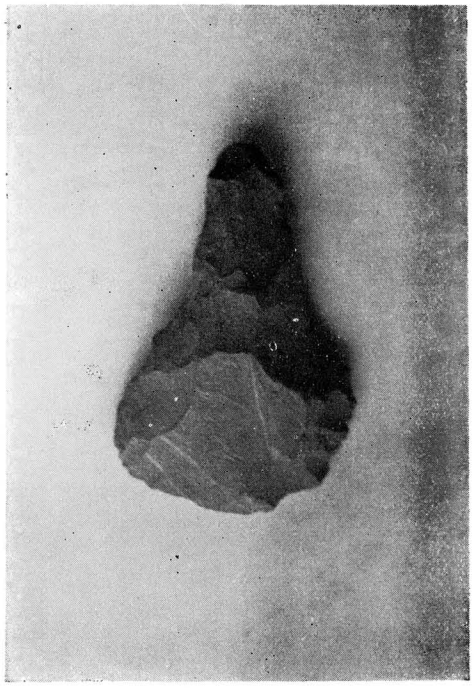
36 磨　製　石　斧



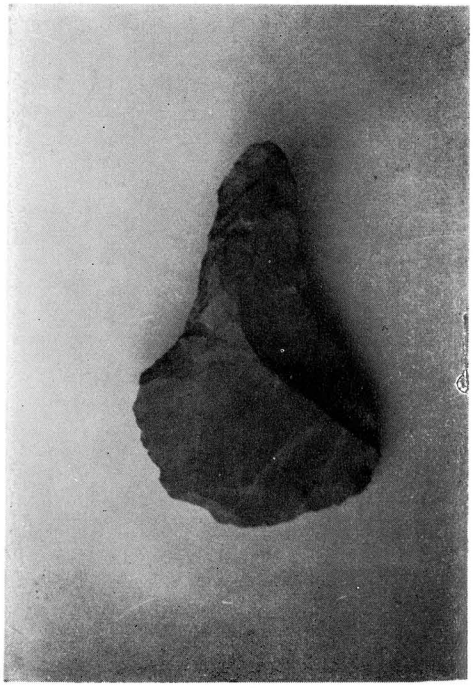
37 石　　匙



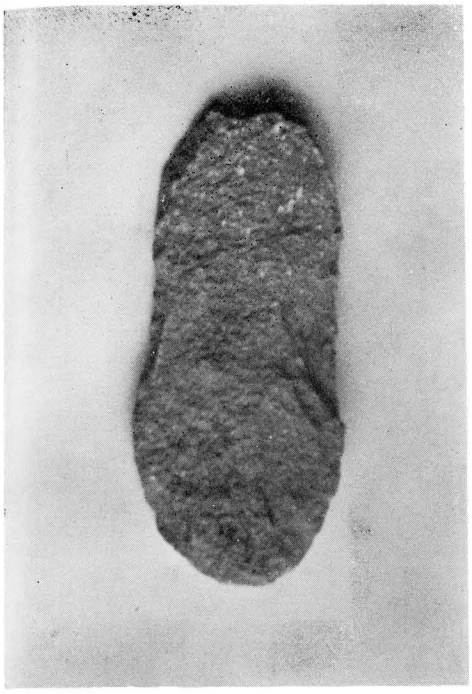
38 石　　匙



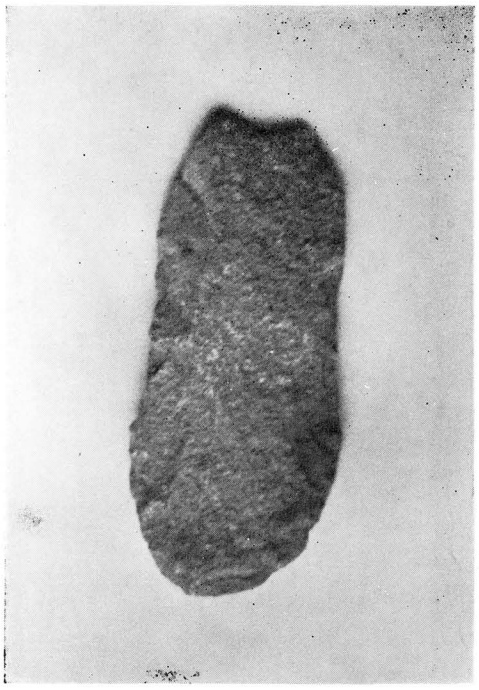
39 打　製　石　斧



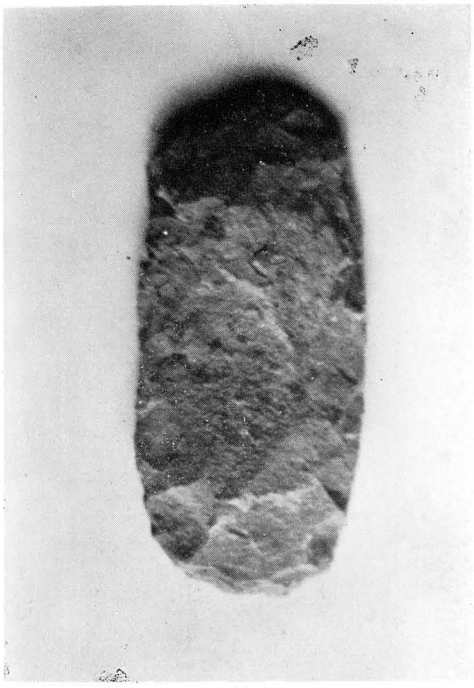
40 打　製　石　器



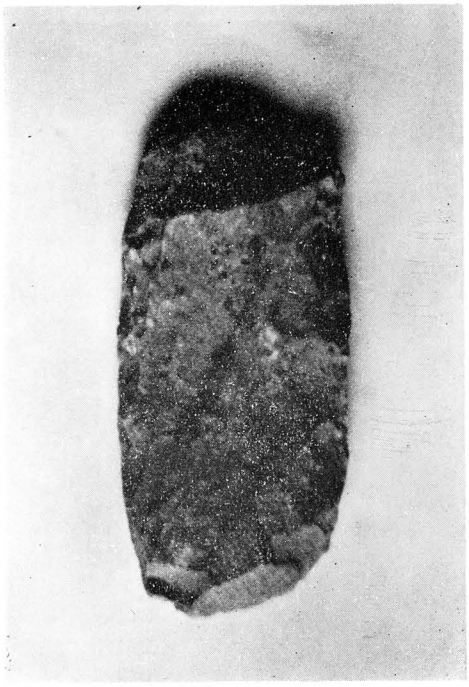
41 打　製　石　斧



42 打　製　石　斧



43 打　製　石　斧

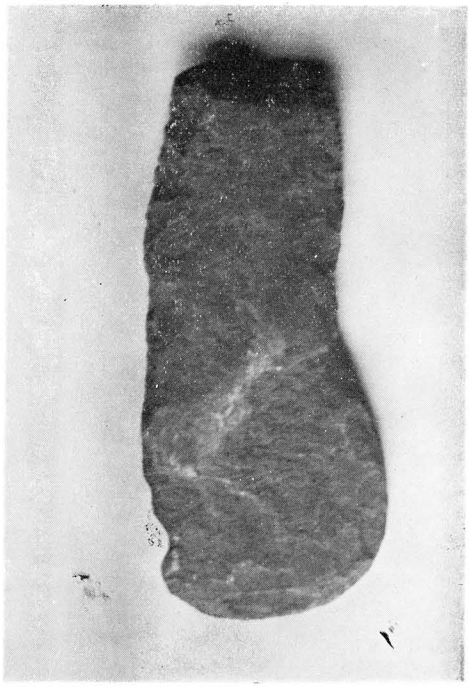


44 打　製　石　斧

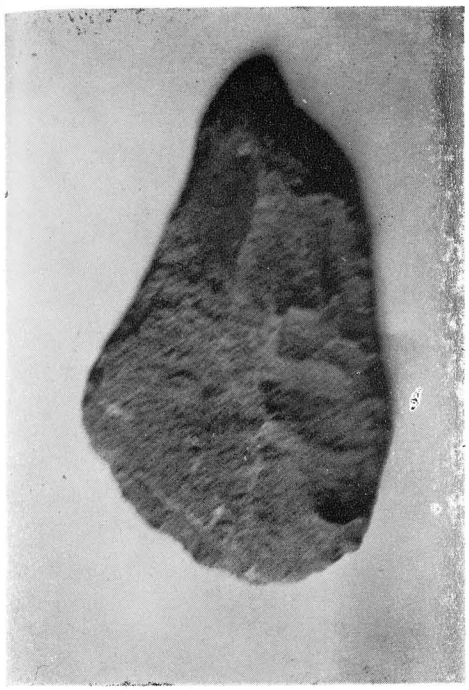
45 打　製　石　斧

46 打　製　石　斧

47 打　製　石　斧

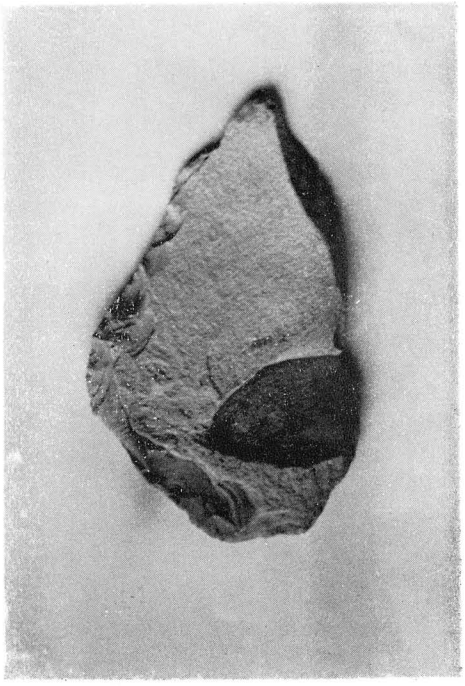


48 打　製　石　斧

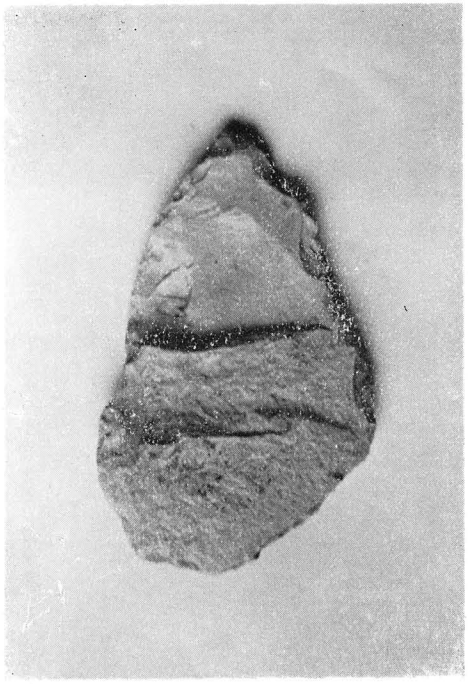


49 打　製　石　斧

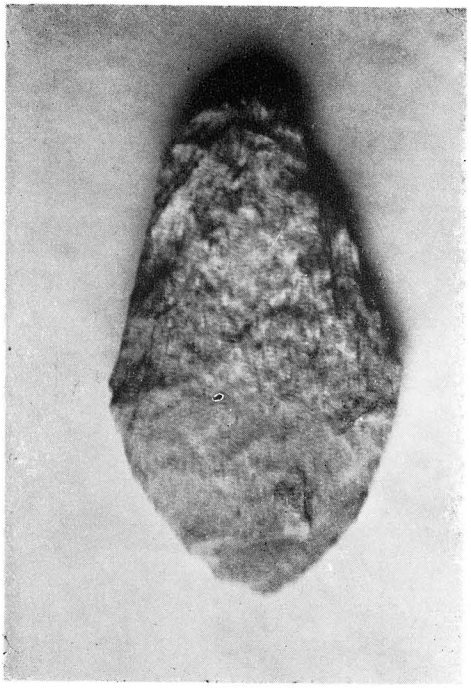
50 打　製　石　斧



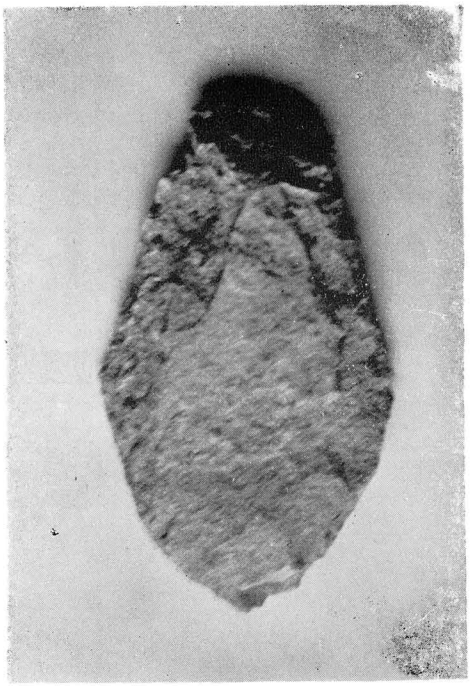
51 打　製　石　斧



52 打　製　石　斧



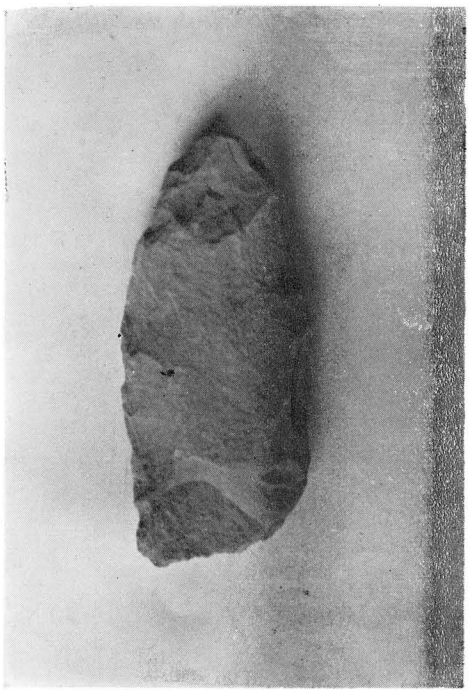
53 斧　製　石　斧



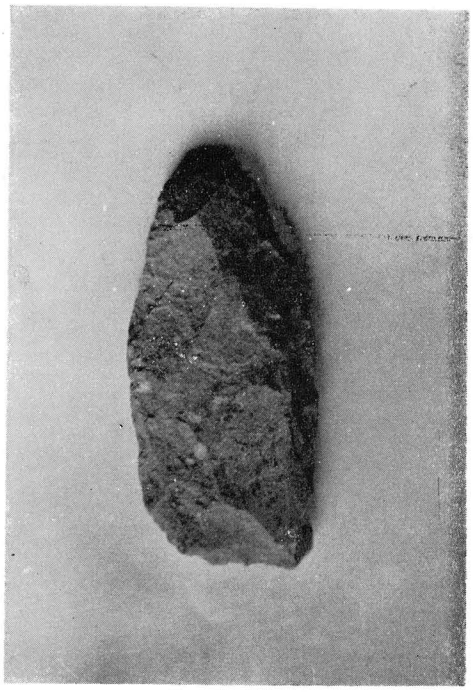
54 打　製　石　斧

55 打　製　石　打

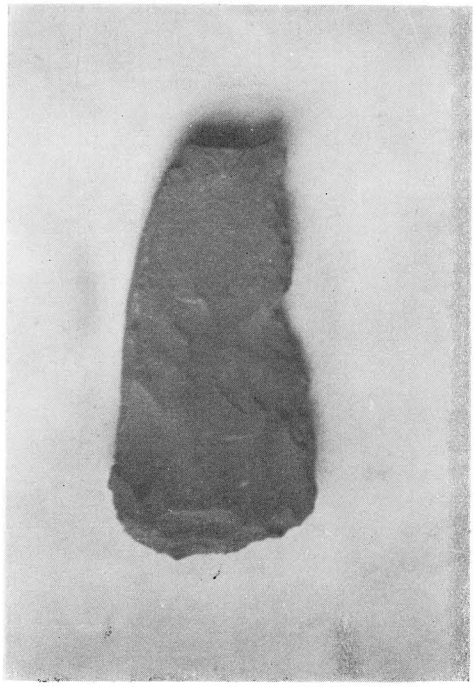
56 打　製　石　斧



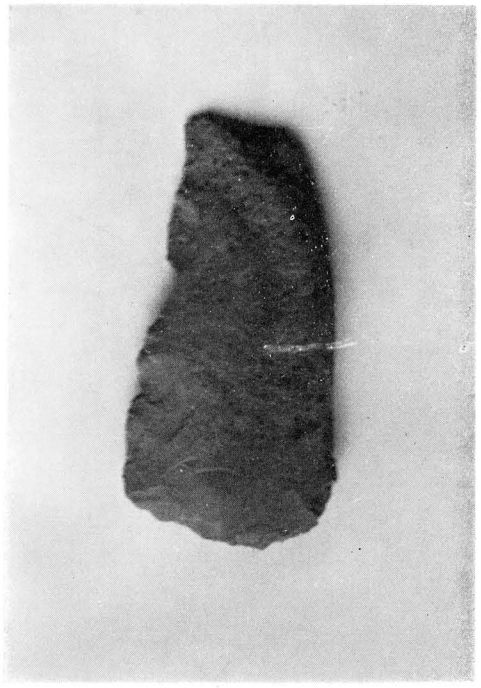
57 打　製　石　斧



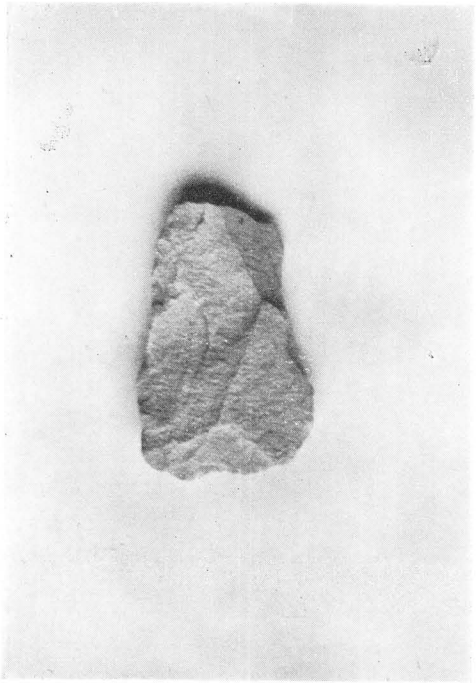
58 打　製　石　斧



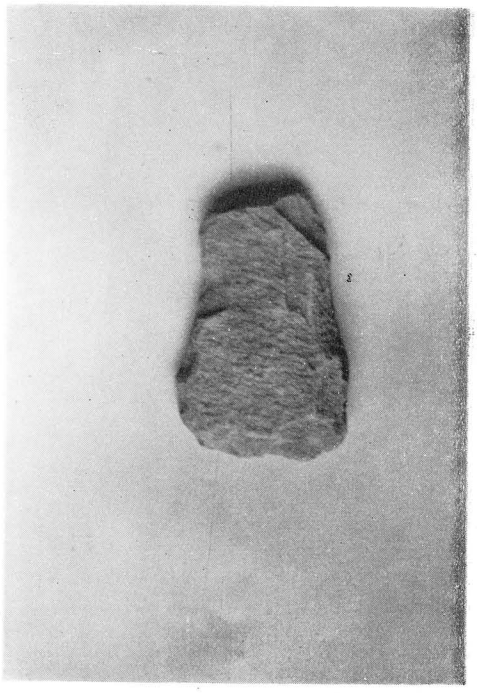
59 石　製　石　斧



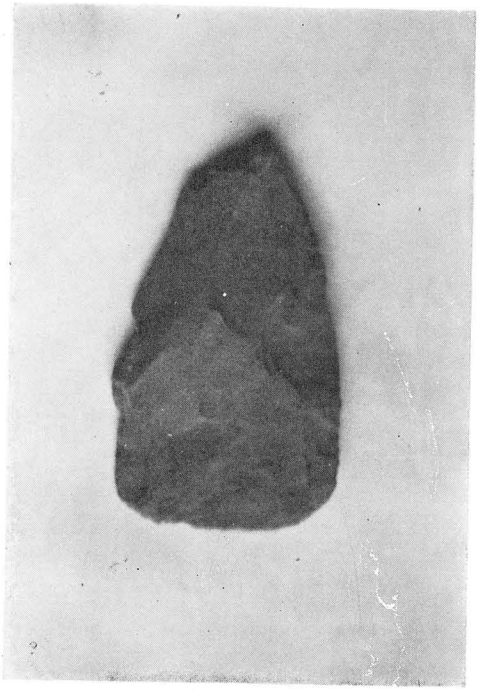
60 打　製　石　斧



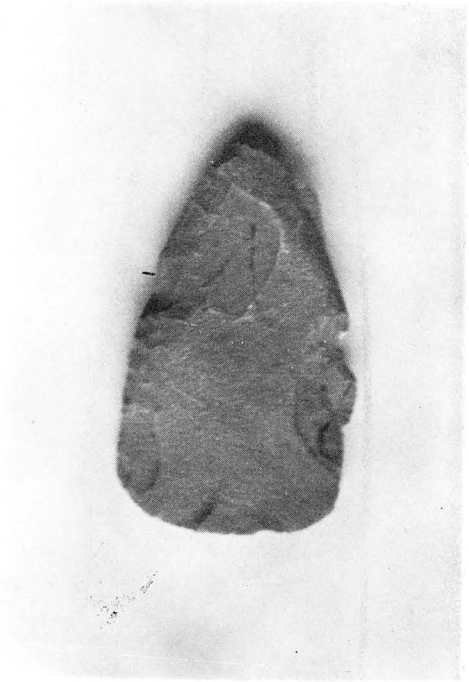
61 打　製　石　斧



62 打　製　石　斧



63 打　製　石　斧

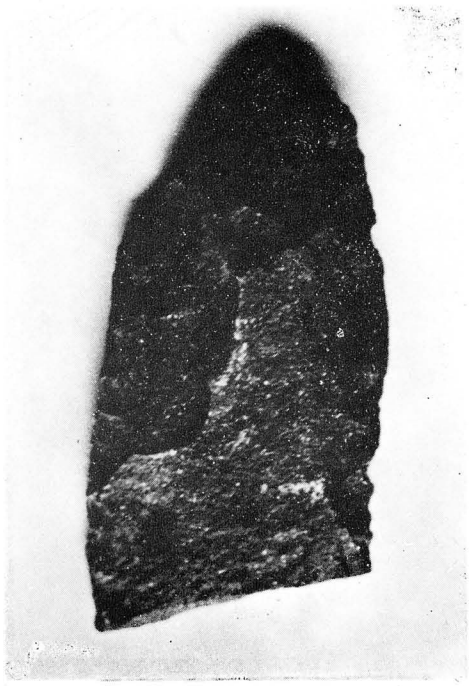


64 打　製　石　斧

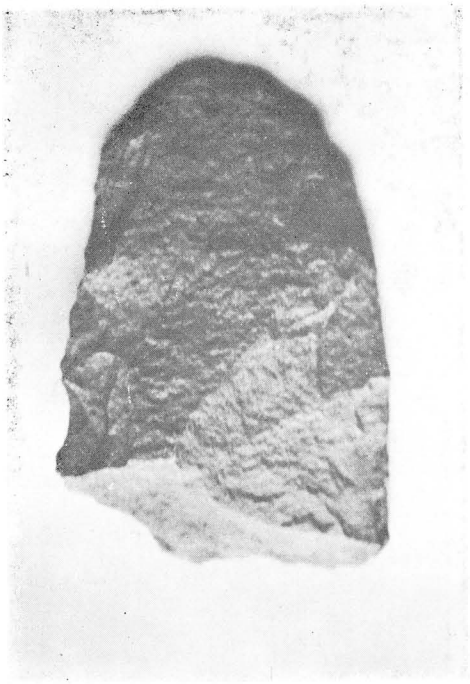
65 打　製　石　斧

66 打　製　石　斧

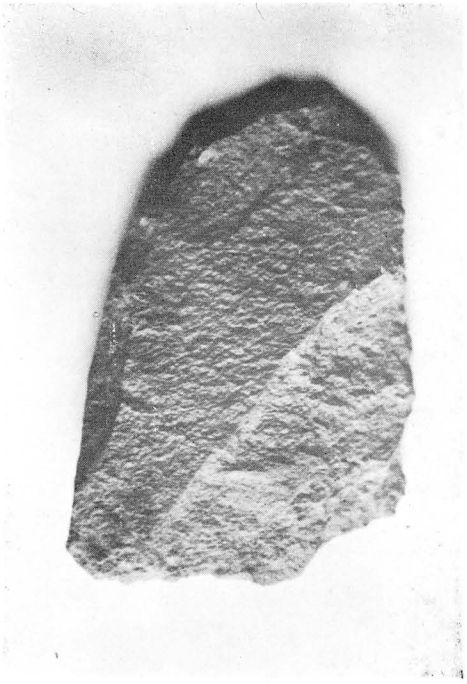
67 打　製　石　斧



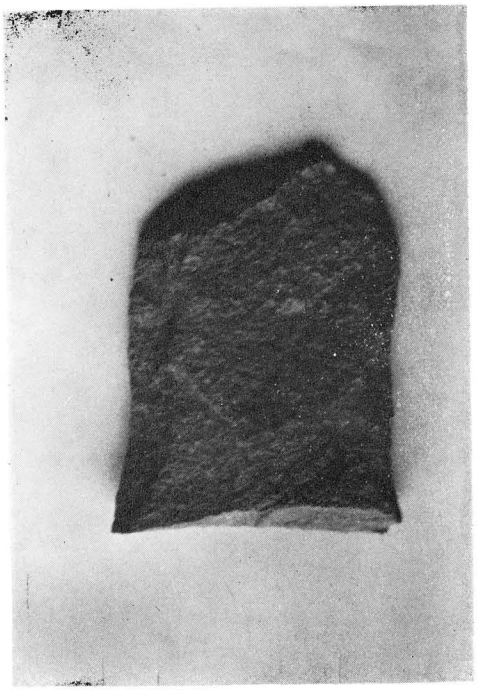
68 打　製　石　斧



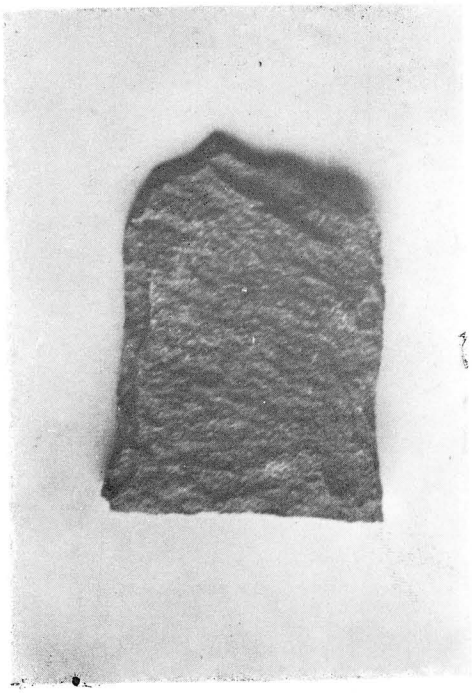
69 打　製　石　斧



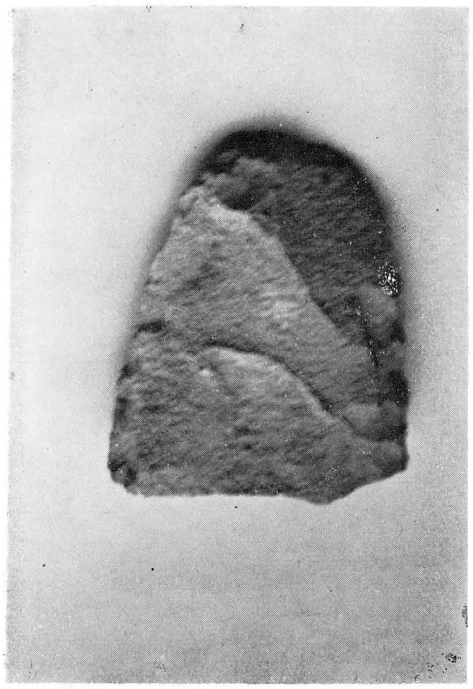
70 打　製　石　斧



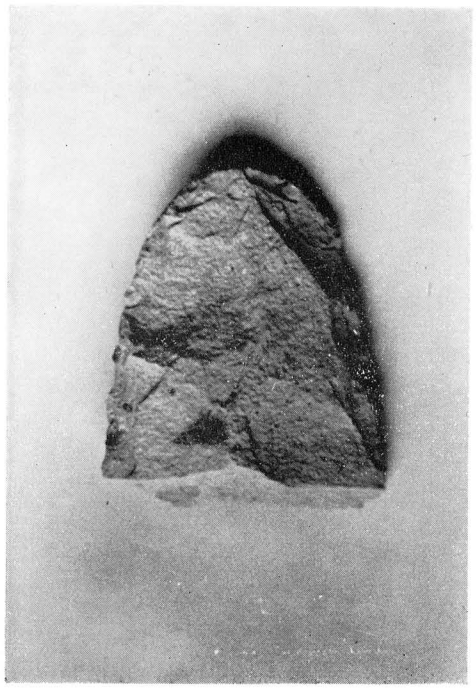
71 打　製　石　斧



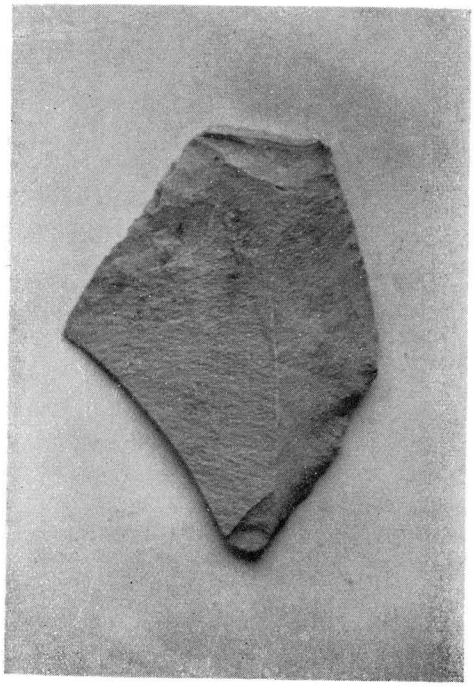
72 打　製　石　斧



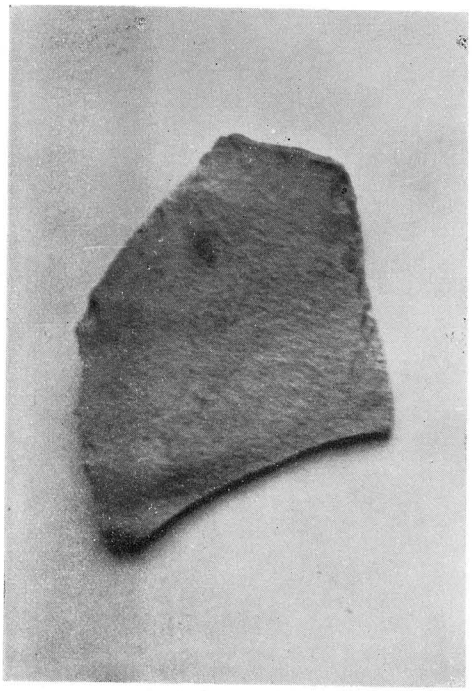
73 打　製　石　斧



74 打　製　石　斧



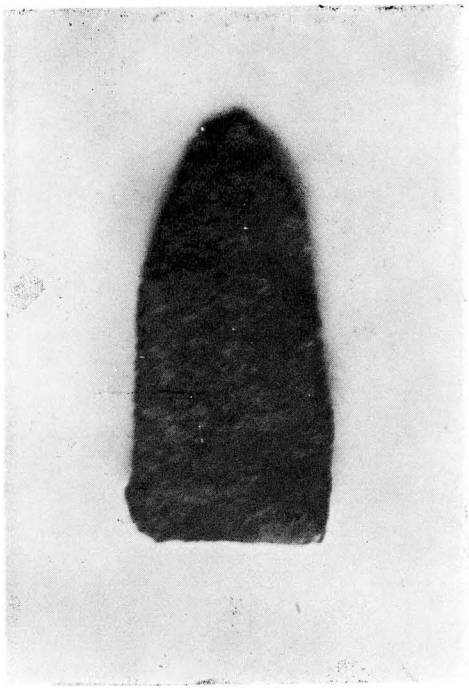
75 打　製　石　斧



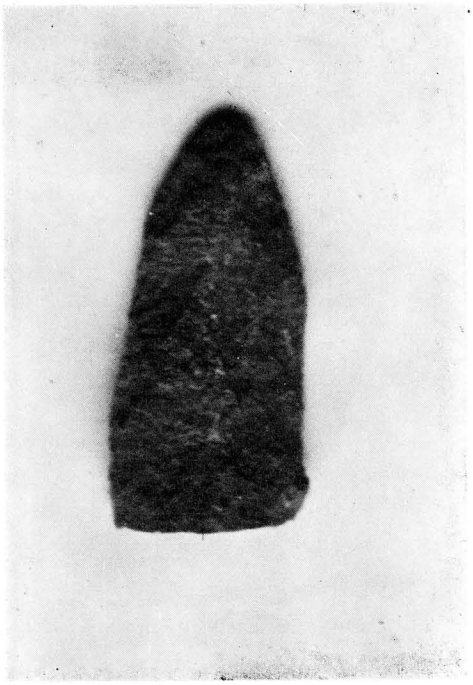
76 打　製　石　斧

77 打　製　石　斧

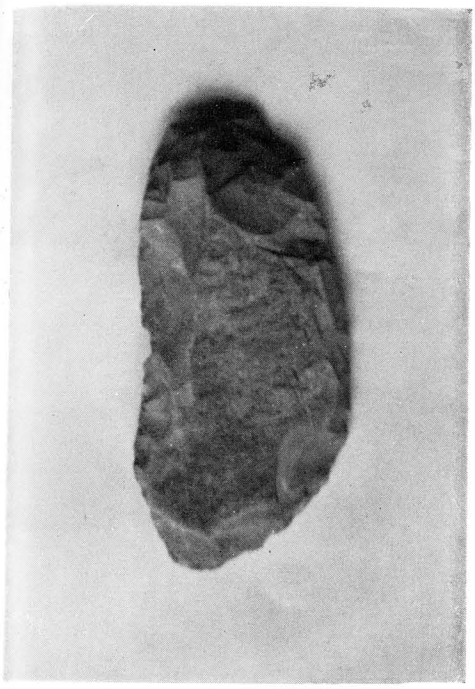
78 打　製　石　斧



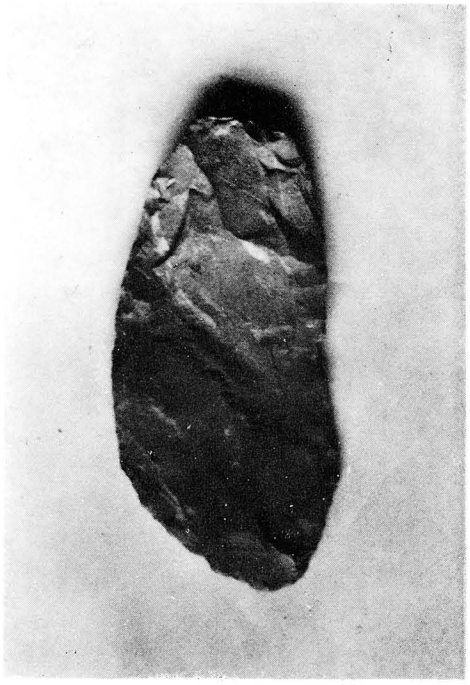
79 打　製　石　斧



80 打　製　石　斧

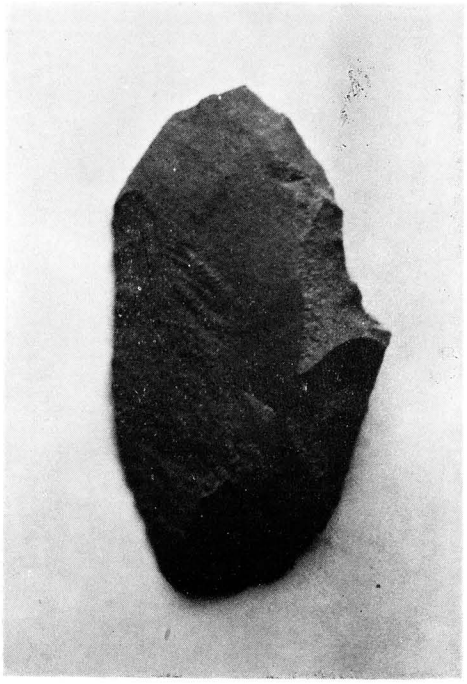


81 石 庖 丁 様 石 器

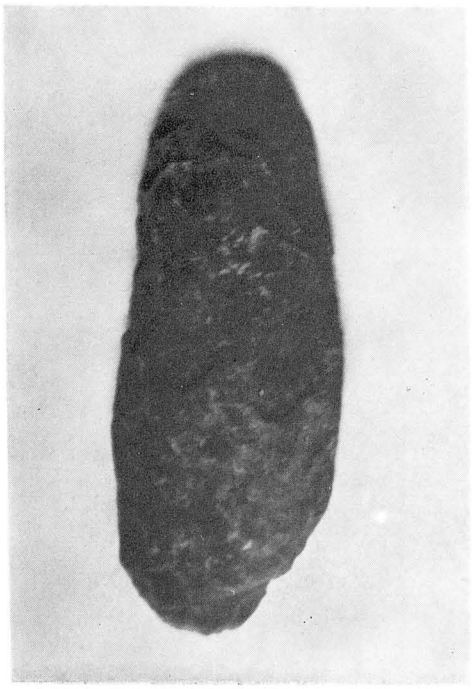


82 石 庖 丁 様 石 器

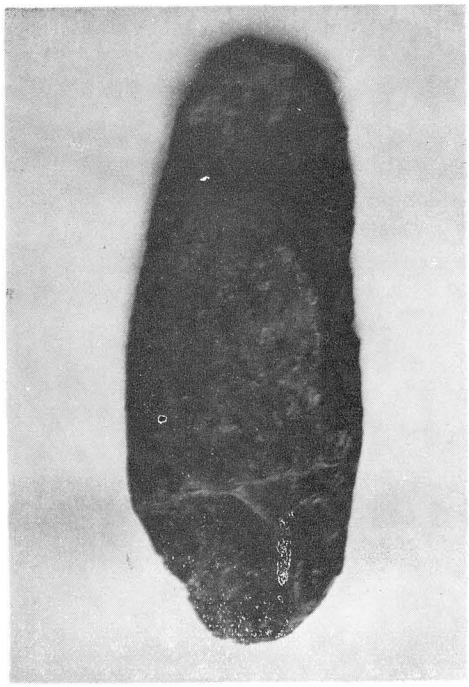
83 石 庖 丁 様 石 器



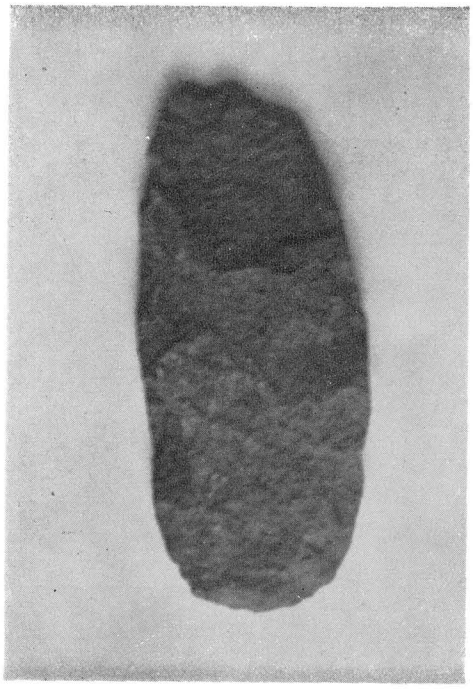
84 石 庖 丁 様 石 器



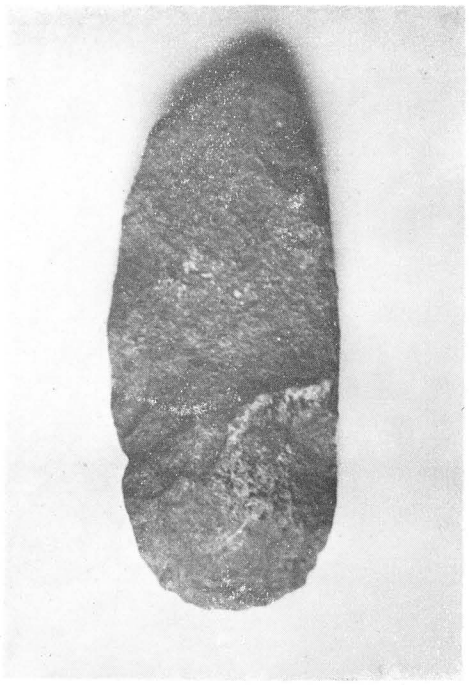
85 打　製　石　斧



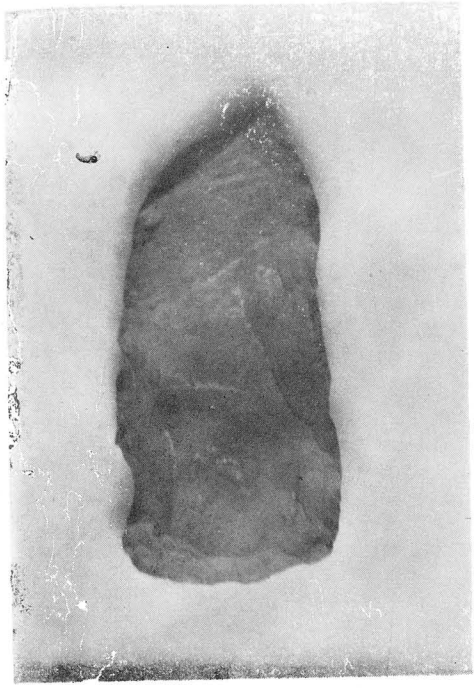
86 打　製　石　斧



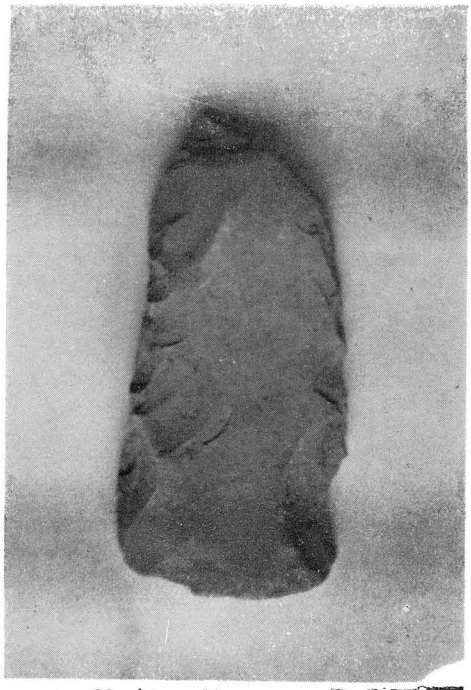
87 打　製　石　斧



88 打　製　石　斧



89 打　製　石　斧



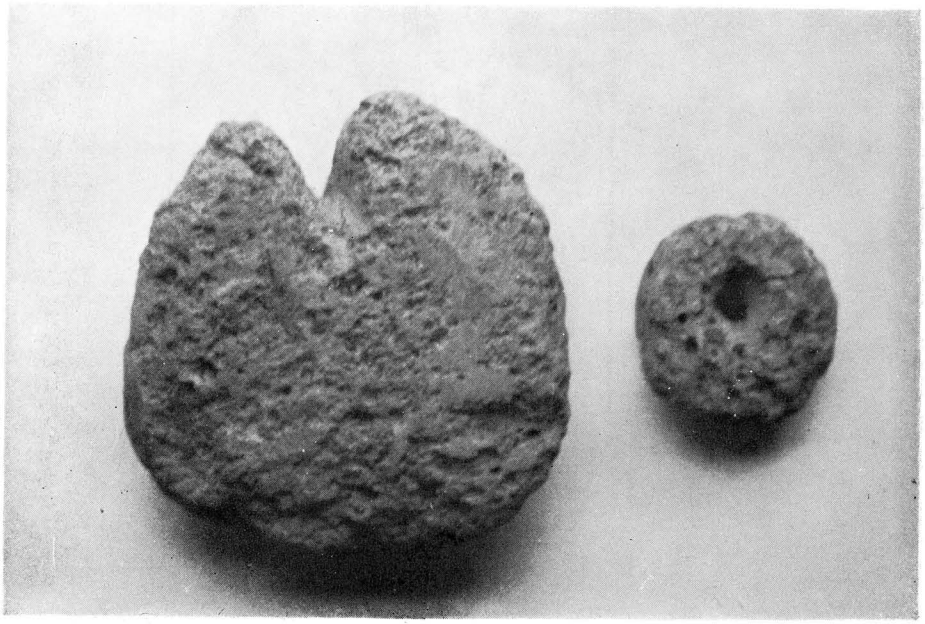
90 打　製　石　斧

91 打　製　石　斧

92 打　製　石　斧

93 揆　形　石　器

94 揆　形　石　器



95　浮　子

昭和三十七年三月二十五日　印刷
昭和三十七年三月三十日　発行

陣内遺跡

編集者　宮崎県教育庁社会教育課
発行者　宮崎県教育委員会
印刷所　愛文社印刷株式会社